

# Oracle Enterprise Manager

Oracle Enterprise Manager 構成ガイド

リリース 1.6.0

1998 年 9 月

部品番号: A61823-1

---

Oracle Enterprise Manager 構成ガイド、リリース 1.6.0

部品番号： A61823-1

第 1 版： 1998 年 9 月

原本名： Oracle Enterprise Manager Configuration Guide, Release 1.6.0

原本部品番号： A63732-01

原本協力者： Eric Belden, Muralidharan Bhoopathy, Maureen Byrne, Erik DeMember, Jorge Fox, Jacqueline Gosselin, Todd Guay, Daniela Hansell, Marilyn Hollinger, John Kennedy, Dennis Lee, Priscilla Lee, Nahed Majzoub, Dimitris Nakos, Mark Osborn, Linda Pratt, Hanne Rasmussen, Geoffrey Rego, Bert Rich, Jonathan Riel, Marilyn Roncati, Gaylen Royal, Vipul Shah, and Jon Soule.

Copyright © Oracle Corporation 1996, 1998

All rights reserved.

Printed in Japan.

制限付権利の説明

プログラムの使用、複製、または開示は、オラクル社との契約に記された制約条件に従うものとします。

危険な用途への使用について

当社製品は、原子力、航空産業、大量輸送、または医療の分野など、本質的に危険が伴うアプリケーションを用途として特に開発されておられません。当社製品を上述のようなアプリケーションに使用することについての安全確保は顧客各位の責任と費用により行っていただきたく、万一かかる用途での使用によりクレームや損害が発生いたしましても、当社および開発元である米国 Oracle Corporation（その関連会社も含まれます）は一切責任を負いかねます。

本書の情報は、予告なしに変更されることがあります。本書に問題を見つけたら、当社にコメントをお送りください。オラクル社は、本書の無謬性を保証しません。

ORACLE は、Oracle Corporation の登録商標です。

本文中の他社の商品名は、それぞれ各社の商標または登録商標です。

---

---

# 目次

|  |             |
|--|-------------|
| はじめに.....  | vii         |
| <b>1 エージェントの構成</b>                                   |             |
| <b>Windows NT でのインテリジェント・エージェントのインストール.....</b>      | <b>1-2</b>  |
| <b>Windows NT での SNMP の構成.....</b>                   | <b>1-2</b>  |
| <b>Windows NT でのインテリジェント・エージェントの構成.....</b>          | <b>1-2</b>  |
| エージェントの検出アルゴリズム.....                                 | 1-2         |
| ジョブの実行のための Windows NT ユーザー・アカウントの作成.....             | 1-3         |
| 新規 NT ユーザー・アカウントの作成.....                             | 1-4         |
| 既存の NT ユーザー・アカウントへの権限の割当て.....                       | 1-4         |
| エージェント・ユーザーとしてのドメイン・ユーザーの構成.....                     | 1-5         |
| NT エージェント操作の制御.....                                  | 1-5         |
| Windows NT でのインテリジェント・エージェントの起動.....                 | 1-6         |
| Windows NT でのインテリジェント・エージェントの停止.....                 | 1-6         |
| エージェントの実行の確認.....                                    | 1-6         |
| DOS プロンプトからの起動、停止およびステータスの確認.....                    | 1-7         |
| 起動しない NT エージェントのトラブルシューティング.....                     | 1-7         |
| <b>UNIX での Oracle Intelligent Agent のインストール.....</b> | <b>1-8</b>  |
| <b>root.sh シェル・スクリプトの実行.....</b>                     | <b>1-8</b>  |
| root.sh が正常に実行されたことの確認.....                          | 1-10        |
| root.sh の実行.....                                     | 1-10        |
| <b>UNIX での SNMP の構成.....</b>                         | <b>1-11</b> |
| <b>UNIX でのインテリジェント・エージェントの構成.....</b>                | <b>1-11</b> |
| エージェントの検出アルゴリズム.....                                 | 1-11        |
| SORATAB/ORATAB システム環境の設定.....                        | 1-12        |
| UNIX エージェント操作の制御.....                                | 1-13        |

|  |      |
|--|------|
| 起動しない UNIX エージェントのトラブルシューティング .....                    | 1-13 |
| <b>データ収集サービスの構成</b> .....                              | 1-14 |
| 要件.....  | 1-15 |
| Data Gatherer のアップグレード.....                            | 1-15 |
| NT および UNIX のデータ収集サービス操作の制御 .....                      | 1-16 |
| Windows NT での操作制御のその他の方法.....                          | 1-16 |
| データ収集サービスが実行中であることの確認.....                             | 1-17 |
| <b>Oracle Intelligent Agent および Oracle Names</b> ..... | 1-17 |
| <b>エージェントに必要なロールとユーザー</b> .....                        | 1-18 |
| <b>Oracle NT DB のためのパスワード・ファイルの作成</b> .....            | 1-19 |

## 2 コンソールの構成

|  |      |
|--|------|
| <b>リポジトリ・ユーザー・アカウントの設定</b> .....                             | 2-2  |
| リポジトリ専用の表領域の作成.....  | 2-2  |
| ユーザーの作成.....   | 2-3  |
| <b>リポジトリの作成</b> .....  | 2-4  |
| <b>Oracle Enterprise Manager の起動</b> .....                   | 2-6  |
| <b>リポジトリの接続</b> .....  | 2-6  |
| <b>ネットワーク・サービスの検出</b> .....                                  | 2-7  |
| <b>Oracle Enterprise Manager コンソールおよび Oracle Names</b> ..... | 2-9  |
| <b>Oracle Enterprise Manager DBA アプリケーションの起動</b> .....       | 2-10 |
| <b>作業環境の設定</b> .....   | 2-11 |
| <b>バックアップまたは SYSDBA 管理のためのリモート・データベースの構成</b> .....           | 2-11 |
| サーバー側 ( UNIX ) : .....                                       | 2-12 |
| クライアント側 ( Windows NT ) : .....                               | 2-12 |
| バックアップ・モードの設定.....   | 2-13 |
| <b>Oracle8 のためのリカバリ・カタログの設定および登録</b> .....                   | 2-14 |
| リカバリ・カタログの設定.....  | 2-14 |
| 表領域の作成.....  | 2-14 |
| ユーザーの作成.....   | 2-15 |
| catrman スクリプトの実行 .....                                       | 2-15 |
| リカバリ・カタログの Oracle8 Recovery Manager (GUI) への登録.....          | 2-16 |
| <b>電子メールの送信時の日本語文字のコード化</b> .....                            | 2-16 |
| <b>トラブルシューティング</b> .....                                     | 2-17 |

### 3 管理パックの構成

|  |     |
|--|-----|
| <b>Oracle Diagnostics Pack の設定</b> .....         | 3-2 |
| Oracle TopSessions の設定 .....                     | 3-2 |
| Oracle Trace の設定 .....                           | 3-3 |
| Oracle 8 サーバー収集での Oracle Trace の使用.....          | 3-3 |
| Oracle 7.3 サーバー収集での Oracle Trace の使用.....        | 3-4 |
| Oracle Trace のリポジトリ表の作成 .....                    | 3-4 |
| Oracle Trace のフォーマット表の作成 .....                   | 3-4 |
| その他の構成情報.....                                    | 3-5 |
| Oracle Performance Manager の設定.....              | 3-5 |
| 旧 Oracle Performance Manager のユーザー定義のグラフの変換..... | 3-5 |
| パラレル・サーバーでの Oracle Performance Manager の使用.....  | 3-6 |
| <b>Oracle Tuning Pack の設定</b> .....              | 3-7 |
| Oracle Tablespace Manager の設定.....               | 3-7 |
| Oracle Expert の設定 .....                          | 3-7 |
| Oracle SQL Analyze の設定.....                      | 3-8 |

### A 構成ファイル

|                                  |     |
|----------------------------------|-----|
| <b>構成ファイル</b> .....              | A-2 |
| コンソール・マシン用の構成.....               | A-2 |
| sqlnet.ora .....                 | A-2 |
| tnsnames.ora .....               | A-3 |
| 管理対象ノード用の構成.....                 | A-4 |
| sqlnet.ora .....                 | A-4 |
| tnsnames.ora .....               | A-4 |
| listener.ora.....                | A-5 |
| 7.3.3 以前のエージェント専用の snmp.ora..... | A-6 |
| snmp_ro.ora .....                | A-6 |
| snmp_rw.ora.....                 | A-7 |
| services.ora.....                | A-7 |
| snmp*.ora ファイル用のパラメータ .....      | A-7 |

### B ディレクトリ構造

|  |     |
|--|-----|
| <b>Oracle Enterprise Manager のディレクトリ構造</b> ..... | B-2 |
| Oracle Enterprise Manager コンポーネント .....          | B-2 |

|                               |     |
|-------------------------------|-----|
| ネットワーク・ファイル.....              | B-4 |
| インテリジェント・エージェントのディレクトリ構造..... | B-4 |

## C ヒント

|                                       |     |
|---------------------------------------|-----|
| トラブルシューティング.....                      | C-2 |
| システム・レジストリ・エラー.....                   | C-2 |
| ジョブ制御およびイベント管理システム.....               | C-2 |
| インテリジェント・エージェント.....                  | C-2 |
| NT のインテリジェント・エージェント起動時のエラー・メッセージ..... | C-3 |
| 任意の SID への接続性のテスト.....                | C-4 |
| ローカル・データベースの手動での定義.....               | C-5 |
| リポジトリの手動での作成、削除またはアップグレード.....        | C-5 |
| オンライン・ヘルプの使用.....                     | C-6 |

## 用語集

## 索引

---

# はじめに

この章では、このマニュアルの目的と構成について説明します。「はじめに」には、次の情報が含まれています。

- 「このマニュアルの目的」(viii ページ)
- 「このマニュアルの対象読者」(viii ページ)
- 「このマニュアルの構成」(viii ページ)
- 「ドキュメント・セット」(ix ページ)
- 「関連資料」(xi ページ)
- 「このマニュアルの表記規則」(xii ページ)

## このマニュアルの目的

このマニュアルでは、Oracle Enterprise Manager の構成方法を説明します。Oracle Enterprise Manager とは、分散データベース環境で Oracle を視覚的に管理し、ネットワークを行うためのツールです。

プログラムの更新、Oracle Enterprise Manager を使う上での重要な注意点およびオンライン・ドキュメントについては、「Oracle Enterprise Manager Readme」を参照してください。

構成手順の完了後、Oracle Enterprise Manager の使用方法については、「Oracle Enterprise Manager オンライン・ヘルプ」または『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

## このマニュアルの対象読者

このマニュアルは、Oracle Enterprise Manager をインストールするデータベース管理者およびシステム管理者を対象としています。

## このマニュアルの構成

このマニュアルは、次の章から構成されています。

| 章                | 説明  |
|------------------|---|
| 第 1 章「エージェントの構成」 | この章では、Oracle Intelligent Agent の構成について説明します。                                  |
| 第 2 章「コンソールの構成」  | この章では、Oracle Enterprise Manager の起動方法について説明します。また、データベースへの接続方法についても説明します。     |
| 第 3 章「管理パックの構成」  | この章では、Oracle Software Manager のインストール手順について説明します。                             |
| 付録 A「構成ファイル」     | この付録では、Oracle Enterprise Manager の構成に必要なファイルについて説明します。                        |
| 付録 B「ディレクトリ構造」   | この付録では、Oracle Enterprise Manager コンポーネントおよびインテリジェント・エージェントのディレクトリ構造について説明します。 |
| 付録 C「ヒント」        | この付録では、Oracle Enterprise Manager の操作を正常に行うために役立つヒントを説明します。                    |
| 用語集              | この用語集には、Oracle Enterprise Manager 関連の用語とコンポーネントの定義がリストされています。                 |

## ドキュメント・セット

このマニュアルでは構成プロセスだけが説明されているので、Oracle Enterprise Manager の詳細は次の資料を参照してください。

### Oracle Enterprise Manager の基本となるドキュメンテーション

- 『Oracle Enterprise Manager Readme』では、オンライン・マニュアルに関する重要な注意事項、ソフトウェアの更新、その他の最新情報について説明します。
- 『Oracle Enterprise Manager インストレーション・ガイド』では、Oracle Enterprise Manager のインストールに関する情報について説明します。
- 『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』では、Oracle Enterprise Manager、Oracle のシステム管理コンソール、共通サービス、および統合プラットフォーム・ツールの使用方法について説明します。
- 『Oracle Enterprise Manager 概説』では、Oracle Enterprise Manager の概要を説明します。
- 『Oracle Enterprise Manager アプリケーション開発者ガイド』では、Oracle Enterprise Manager コンソールとの外部インターフェースのプログラミングについて説明します。
- 『Oracle Enterprise Manager メッセージ・マニュアル』では、Oracle Enterprise Manager のエラー・メッセージとメッセージの診断方法について説明します。

### Oracle Enterprise Manager Change Management Pack ドキュメンテーション

- 『Oracle Enterprise Manager Change Management Pack Readme』では、Change Management Pack オンライン・マニュアルに関する重要な注意事項、ソフトウェアの更新、その他の最新情報について説明します。
- 『Oracle Enterprise Manager Oracle Change Management Pack スタート・ガイド』では、Oracle Change Management Pack アプリケーションの概念と機能の概要について説明します。

### Oracle Enterprise Manager Diagnostics Pack ドキュメンテーション

- 『Oracle Enterprise Manager Diagnostics Pack Readme』では、Diagnostics Pack オンライン・マニュアルに関する重要な注意事項、ソフトウェアの更新、その他の最新情報について説明します。
- 『Oracle Enterprise Manager Oracle Performance Manager および Oracle Capacity Planner スタート・ガイド』では、Oracle Performance Manager および Oracle Capacity Planner アプリケーションの概念と機能の概要について説明します。
- 『Oracle Enterprise Manager Oracle Trace ユーザーズ・ガイド』では、Oracle データベースを監視するための履歴データを獲得する Oracle Trace アプリケーションの使用方法を説明します。
- 『Oracle Enterprise Manager Oracle Trace 開発者ガイド』では、Oracle Trace ルーチンのユーザー・アプリケーションへの組み込み方法を説明します。

- 『Oracle Enterprise Manager Oracle TopSessions および Oracle Lock Manager スタート・ガイド』では、Oracle TopSessions および Oracle Lock Manager アプリケーションの概念と機能の概要について説明します。

#### Oracle Enterprise Manager Tuning Pack ドキュメンテーション

- 『Oracle Enterprise Manager Tuning Pack Readme』では、Tuning Pack オンライン・マニュアルに関する重要な注意事項、ソフトウェアの更新、その他の最新情報について説明します。
- 『Oracle Enterprise Manager Oracle Expert ユーザーズ・ガイド』では、初期の構成中に、また、データベース操作の実行中に、ユーザーのデータベース環境のパフォーマンスを最適化するための Oracle Expert の使用方法について説明します。
- 『Oracle Enterprise Manager Oracle SQL\*Analyze スタート・ガイド』では、Oracle SQL\*Analyze アプリケーションの概念と機能の概要について説明します。
- 『Oracle Enterprise Manager Oracle Tablespace Manager スタート・ガイド』では、Oracle Tablespace Manager アプリケーションの概念と機能の概要について説明します。

Oracle Enterprise Manager マニュアルの他に、Oracle Enterprise Manager のコンポーネントには詳細なオンライン・ヘルプが提供されています。

## 関連資料

『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』では、関連資料の重要な情報を参照しています。このマニュアルで参照する関連資料を次にリストします。

- Oracle Server とその動作方法に関する概要は、『Oracle Server 概要』を参照してください。
- Oracle Server の管理の詳細は、『Oracle Server 管理者ガイド』を参照してください。
- Oracle の前バージョンからの移行の手順は、『Oracle Server 移行ガイド』を参照してください。
- Oracle の SQL コマンドとファンクションの詳細は、『Oracle Server SQL リファレンス』を参照してください。
- Oracle Server にバンドルされているユーティリティの詳細は、『Oracle Server SQL リファレンス』を参照してください。
- Oracle のメッセージとコードの詳細は、『Oracle Server エラー・メッセージ』を参照してください。
- Oracle ネットワーキング・システムの詳細は、ご使用のネットワーク固有のマニュアルを参照してください。
- Windows NT での Oracle Server の詳細は、『Oracle Server for Windows NT インストールおよびユーザーズ・ガイド』と入手可能なシステム・リリース・ノートを参照してください。
- Oracle Parallel Server の詳細は、『Oracle Parallel Server Management 構成ガイド』を参照してください。Oracle8 Server を Oracle Parallel Server および Oracle Enterprise Manager と一緒に使うための準備について主要な情報が提供されています。クイック・スタートの項では、Oracle Parallel Server Management をすぐに使い始めるために実行する必要があるサーバー関連のステップとコンソール関連のステップがすべてリストされています。

**注意：** このマニュアルは、UNIX プラットフォームで OPS を設定する管理者だけを対象としています。インストール方法については、プラットフォーム固有のインストール・ガイドを参照してください。

『Oracle Parallel Server Management ユーザーズ・ガイド』では、Oracle Enterprise Manager コンソールを使って Oracle Parallel Server を監視し、制御するための情報が提供されています。

## このマニュアルの表記規則

このマニュアルには例が示されています。これは、ユーザーがダイアログ・ボックスに入力しなければならないテキストの例です。

D:¥WINDOWS.PRD

例のテキストは、本文のテキストとは異なるフォントで表記されていますので注意してください。

このマニュアルの例では、次の規則が使われています。

- ユーザーが入力するコマンドの例は、大文字で表記されます。
- 参照するメニュー項目やボタンは、かぎカッコ（「」）で囲まれています。

# 1

---

## エージェントの構成

Oracle Intelligent Agent は、ネットワークのリモート・ノードで実行されるプロセスです。Oracle Enterprise Manager では、インテリジェント・エージェントによって、リモート・サイトにおけるジョブの実行、イベントの監視およびデータの収集を行い、常駐するノードのサービスを検出します。

この「エージェントの構成」の章では、次の項目について説明します。

- 1-2 ページの「Windows NT でのインテリジェント・エージェントのインストール」
- 1-2 ページの「Windows NT での SNMP の構成」
- 1-2 ページの「Windows NT でのインテリジェント・エージェントの構成」
- 1-8 ページの「UNIX での Oracle Intelligent Agent のインストール」
- 1-8 ページの「root.sh シェル・スクリプトの実行」
- 1-11 ページの「UNIX での SNMP の構成」
- 1-11 ページの「UNIX でのインテリジェント・エージェントの構成」
- 1-14 ページの「データ収集サービスの構成」
- 1-17 ページの「Oracle Intelligent Agent および Oracle Names」
- 1-18 ページの「エージェントに必要なロールとユーザー」
- 1-19 ページの「Oracle NT DB のためのパスワード・ファイルの作成」

Oracle Enterprise Manager をインストールまたはご使用前に、Oracle Enterprise Manager の README にある互換性マトリックスをチェックしてください。README は、`$ORACLE_HOME\SYSTEM\ADMIN` ディレクトリにあります。

## Windows NT でのインテリジェント・エージェントのインストール

インテリジェント・エージェントは、データベースに付属しており、リモートの管理対象マシンにインストールされます。インテリジェント・エージェントは、ORACLE\_HOME ディレクトリにインストールする必要があります。エージェントは、OracleAgent というサービスとしてインストールされます。

インテリジェント・エージェントとともにインストールされる Data Gatherer は、Oracle Capacity Planner および Java ベースの新しい Oracle Performance Manager で使用するパフォーマンス・データを収集します。データ収集サービス・エージェントの構成とアップグレードの詳細は、1-14 ページの「データ収集サービスの構成」を参照してください。

インテリジェント・エージェントのインストールの詳細は、『Oracle Enterprise Manager インストール・ガイド』を参照してください。

## Windows NT での SNMP の構成

コンソールの監視では、SNMP Master Agent を使って、インテリジェント・エージェントと通信します。SNMP Master Agent および Oracle Intelligent Agent は、SNMP を通して Master Agent への通信が可能になる前に、正しく構成する必要があります。

Oracle データベースおよび Oracle Enterprise Manager に対して SNMP の構成を行う一般的な手順は、『Oracle SNMP サポート・リファレンス・ガイド』を参照してください。

より包括的な SNMP の構成情報については、プラットフォームにより異なるので、ご使用のプラットフォーム専用のインストール・ガイドまたは構成ガイドを参照してください。

## Windows NT でのインテリジェント・エージェントの構成

この項には、次の項目があります。

- 1-2 ページの「エージェントの検出アルゴリズム」
- 1-3 ページの「ジョブの実行のための Windows NT ユーザー・アカウントの作成」

### エージェントの検出アルゴリズム

起動時に、Windows NT レジストリ、listener.ora ファイルおよび tnsnames.ora ファイル（存在する場合）から構成パラメータを読み込むスクリプトが実行されます。

エージェントでは、インストールされているマシン上の新規サービスを検出して、構成ファイル snmp\_ro.ora、snmp\_rw.ora および services.ora の作成、書き直または構成ファイルへの追加が行われます。

そのマシンで使用可能なサービス（エージェントによって管理されるサービス）を判別するために、エージェントでは次の検出アルゴリズムが使われます。

1. エージェントによって Windows NT のレジストリが読み込まれ、そのマシンにインストールされているサービスの値が調べられます。
2. サービスの値に基づき、エージェントでは listener.ora ファイルが読み込まれ、そのリスナーによって処理されるデータベースの SID と ORACLE\_HOME が判別されません。
3. エージェントでは listener.ora ファイルを読み込み、それらのデータベースのグローバル名 (GLOBAL\_DBNAME パラメータ) も調べられます。
4. GLOBAL\_DBNAME パラメータが listener.ora で見つからない場合、エージェントでは、TNS\_ADMIN 環境変数によって設定されている位置で tnsnames.ora ファイルが検索されます。
5. ORACLE\_HOME の下の環境またはレジストリのいずれかで TNS\_ADMIN 変数が設定されていない場合、標準の位置の \$ORACLE\_HOME¥net80¥ADMIN で tnsnames.ora ファイルが検索されます。
6. tnsnames.ora が見つからない場合、データベースの別名 <SID>\_<hostnames> がデータベース・サービスに割り当てられます。サービスはこの別名によってエージェントに認識され、Oracle Enterprise Manager コンソールではその別名が表示されます。

TNSNAMES.ORA 中に同じインスタンスに対する複数の別名がある場合、エージェントでは最初にリストされているものが使われます。異なる別名を使用する場合、TNSNAMES.ORA のエントリを並べ替えてからエージェントを再起動します。

---

---

**注意：** エージェントが常駐するノードにデータベースまたはその他の新規サービスをインストールする場合、エージェントを再起動して、エージェントの構成ファイルに新規サービスを追加しなければなりません。

---

---

## ジョブの実行のための Windows NT ユーザー・アカウントの作成

エージェントによって、管理対象ノードでジョブを実行するには、次の要件が必要です。

- 拡張ユーザー権限「バッチジョブとしてログオン」がある NT ユーザー・アカウントがなければなりません。権限は、既存のローカル・ユーザーまたはドメイン・ユーザー、または新規 NT ユーザーに割り当てられます。
- Oracle Enterprise Manager コンソールで、そのユーザーにノードの優先接続情報リストが設定されていなければなりません。2-11 ページの「作業環境の設定」を参照してください。
- ユーザーは、ORACLE\_HOME¥NET80 ディレクトリへの読み書き許可と、TEMP ディレクトリまたは ORACLE\_HOME ディレクトリへの書き込み許可が必要です。

---

---

**注意:** 「バッチ ジョブとしてログオン」権限を設定しない場合、ノードでジョブを実行すると、「Failed to authenticate user (ユーザーの認証の失敗)」というメッセージが表示されます。

---

---

次にあげるいずれかの手順に従ってください。

### 新規 NT ユーザー・アカウントの作成

(データベースではなく) ローカルの NT マシンに新規の Windows NT ユーザー・アカウントを作成し、このユーザーに「バッチ ジョブとしてログオン」権限を付与するには、次の手順に従ってください。

1. 「管理ツール」プログラムグループから「ユーザー マネージャー」を選択します。このツールの詳細は、Windows NT のマニュアルを参照してください。
2. 「ユーザー」メニューから「新しいユーザー」を選択して、次のことを確認します。
  - 「ユーザーは次回のログイン時にパスワード変更が必要」オプション・ボックスがチェックされていない。
  - ユーザー名として「SYSTEM」または「system」が使われていない。
3. 「ユーザー マネージャー」ユーティリティの「原則」メニューで、「ユーザーの権利」オプションを選択します。
4. 「高度なユーザー権利の表示」ボックスをチェックします。
5. 権限リストから「バッチ ジョブとしてログオン」を選択します。
6. 選択したユーザーにこの権限を付与します。

### 既存の NT ユーザー・アカウントへの権限の割当て

既存のローカル・ユーザー・アカウントに権限を割り当てるには、次のステップを実行します。

1. 「ユーザー マネージャ」パネルでユーザーを選択し、次のことを確認します。
  - 「ユーザーは次回のログイン時にパスワード変更が必要」オプション・ボックスがチェックされていない。
  - ユーザー名として「SYSTEM」または「system」が使われていない。
2. 「ユーザー マネージャー」ユーティリティの「原則」メニューで、「ユーザーの権利」オプションを選択します。
3. 「高度なユーザー権利の表示」ボックスをチェックします。
4. 権限リストから「バッチ ジョブとしてログオン」を選択します。

5. 拡張ユーザー権限をこのユーザーに付与します。

## エージェント・ユーザーとしてのドメイン・ユーザーの構成

---

**注意：** ドメイン・ユーザーは、7.3.3 以前のバージョンのエージェントではサポートされません。

---

エージェント・ユーザーとしてドメイン・ユーザーを構成するには、次のステップを実行してください。

1. 「ユーザー マネージャー」ユーティリティの「原則」メニューで、「ユーザーの権利」オプションを選択します。
2. 「高度なユーザー権利の表示」ボックスをチェックします。
3. 権限リストから「バッチ ジョブとしてログオン」を選択します。
4. 「追加」ボタンをクリックします。
  - a. 「ドメインまたはコンピュータ」フィールドに入力します（ドメインの選択）。
  - b. 「ユーザーの表示」ボタンをクリックします。
  - c. リストボックスでドメイン・ユーザーを選択します。
  - d. 「追加」をクリックします。
  - e. 「OK」をクリックします。
5. 「ユーザー権利の表示」ウィンドウで「OK」をクリックします。

---

**注意：** ローカル・ユーザーとドメイン・ユーザーの名前が同じである場合、ローカル・ユーザーが優先されます。

---

## NT エージェント操作の制御

この項には、Windows NT および DOS プロンプトによってエージェントを制御する際の情報が含まれています。また、エージェントのトラブルシューティングに関する項目も含まれています。

---

---

**注意：** Oracle Enterprise Manager とエージェントでは、Net8 を使用して当該データベースと通信します。エージェントの使用を試行する前に、Net8 がすべての当該 SID と接続できることを確認してください。

---

---

### Windows NT でのインテリジェント・エージェントの起動

Windows NT でエージェントを起動するには、次のステップを実行します。

1. 「コントロールパネル」フォルダ内の「サービス」アイコンをダブルクリックします。
2. OracleAgent サービスを選択します。

「スタートアップの種類」は「手動」に設定されており、ユーザーがエージェントを起動できます。システムの起動時にエージェントを自動的に起動するには、「スタートアップの種類」を「自動」に設定します。

  - a. 「スタートアップ」ボタンをクリックします。「サービス」ダイアログ・ボックスが表示されます。
  - b. 「スタートアップの種類」で「自動」を選択します。
  - c. 「サービス」ダイアログ・ボックスで「OK」をクリックします。
3. 「起動」ボタンをクリックして、エージェントを起動します。

### Windows NT でのインテリジェント・エージェントの停止

Windows NT でエージェントを停止するには、次のステップを実行します。

1. 「コントロールパネル」フォルダ内の「サービス」アイコンをダブルクリックします。
2. OracleAgent サービスを選択します。
3. 「停止」ボタンをクリックして、エージェントを停止します。

### エージェントの実行の確認

エージェントが実行中であることを確認するには、コントロールパネル・サービスでそのステータスを探るか、コマンド・プロンプトで netstart を入力します。OracleAgent が、サービスのリストに表示されるはずですが。

また、NT タスクマネージャを表示して、dbsnmp プロセスの情報を参照することもできます。

## DOS プロンプトからの起動、停止およびステータスの確認

DOS コマンド・プロンプトからエージェントを起動または停止するには、適切なコマンドを入力します。DOS コマンド・プロンプトからは、サービスが実行中であることも確認できません。

| 実行する処理                     | 入力するコマンド                           |
|----------------------------|------------------------------------|
| DOS プロンプトからエージェントを起動       | <code>net start oracleagent</code> |
| DOS プロンプトからエージェントを停止       | <code>net stop oracleagent</code>  |
| DOS プロンプトからエージェントのステータスを確認 | <code>net start</code>             |

## 起動しない NT エージェントのトラブルシューティング

コントロールパネルで OracleAgent サービスを調べて、エージェント・サービスが稼働していることを確認してください。エージェントが起動しなかった場合、次のヒントのいずれかによって対応してください。

- （管理ツールの）NT イベントビューアに書き込まれているメッセージを調べます。ここでは、起動に関連する問題が NT エージェントによって書き込まれています。
- snmp\_ro.ora、snmp\_rw.ora および services.ora が起動時にエージェントによって作成されているかどうかを調べます。snmp\_ro.ora および snmp\_rw.ora は、`ORACLE_HOME\NET80\admin` ディレクトリに、services.ora は `ORACLE_HOME\NET80\agent` ディレクトリにあります。  
  
リストされているサービスと、マシンで使用可能なサービスとを比較します。有効なサンプル・ファイルについては、付録 A 「構成ファイル」を参照してください。  
  
サービスが欠落している場合、次のファイルが矛盾または破損していないかどうか調べてください。
  - listener.ora
  - tnsnames.ora
- システム・パスを外部ドライブに設定していないことを確認します。  
  
エージェントはサービスであり、デフォルトでは SYSTEM として実行されます。エージェントには、`ORACLE_HOME/BIN` ディレクトリの DLL も必要です。マップされたドライブがパスに必要な場合、それらを SYSTEM パスに設定してはいけません。  
  
固有のパスを設定するには、次のようにします。
  - a. マップされたドライブ・パスを SYSTEM パス変数から固有のパスに移動します。
  - b. リポートしてシステム・パスを「設定解除」します。
- TCP/IP がインストールされているかどうかを確認します。TCP/IP は必須要件です。

5. エージェントが起動しなかった理由が依然として不明な場合、エージェントをトレースします。
  - a. 次の `snmp_rw.ora` の変数を設定します。

```
nmi.trace_level=admin (または、最大限の情報が必要な場合には 16)
nmi.trace_directory=<Oracle ユーザーが書き込み権限を保有する任意のディレクトリ>
```
  - b. エージェントを再起動します。
  - c. `ORACLE_HOME/NET80/LOG` ディレクトリにあるログファイルを調べます。  
`NMI.LOG` では、エージェントの一般的な問題が表示されます。  
`NMICONFIG.LOG` では、自動検出による問題が表示されます。
6. DNS ホストのエントリが、`listener.ora` ファイルおよび `tnsnames.ora` ファイルのノード名に設定されていることを確認します。
  - a. 「開始」ボタン → 「設定」 → 「コントロールパネル」 → 「ネットワーク」 → 「プロトコル」 → 「TCP/IP プロパティ」を実行します。
  - b. DNS ホストのエントリを調べます。たとえば、エントリが前のエンジニアの名前に設定されていないことを確認します。
7. デーモンのトレースをオンにします。
  - a. `net80/admin/sqlnet.ora` をオープンして、行 `daemon.trace_level=13` および `daemon.trace_directory=e:\orant\%net80%\trace` を追加します。
  - b. コンソールをクローズしてデーモンを停止します。
  - c. コンソールをオープンしてデーモンをトレース・モードで再起動します。
  - d. ジョブを発行して、`daemon.trc` ファイルを表示してデーモンとコンソールの問題があるかどうか調べます。

## UNIX での Oracle Intelligent Agent のインストール

『Oracle Enterprise Manager インストレーション・ガイド』に従って、Oracle CD-ROM から Oracle Intelligent Agent をインストールします。インテリジェント・エージェントは、独立したコンポーネントとして選択します。

## root.sh シェル・スクリプトの実行

エージェントを正常にインストールすると、Oracle Installer から `root.sh` の実行が要求されます。

`root.sh` はシェル・スクリプトであり、これにより `oratab` ファイルが更新または作成されます。`oratab` ファイルは、エージェントによって検出され、Oracle Enterprise

Manager によって制御されるすべてのデータベースへの参照をユーザーが配置するファイルです。作成されるデータベースごとに、エントリーは次の形式になります。

```
<SID>:<$ORACLE_HOME>:[Y/N]
```

エージェントは、通常、setuid プログラムとして root.sh によって構成されます。root.sh の実行に成功した場合、そのホストの優先接続情報リストに名前とパスワードが指定されたユーザーとしてエージェントがジョブを実行できるように、エージェントは setuid ルートとしてインストールされます。

setuid プログラムを実行するには、次のように指定します。

```
chown root dbstmp  
chmod 755 dbstmp
```

エージェントが setuid プログラムでない場合、すべての Enterprise Manager のジョブは、エージェントを起動したユーザーの許可により実行されます。

---

---

**注意：** setuid ルートに設定されたエージェントと、root ユーザーにエージェントを起動させるのでは結果が異なります。root ユーザーにエージェントを起動させると、セキュリティの問題が起こる可能性があります。setuid プログラムの詳細は、ご使用のプラットフォームのマニュアルを参照してください。

---

---

ノードの優先接続情報リストであるノード設定リストは、エージェントを起動するユーザーに設定する必要があります。「ファイル」→「作業環境」をクリックし、希望するノード名をハイライト表示した場合に表示されるのは、現行のユーザー名とパスワードです。

UNIX ノードにノード・ジョブを発行するユーザーは、最終的には ORACLE\_HOME の所有者であるか、UNIX でインテリジェント・エージェントを起動した同じユーザーである必要があります。root.sh で setuid set が設定されていない場合、エージェントに発行されるジョブは、上記のユーザーの権限で実行されます。root.sh によって、ユーザーはそのノードの優先接続情報リストを設定し、ジョブにその権限を付与できます。

---

---

**注意：** 1 つの UNIX マシンでは、複数の Oracle Home があっても、インテリジェント・エージェントは 1 つしか実行できないことに注意してください。

---

---

---

---

**注意：** 7.3.3 以前のエージェントでは、8.0.x データベースのインストールはお奨めできません。

---

---

## root.sh が正常に実行されたことの確認

root.sh が正常に実行されたことを確認するには、dbsnmp のファイル許可を調べます。

1. cd \$ORACLE\_HOME/bin を入力します。

これにより、実行可能エージェントが常駐する \$ORACLE\_HOME/bin ディレクトリにディレクトリが変更されます。

2. ls -al dbsnmp を入力します。

これにより、dbsnmp に関連する詳細がすべてリストされます。

dbsnmp の ls -al コマンドの出力は次の形式になります。

```
-rwsr-xr-x 1 root g651 1497980 Jun 12 21:04 dbsnmp
```

root は所有者です。dbsnmp は実行可能エージェントです。この例では、グループの名前は g651 です。root が所有者で、-rwsr-xr-x が許可である場合、root.sh は正常に実行されています。

## root.sh の実行

データベースの SID および Oracle ホームのエントリがないか oratab ファイルを調べます。oratab ファイルの位置については、1-11 ページの「エージェントの検出アルゴリズム」と、ご使用のオペレーティング・システム固有のマニュアルを参照してください。

Oracle ホームおよび SID の値は、root.sh シェル・スクリプトによって記述されている必要があります。oratab ファイルにエントリがない場合、次のステップを実行します。

1. 次のように入力して、ユーザーを root に切り替えます。

```
su root
```

2. 次のように入力して、ディレクトリを \$ORACLE\_HOME/orainst ディレクトリに変更します。

```
cd $ORACLE_HOME/orainst
```

3. 次のように入力して、root.sh シェル・スクリプトを実行します。

```
./root.sh
```

4. 質問に回答します。作成されるデータベースごとに、エントリは次の形式になります。

```
<SID>:<$ORACLE_HOME>:[Y/N]
```

root.sh は自動的に終了します。

## UNIX での SNMP の構成

コンソールの監視では、SNMP Master Agent を使って、インテリジェント・エージェントと通信します。SNMP Master Agent および Oracle Intelligent Agent は、SNMP を通して Master Agent への通信が可能なる前に、正しく構成する必要があります。

Oracle データベースおよび Oracle Enterprise Manager に対して SNMP の構成を行う一般的な手順は、『Oracle SNMP サポート・リファレンス・ガイド』を参照してください。

より包括的な SNMP の構成情報については、プラットフォームにより異なるので、ご使用のプラットフォーム専用のインストレーション・ガイドまたは構成ガイドを参照してください。

## UNIX でのインテリジェント・エージェントの構成

この項には、次の項目があります。

- 1-11 ページの「エージェントの検出アルゴリズム」
- 1-12 ページの「SORATAB/ORATAB システム環境の設定」

## エージェントの検出アルゴリズム

エージェントでは起動時に、インストールされているマシン上の新規サービスが検出され、構成ファイル `snmp_ro.ora`、`snmp_rw.ora` および `services.ora` が作成されます。

---

**注意：** エージェントの起動を試行する前に、`tnsnames` の別名を使用して Net8 の接続性をテストし、異なる SID に接続してください。エージェントは、`tnsnames.ora` および `listener.ora` の有効な構成に依存します。C-4 ページの「任意の SID への接続性のテスト」を参照してください。

---

そのマシンで使用可能なサービス（エージェントによって管理されるサービス）を判別するために、エージェントでは次の検出アルゴリズムが使われます。

1. エージェントでは、Oracle ホームおよび SID すべての値を調べるために `oratab` ファイルが読み込まれます。`oratab` ファイルは、プラットフォームにより、次のいずれかの位置にあります。
  - `/etc`
  - `/var/opt/oracle`
2. `oratab` で見つかった Oracle ホームの値に基づき、エージェントでは `listener.ora` ファイルが読み込まれ、そのリスナーによって処理されるデータベースが判別されず。

3. エージェントでは listener.ora ファイルを読み込み、それらのデータベースのグローバル名 (GLOBAL\_DBNAME パラメータ) も調べられます。
4. GLOBAL\_DBNAME パラメータが listener.ora ファイルで見つからない場合、エージェントでは、TNS\_ADMIN 環境変数によって設定されている位置で tnsnames.ora ファイルが検索されます。tnsnames.ora ファイルの標準の位置は \$ORACLE\_HOME/network/admin です。Solaris では、tnsnames.ora が /var/opt/oracle ディレクトリで見つかることがあります。その他の UNIX システムでは、tnsnames.ora が /etc ディレクトリで見つかることがあります。デフォルトの保存位置を使わない場合、\$TNS\_ADMIN 環境変数を設定できます。
5. TNS\_ADMIN 変数を設定しない場合、エージェントでは、標準の位置で tnsnames.ora ファイルが検索されます。たとえば、\$ORACLE\_HOME/NETWORK/admin が検索されません。
6. tnsnames.ora ファイルが見つからない場合、データベースの別名は <SID>\_<HOSTNAME> として作成されます。

TNSNAMES.ORA 中に同じインスタンスに対する複数の別名がある場合、エージェントでは最初に表示されているものが使われます。異なる別名を使用する場合、TNSNAMES.ORA のエントリを並べ替えてからエージェントを再起動します。

---

**注意:** エージェントが常駐するノードにデータベースまたはその他の新規サービスをインストールする場合、エージェントを再起動して、エージェントの構成ファイルに新規サービスを追加しなければなりません。

---

## \$ORATAB/ORATAB システム環境の設定

エージェントを起動する前に、\$ORATAB/ORATAB システム環境変数を設定することをお奨めします。

UNIX 上の 733 以降のエージェントでは、ORATAB ファイルが参照され、データベースのリストと、そのサーバーでのそれらの位置が読み取られます。ファイルの内容は次のようになります。

```
v732:/u01/oracle/product/7.3.2:n
```

```
v733:/u02/oracle/product/7.3.3:y
```

v732 および v733 は SID の名前で、その後 ORACLE\_HOME、自動開始を指定する “y” または “n” が続きます。

oratab 環境変数 (\$ORATAB) を設定するには、次のように入力します。

```
setenv ORATAB /etc/oratab
```

この例では、ORATAB はその環境変数を呼び出す名前であり、/etc/oratab は使用する位置およびファイルです。

## UNIX エージェント操作の制御

UNIX の場合、Oracle Enterprise Manager では `lsnrctl` を使ってエージェントが起動および停止されます。UNIX エージェントを制御する関連の `lsnrctl` コマンドは次のとおりです。

| 実行する処理                  | 入力するコマンド                           |
|-------------------------|------------------------------------|
| UNIX プラットフォームでエージェントを起動 | <code>lsnrctl dbsnmp_start</code>  |
| UNIX プラットフォームでエージェントを停止 | <code>lsnrctl dbsnmp_stop</code>   |
| エージェントのステータスを確認         | <code>lsnrctl dbsnmp_status</code> |

ご使用のプラットフォームの追加情報または制限については、`ORACLE_HOME/net80/agent/doc/readme.wri` または `ORACLE_HOME/network/agent/doc/readme.wri` にあるインテリジェント・エージェントの「readme」を参照してください。

## 起動しない UNIX エージェントのトラブルシューティング

エージェント・リスナーが作動していることを確認してください。次のコマンドを入力します。

```
lsnrctl dbsnmp_status
```

エージェントが起動しなかった場合、次のヒントのいずれかによって対応してください。

1. UNIX でのエラーの有無について `ORACLE_HOME/NETWORK/log/dbsnmp*.log` ファイルを調べます。
2. Oracle ユーザーに、`ORACLE_HOME/AGENT/LOG` と `ORACLE_HOME/NETWORK/AGENT` への書込み許可があることを確認します。
3. エージェントによって作成されたエントリがないか、`snmp_ro.ora`、`snmp_rw.ora` および `services.ora` を調べます。`snmp_ro.ora` および `snmp_rw.ora` は、`ORACLE_HOME/NETWORK/ADMIN` ディレクトリに、`services.ora` は `ORACLE_HOME/NETWORK/AGENT` ディレクトリにあります。

リストされているサービスと、マシンで使用可能なサービスとを比較します。有効なサンプル・ファイルについては、付録 A 「構成ファイル」を参照してください。

サービスが欠落している場合、次のファイルが矛盾または破損していないかどうか調べてください。

- `listener.ora`
- `tnsnames.ora`
- `oratab`

4. エージェントが起動しなかった理由が依然として不明な場合、snmp\_rw.ora に次の変数を設定してエージェントをトレースします。
  - nmi.trace\_level=admin (または、詳細情報が必要な場合には 16)
  - nmi.trace\_directory=<Oracle ユーザーが書き込める任意のディレクトリ>
  - nmi.trace\_file=agent
5. データベース・ソフトウェアをアップグレードし、生成された snmp\_ro.ora ファイル、snmp\_rw.ora ファイルまたは services.ora ファイルによってマシンのいずれかに問題が発生した場合、次の手順に従ってください。
  - a. (dbsnmp アカウントではなく) INTERNAL アカウントまたは SYS アカウントで catsnmp.sql を実行します。通常、catsnmp.sql スクリプトはデータベースの作成時に catalog.sql から実行されますが、この場合はアップグレードなので、このスクリプトをまだ実行していない可能性があります。必要なスクリプトを実行していない場合、dbsnmp アカウントは作成されません。
  - b. 複数の SID または古い SID が oratab で参照される場合、それぞれの SID についても catsnmp.sql を実行します。
  - c. snmp\_ro.ora ファイルは読み込み専用ファイルなので、ファイルへの変更はすべて、エージェントが起動されるたびに上書きされます。snmp\_rw.ora ファイルは (必要に応じて) 変更できます。

バックアップを行う場合、dbsnmp/dbsnmp アカウントで backups.sql を実行する必要があります。

---

**警告:** エージェントに付属する tcl スクリプト (ツール・コマンド言語で書かれた、ジョブおよびイベントのスクリプト) は変更しないでください。エージェントで定義済みのジョブ以外のジョブを発行する場合、任意のスクリプトで渡すことができる TCL ジョブを使用し、エージェントにそれらを実行させてください。

---

## データ収集サービスの構成

この項には、Oracle データベースおよびホストの情報を収集するデータ収集サービスの構成に関する情報が含まれます。

Oracle Data Gatherer は、Oracle Enterprise Manager フレームワークの一部であり、パフォーマンス・データを収集します。このパフォーマンス・データは、Oracle Capacity Planner と Java ベースの新しい Oracle Performance Manager で使われます。これら 2 つの製品のいずれも使用していない場合、エージェントのデータ収集サービスのインストールおよび構成は必要ありません。

## 要件

データ収集サービス (Oracle Data Gatherer) は、監視対象のターゲット (データベースまたはホスト) が物理的に設置されているホスト上に置くことを前提としています。データ収集サービスを利用してホストベースのパフォーマンス統計を収集するには、Oracle Data Gatherer を監視対象のホスト上に置く必要があります。

しかし、データベースのパフォーマンス統計を収集する場合には、Oracle Data Gatherer をそのデータベースが置かれているホスト上にインストールおよび構成する必要はありません。データベース統計はリモートから収集できるので、Oracle Data Gatherer を他のノード上にインストールおよび構成できます。Oracle Capacity Planner および Oracle Performance Manager の両方で、中間ノード上のデータ収集サービスを通じて、データベースのパフォーマンス統計にアクセスできます。

次のような場合、こうしたタイプの中間ノードのデータ収集が必要かまたは望ましいことがあります。

- 監視するデータベースが 8.0.4 より前のバージョンである場合。Oracle Data Gatherer は、Oracle データベース 8.0.4 から導入されたもので、8.0.4 より前のデータベースとインストールできる構成では、現在は利用できません。
- Data Gatherer は、監視対象のデータベースが置かれているホスト上で、その他のプロセスの足跡またはオーバーヘッドが許容できない場合。ただし、収集動作は、そのデータベースに実行され、データ収集サービスがリモートかどうかに関わらず、そのオーバーヘッドはかかります。

しかし、Oracle Data Gatherer がホスト・マシン上で利用できない場合には、ホストまたはオペレーティング・システムのパフォーマンス統計の収集はまったくできません。この構成では、データ収集をリモート・ホスト上のデータベース・データに制限します。

Oracle Data Gatherer は、インテリジェント・エージェントとインストールされます。

## Data Gatherer のアップグレード

Oracle Data Gatherer の前のバージョンがインストール済みで、新規バージョンの Oracle Data Gatherer を前のバージョンと異なる OracleHome にインストールした場合は、前のバージョンの Oracle Data Gatherer に関連付けられた Capacity Planning 構成 (状態ファイル) およびデータ・ファイルを、Oracle Data Gatherer の新規バージョンをインストールした OracleHome に移動する必要があります。

Oracle Data Gatherer の状態ファイルおよびデータ・ファイルは、OracleHome ディレクトリの下に odg/reco ディレクトリ (`$ORACLE_HOME/odg/reco`) にあります。

これらのファイルを移動しない場合、Oracle Data Gatherer で作成したバイナリ・データ・ファイルのうち、Capacity Planner データベースにロードされていないものがすべて失われます。このため、新規 Oracle Data Gatherer のインストールの後で、Capacity Planner に収集しているデータの設定を再度入力する必要があります。

Oracle Data Gatherer の新規バージョンを前のバージョンと同じ OracleHome にインストールした場合、または Oracle Capacity Planner を現在使用していない場合は、ファイルの移動はまったく必要ありません。

## NT および UNIX のデータ収集サービス操作の制御

UNIX および NT では、Oracle Enterprise Manager で vppcntl コマンドを使ってデータ収集サービスを管理します。vppcntl 実行形式は、ORACLE\_HOME/bin にあります。

Oracle Data Gatherer を制御するコマンドは、次の表のとおりです。

| 実行する処理                            | 入力するコマンド         |
|-----------------------------------|------------------|
| Oracle Data Gatherer の起動          | vppcntl -start   |
| Oracle Data Gatherer の停止          | vppcntl -stop    |
| Oracle Data Gatherer が実行中であることの確認 | vppcntl -ping    |
| Oracle Data Gatherer のバージョンの指定    | vppcntl -version |

### Windows NT での操作制御のその他の方法

この項には、Windows NT および DOS プロンプトによって Oracle Data Gatherer を制御する際の情報が含まれています。

Windows NT のコントロールパネルから Oracle Data Gatherer を起動するには、次のステップを実行します。

1. 「コントロールパネル」フォルダ内の「サービス」アイコンをダブルクリックします。
2. 「OracleDataGatherer」サービスを選択します。

「スタートアップの種類」は「手動」に設定されており、ユーザーがデータ収集サービスを起動できます。システムの起動時に Oracle Data Gatherer を自動的に起動するには、「スタートアップの種類」を「自動」に設定します。

- a. 「スタートアップ」ボタンをクリックします。「サービス」ダイアログ・ボックスが表示されます。
  - b. 「スタートアップの種類」で「自動」を選択します。
  - c. 「サービス」ダイアログ・ボックスで「OK」をクリックします。
3. 「起動」ボタンをクリックして、データ収集サービスを起動します。

DOS プロンプトから Oracle Data Gatherer を起動するには、次のコマンドを入力します。

```
net start oracledatagatherer
```

Windows NT のコントロールパネルから Oracle Data Gatherer を停止するには、次のステップを実行します。

1. 「コントロールパネル」フォルダ内の「サービス」アイコンをダブルクリックします。
  2. 「OracleDataGatherer」サービスを選択します。
  3. 「停止」ボタンをクリックして、データ収集サービスを停止します。
- DOS プロンプトから Oracle Data Gatherer を停止するには、次のコマンドを入力します。

```
net stop oracledatagatherer
```

### データ収集サービスが実行中であることの確認

Windows NT では、`vppcntl -ping` を使って Oracle Data Gatherer が実行中かどうかを確認します。それから、コントロール パネル・サービスでそのステータスを探します。また、NT Task Manager を表示して、`vppdc` プロセスの情報を参照することもできます。データ収集サービスのメッセージ・ログは、`ORACLE_HOME\odg\bin\alert_dg.log` です。

UNIX では、`vppcntl -ping` を使って Oracle Data Gatherer が実行中かどうかを確認します。データ収集サービスのメッセージ・ログは、`$ORACLE_HOME/odg/bin/alert_dg.log` です。

`vppcntl -ping` を使用するか、またはコントロールパネルで OracleDataGatherer のステータスをチェックするかは、Oracle Data Gatherer が実行中かどうかを確認する異なる方法です。Oracle Data Gatherer のステータスをチェックする方法としては、`vppcntl -ping` をお奨めします。

## Oracle Intelligent Agent および Oracle Names

インテリジェント・エージェント 8.0.4 では、管理するサービスを検出するのに Oracle Names は使われません。`listener.ora` ファイルの `GLOBAL_DBNAME` パラメータを使って、そのリスナーによって処理されるデータベースが判別されます。次に、Oracle Enterprise Manager コンソールでは `GLOBAL_DBNAME` パラメータを使って、Oracle Enterprise Manager コンソールのデータベースの名前が指定されます。

`GLOBAL_DBNAME` パラメータには、通常、Names Server で登録されているデータベースの名前が記述されます。たとえば、データベース初期化パラメータ・ファイルに指定されているデータベースの名前およびドメインなどです。`GLOBAL_DBNAME` パラメータの値は一意でなければなりません。

Oracle Intelligent Agent によって管理されているマシンで Oracle Names Server を実行している場合、データベースは Oracle Names Server ですでに登録されており、それらの別名は `listener.ora` ファイルの `GLOBAL_DBNAME` パラメータで定義されていると考えられます。

## エージェントに必要なロールとユーザー

---

---

---

**注意：** その同じサーバーで Net8 接続をテストし、この DBNAME および SID に接続されていることを確認してください。詳細は、Net8 構成を調べてください。

---

---

この環境でジョブを実行したり、イベントを監視したりする場合、インテリジェント・エージェントでは、Oracle Names によってデータベースの別名は解決されません。

Oracle Enterprise Manager コンソールがどのように Oracle Names と関係するかの詳細は、第 2 章「コンソールの構成」を参照してください。

---

---

**注意：** 同じノードで複数の Oracle データベースを管理する予定の場合、listener.ora ファイルの GLOBAL\_DBNAME パラメータがデータベースごとに異なることを確認してください。

---

---

## エージェントに必要なロールとユーザー

データベースをインストールした場合にだけ、catsnmp.sql スクリプトはインストールされます。Oracle データベースがインストールされると、catsnmp.sql スクリプトが catalog.sql によって自動的に実行され、必要な dbsnmp ユーザー・アカウント（パスワード dbsnmp を持つユーザー dbsnmp）および SNMPAGENT ロールがインテリジェント・エージェント（7.3.3 以降）に作成されます。

セキュリティ上の理由から、顧客は、インテリジェント・エージェントのデータベース・ログインのためのユーザーおよびパスワードの変更が必要になることがあります。デフォルトのアカウントは dbsnmp であり、デフォルトのパスワードは dbsnmp です。ユーザー名およびパスワードを dbsnmp/dbsnmp 以外のものに変更する場合、catsnmp.sql をオープンし、ユーザーおよびパスワードを編集し、実行する必要があります。その後、snmp\_rw.ora を編集します。

次のパラメータ（接続行）は、エージェントのアカウントまたはパスワード、あるいはその両方を変更した場合に必要です。catsnmp.sql スクリプトを実行した場合、ORACLE\_HOME/NET80/ADMIN の snmp\_rw.ora ファイルにそれらを追加できます。

```
SNMP.CONNECT.<svcname>.NAME = <USERNAME>
SNMP.CONNECT.<svcname>.PASSWORD = <password>
```

データベースに SNMPAGENT ロールがあるかどうかを判断するために、次の SQL コマンドを入力します。

```
SELECT * FROM dba_roles;
```

SNMPAGENT ロールが表示されない場合には、データベース上で catsnmp.sql スクリプトを実行します。

いくつかのバージョンのデータベースをすでに実行している場合、エージェントが接続する必要があるすべての権限およびビューの正しい設定を行うために、これらのデータベースそれぞれで catsnmp.sql スクリプトを実行する必要があります。

スクリプトを実行するには、SYS または INTERNAL としてログインしなければなりません。

---

---

**注意：コントロールパネル：** catsnmp.sql の位置は、実行しているデータベースのバージョンと、プラットフォームによって異なります。たとえば、Oracle 8.0.4 データベース対応の NT では、スクリプトは ORACLE\_HOME¥rdbms80¥admin にあります。catsnmp.sql スクリプトを複数回実行しても問題はないことに留意してください。

---

---

## Oracle NT DB のためのパスワード・ファイルの作成

Password Utility ORAPWD80 を使ってパスワード・ファイルを作成します。ORAPWD80 は、Oracle8 Utility とともに自動的にインストールされます。パスワード・ファイルは、ORACLE\_HOME¥DATABASE ディレクトリにあり、名前は PWDSID.ORA です。SID では Oracle8 データベース・インスタンスを識別します。パスワード・ファイルは、Oracle8 データベースへのローカル接続またはリモート接続で使用できます。次の例では、ローカル接続の説明をします。

たとえば、ORAPWD80 を使ってパスワード・ファイルを作成するには、次のように入力します。

```
C:¥> ORAPWD80 FILE=ORACLE_HOME¥DATABASE¥PWDSID.ORA PASSWORD=PASSWORD
```



# 2

---

## コンソールの構成

この章では、Microsoft Windows NT または Windows95 での、Oracle Enterprise Manager の起動方法およびコンソールの構成方法を説明します。

- 2-2 ページの「リポジトリ・ユーザー・アカウントの設定」
- 2-4 ページの「リポジトリの作成」
- 2-6 ページの「Oracle Enterprise Manager の起動」
- 2-7 ページの「ネットワーク・サービスの検出」
- 2-9 ページの「Oracle Enterprise Manager コンソールおよび Oracle Names」
- 2-10 ページの「Oracle Enterprise Manager DBA アプリケーションの起動」
- 2-11 ページの「作業環境の設定」
- 2-11 ページの「バックアップまたは SYSDBA 管理のためのリモート・データベースの構成」
- 2-14 ページの「Oracle8 のためのリカバリ・カタログの設定および登録」
- 2-16 ページの「電子メールの送信時の日本語文字のコード化」
- 2-17 ページの「トラブルシューティング」

---

**注意：** 互換性のマトリックスについては、「Oracle Enterprise Manager Readme」を調べてください。readme は、ORACLE\_HOME/SYSMAN/ADMIN ディレクトリにあります。

---

## リポジトリ・ユーザー・アカウントの設定

Oracle Enterprise Manager を起動する前に、リポジトリ・ユーザー・アカウントを設定する必要があります。リポジトリは、Oracle データベース内の一連の表で、Oracle Enterprise Manager コンソールに必要なデータと情報が格納されています。表は、作成元のアカウントによって所有されます。

リポジトリを作成するデータベース上に、DBA（データベース管理者）権限がある Oracle ユーザー・アカウントを設定しなければなりません。各 DBA には、管理するノードの各自のリポジトリが必要です。リポジトリ・アカウントは、ネットワークでアクセス可能な任意の Oracle データベースに配置できます。

互換性のマトリックスについては、「Oracle Enterprise Manager Readme」を調べてください。readme は、`$ORACLE_HOME¥SYSMAN¥ADMIN` ディレクトリにあります。

### リポジトリ専用の表領域の作成

Oracle Enterprise Manager リポジトリ専用の表領域を作成することをお奨めします。

1. Oracle Storage Manager を起動します。
2. ログインして、システム（DBA）権限でデータベースの既存のアカウントに接続します。
3. 「表領域」メニューから「作成」を選択します。「表領域作成」プロパティ・シートが表示されます。
4. 「名前」フィールドに、新規の表領域の名前として OEMREP を入力します。
5. 「データ・ファイル」セクションの「追加」ボタンをクリックします。「データ・ファイル作成」プロパティ・シートが表示され、新規の表領域に属する新規のデータ・ファイルを指定できます。
6. 「名前」フィールドに、データ・ファイルの完全なパスと名前を入力します。たとえば、`c:¥orant¥database¥oemrep01.dbf` となります。
7. 「サイズ」セクションに、新規のデータ・ファイルのサイズを入力します。このサイズは、次の計算式を使って求めます。

$20M + DB\_BLOCK\_SIZE$

たとえば、データベース・ブロック・サイズを 2K とすると、ファイル・サイズは 20482K となります。

計算の際は、値をバイト単位に変換した後、バイトを KB に変換します。

$((20 \times 1048576) + (2048)) / 1024 = 20482$

1048576 は、1MB のバイト数です。

8. 「データ・ファイル作成」プロパティ・シートの「OK」ボタンをクリックします。

9. 「エクステント」ページで、「デフォルト値を上書き」を選択し、次の情報を入力します。

初期サイズ: 32K

次のサイズ: 128K

増加サイズ: 0

最大値:

Oracle 7.3 以降をお使いの場合は、「無制限」を選択します。

Oracle 7.3 以前のバージョンをお使いの場合には、「値」を選択します。

DB\_BLOCK\_SIZE が施行するセグメントごとにエクステントの最大値の 75% を指定します。

たとえば、次のように指定します。

| DB_BLOCK_SIZE | 施行される最大値 | 推奨値  |
|---------------|----------|------|
| 2K            | 121      | 90   |
| 4K            | 249      | 186  |
| 8K            | 505      | 378  |
| 16K           | 1017     | 762  |
| 32K           | 2041     | 1530 |

10. 「表領域作成」プロパティ・シートの、「作成」ボタンをクリックします。

## ユーザーの作成

DBA 権限を持ったユーザー・アカウントを設定するには、次の手順に従ってください。

1. Oracle Security Manager を起動します。
2. ログインして、システム (DBA) 権限でデータベースの既存のアカウントに接続します。
3. 「ユーザー」メニューから「作成」を選択します。「ユーザー作成」プロパティ・シートが表示されます。
4. 「一般」ページで、次の情報を入力します。  
「名前」フィールドに、新規ユーザー名を入力します。  
「パスワード」フィールドおよび「パスワード確認」フィールドに、パスワードを入力します。

デフォルト表領域として「OEMREP」を選択します。

ユーザーの一時表領域として、一時セグメント専用となる表領域を選択します。ソート・パフォーマンスを最適化するには、Oracle 7.3以降を実行の際には、必ずこの表領域にTEMPORARYキーワードを付けて定義してください。たとえば、temporary\_dataとします。

5. 「ロール / 権限」ページで、次の情報を入力します。  
「権限タイプ」として「ロール」を選択します。  
DBA（データベース管理者）ロールを、ユーザーに付与します。
6. 必要なパラメータを指定した後に、「作成」ボタンをクリックします。

Oracle Enterprise Managerの起動時には、このユーザー・アカウントでリポジトリ・データベースに接続します。リポジトリは、自動的に生成されます。

---

---

**注意：** Oracle Enterprise Manager バージョン 1.3.5 で開始する場合、新規リポジトリは、新しいユーザー・ログインごとに作成されます。1人のユーザーが一度に使用できるのは1つのリポジトリだけです。

---

---

## リポジトリの作成

Repository Manager ウィザードは、「Oracle Enterprise Manager」プログラムグループで「Repository Manager」を選択すると起動します。

---

---

**注意：** Oracle Repository Manager を使用するには、DBA（データベース管理者）権限がある Oracle ユーザー・アカウントが必要です。

---

---

Repository Manager によって、次の操作を選択できます。

| 操作  | 説明   |
|---|--|
| Oracle Enterprise Manager のリポジトリの作成 / 有効性検査 | プロセスの作成 / 有効性検査時には、Repository Manager によって既存のリポジトリがアップグレードされるか、リポジトリがまだない場合には新しいリポジトリが作成されます。リポジトリを削除すると、リポジトリに含まれている情報は失われます。 |
| Oracle Enterprise Manager のリポジトリの削除         | リポジトリ・コンポーネントのデータベース・オブジェクトが存在する場合、それらは削除されます。   |

| 操作              | 説明  |
|-----------------|---|
| 検出されたノードのリストの保存 | <p>既存のリポジトリで検出されたノードのリストは、テキスト・ファイルに保存できます。</p> <p>discnode.txtなどのファイル名と、検出されたノード名のリストを保存するファイルの位置を指定してください。デフォルトの保存位置は、ORACLE_HOME¥BIN ディレクトリです。</p> <p>テキスト・ファイルは、「新規サービスの検出」ウィザードの「ノードの追加」ページにロードできます。</p> |

作成、有効性検査または削除を行うリポジトリ・コンポーネントを選択できます。Oracle Diagnostics Pack、Oracle Tuning Pack および Oracle Change Management Pack は、Oracle Enterprise Manager リポジトリに依存しています。よって、別のオプションが選択された場合、自動的に選択され、淡色表示されます。たとえば、Tuning Pack リポジトリの作成を選択すると、Oracle Enterprise Manager オプションが必要なので、自動的に選択されます。

「削除」を選択した場合、Oracle Enterprise Manager はデフォルトで選択されます。Oracle Diagnostics Pack、Oracle Tuning Pack および Oracle Change Management Pack は、Oracle Enterprise Manager のリポジトリがない場合は存在することはないので、これも選択されません。特定のパックのリポジトリだけを削除する場合は、Oracle Enterprise Manager のリポジトリのチェックを削除してから、削除するパックのオプションをチェックします。

ウィザードの最後のページでは、要求した操作が実行されるリポジトリのログイン情報を入力できます。このプロセスは完了まで数分かかります。

特定のツールで必要とされるすべてのリポジトリ・オブジェクトは、ツールが最初に起動したときに作成されます。または、ユーザーは、リポジトリに移動して、すべてのリポジトリ・オブジェクトを一度に作成できます。

Oracle Enterprise Manager の以前のリリースの既存のリポジトリがある場合、互換性を調べてください。

- Oracle Enterprise Manager のリポジトリが、Oracle Enterprise Manager コンソールよりも古い場合、リポジトリにログインしたときに既存のリポジトリは自動的にアップグレードされます。
- Oracle Enterprise Manager コンソールが、Oracle Enterprise Manager のリポジトリより古い場合、互換性のある新しいバージョンの Oracle Enterprise Manager をインストールする必要があります。コンソールでは、この状況を検知して、必要なコンソールのバージョンを知らせます。

リポジトリのアップグレード時に、予期しない障害が発生した場合、リポジトリを再作成する必要があります。後でリポジトリを再作成する必要がないように、リポジトリを保存しておくことをお勧めします。リポジトリを保存しておくことで、イベント、ジョブおよび優先接続情報リストなど、ユーザーが手動で入力した情報と、Oracle Expert および Trace などの製品のために収集した情報を保護します。

リポジトリは、全コールド・バックアップ（データベースをオフラインにしてからデータ・ファイルをストレージにコピーする）を行うか、またはユーザーをエクスポートして保存できます。

## Oracle Enterprise Manager の起動

Oracle Enterprise Manager コンソールを起動するには、「スタート」メニューで「Oracle Enterprise Manager」フォルダから「Oracle Enterprise Manager」を選択します。

---

---

**注意：** Oracle Enterprise Manager コンソールのインスタンスは、1 台のマシンで1つしか実行できません。ただし、DBA ツールのインスタンスは複数実行できます。リモート・マシンからの Oracle Enterprise Manager の実行はサポートされていません。ローカルでの実行だけがサポートされています。コンソールの共用インストールはサポートされていません。

---

---

## リポジトリの接続

Oracle Enterprise Manager では、リポジトリが異なるデータベースにあるかどうかにかかわらず、すべてのリポジトリで一意のユーザー名が必要です。これは、次の理由のためです。

- インテリジェント・エージェントでは、ジョブとイベントを追跡するときに、一意のユーザー名が使われる。
- ユーザー名は、通知の戻りアドレスの作成時に、コンソールの位置に関連付けられる。

リポジトリへの接続プロセスの概略を次に示します。

1. Enterprise Manager を起動します。
2. 著作権のウィンドウが表示され、次に、「ログイン情報」ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. 「ログイン情報」ダイアログ・ボックスによって、この Oracle Enterprise Manager のリポジトリが格納されている Oracle データベースのユーザー・アカウントに接続します。
4. コンソールでは、ユーザー名に関連付けられているリポジトリが調べられます。

リポジトリは、存在しない場合には自動的に作成され、ダイアログ・ボックスによってその操作が知らされます。

---

**注意：** 同じユーザー名でコンソールのリポジトリに複数回ログインしないでください。これを行った場合、警告が表示されます。以前のコンソール・セッションが異常終了したか、マシンが切断した場合には、警告を無視します。ユーザー名が複数回ログインされた場合、最新のログインにエージェントの通知が送信されます。

---

## ネットワーク・サービスの検出

Oracle Enterprise Manager コンソールでは、データベース、リスナーおよびノードなどのネットワーク・サービスを検出して、ナビゲータ・ツリーに挿入しなければなりません。この操作はサービスをジョブ制御システムおよびイベント管理システムで管理するためのものです。

ナビゲータの「サービスの検出」には、ネットワーク・サービスを特定し、ナビゲータ・ツリーに挿入するためのウィザードがあります。

検出サービスを開始するには、Oracle ネットワーキング・システムを正しくインストールする必要があります。サービスを検出する方法は次のとおりです。

| 方法                     | 機能   | エージェントのバージョン   |
|------------------------|--|--|
| 「新規サービスの検出」ウィザード       | 新しいノードおよびそのノードのサービスを検出します。                               | TCP/IP プロトコルを使用するリリース 7.3.3 以降のインテリジェント・エージェント         |
| 「サービスのリフレッシュ」ウィザード     | ノードでの検出をリフレッシュし、再試行します。                                  | TCP/IP プロトコルを使用するリリース 7.3.3 以降のインテリジェント・エージェント         |
| 「サービスの手動定義」ウィザード       | ノードのサービスについての情報を手動で入力できるようにします。                          | Oracle Intelligent Agent がないか、7.3.3 以前のインテリジェント・エージェント |
| topo_ops.ora ファイルによる検出 | ナビゲータのサービス検出機能では追加できない Oracle Parallel Server を手動で追加します。 | 7.3.3 以前の Oracle Intelligent Agent                     |

---

**注意：** 検出時には、インテリジェント・エージェントが稼働していなければなりません。

---

---

---

**重要：** 8.0.4.1 より前の Oracle Intelligent Agent からアップグレードした場合は、すでに検出済みのサービスは削除して、再度検出する必要があります。  
8.0.4.1 以降のエージェントでは、グローバル・データベース名をサポートしません。

---

---

サービスを検出するには、次の手順に従ってください。

1. Oracle Enterprise Manager コンソールにログインします。

これが新規インストールである場合、検出ウィザードが表示されます。

これが新規インストールではない場合、検出ウィザードを起動します。「メイン」メニューから、「ナビゲータ」→「サービスの検出」→「新規サービスの検出」を選択し、「次へ」ボタンをクリックします。

2. 「ノードの追加」ページでは、ノードを1つずつ入力するか、テキスト・ファイルからロードします。

ノードをウィザードに入力するには、「新規ノード」フィールドにノード名を入力し、「追加」ボタンをクリックします。各ノードについてこれを繰り返します。

ノード数が多い場合は、それらの名前が含まれるテキスト・ファイルを2つに分けて作成できます。ファイルでは、1行ごとに各ノード名が記述されます。Oracle Enterprise Manager が検出できるように、テキスト・ファイルには\*.txt と名前指定します。

3. 「次へ」ボタンをクリックします。

4. 「終了」ボタンをクリックします。

この操作を行うと、services.ora ファイルの情報がエージェントから Oracle Enterprise Manager コンソールに渡され、ナビゲータ・ツリーに挿入されます。

当該のデータベースを検出できない場合、ご使用のプラットフォーム固有のエージェントの資料を参照してください。NT ユーザーの場合、1-7 ページの「起動しない NT エージェントのトラブルシューティング」を参照してください。UNIX ユーザーの場合、1-13 ページの「起動しない UNIX エージェントのトラブルシューティング」を参照してください。

---

---

**注意：** Oracle Enterprise Manager では、topology.ora は使われなくなりました。ナビゲータ・ツリーのサービスをすべて削除し、以前のリリースで使われていた topology.ora を削除することをお奨めします。

---

---

Oracle Enterprise Manager (バージョン 1.4.0 以降) では、7.3.3 以前のエージェントについて topology.ora ファイルが使われなくなったので、7.3.3 以降のエージェントが実行中ではないデータベースは、手動でナビゲータに追加する必要があります。

1. Oracle Enterprise Manager コンソールにログインします。
2. 「メイン」メニューで「ナビゲータ」→「サービスの検出」→「手動でのサービスの定義」を選択し、「次へ」ボタンをクリックします。
3. 「リリース 7.3.3 以前の Oracle Intelligent Agent が組み込まれたノード」ボックスをクリックします。
4. 「ノード名」ボックスにノード名を入力し、「追加」ボタンをクリックします。
5. 「データベース」には、ローカル・ボックスおよびサーバーの TNSNAMES.ORA ファイルで定義されているデータベース・サービス記述子を入力します。エント리는、両方のシステムで一致しなければなりません。
6. 「次へ」ボタンをクリックします。
7. 「終了」ボタンをクリックします。

## Oracle Enterprise Manager コンソールおよび Oracle Names

Oracle Enterprise Manager コンソールおよびデータベース・アプリケーションでは、その他の Oracle コンソール・アプリケーションと同様に、Oracle Names によってサービス名を解決します。

1. クライアントでは、最初に、固有のクライアント側キャッシュが調べられます。クライアントが過去 24 時間の内に Oracle Names Server に接続した場合は、Oracle Names Server のアドレスがキャッシュに残っている可能性があります。
2. クライアントに SQLNET.ORA ファイルがある場合、NAMES.PREFERRED\_SERVER パラメータが検索されます。パラメータが 1 つあれば、最初にリストされた Oracle Names Server に問合せが行われます。
3. クライアントでは、定式アドレスで Oracle Names Server が検索されます。TCP/IP ネットワークの Oracle Names Server の定式アドレスは、ポート 1575 を使用して別名が oranamesvr(), oranamesvr1, ...oranamesvr4 に指定されたホストです。

Oracle Names でのクライアントの構成方法の詳細は、『Oracle Names 管理者ガイド』を参照してください。

---

---

**注意：** これらのサービスの検出や、ジョブの実行を行う前に、Net8 の接続性をテストしてください。C-4 ページの「任意の SID への接続性のテスト」を参照してください。

---

---

## Oracle Enterprise Manager DBA アプリケーションの起動

次のメソッドの1つを使用して、Oracle Enterprise Manager データベース管理アプリケーションを起動できます。

| 使用対象                  | 処理  |
|-----------------------|---|
| コンソール                 | <p>次の3つの方法から選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ ナビゲータ・ツリーまたはマップ・ウィンドウで、管理するデータベースを選択してから、コンソールの「ツール」メニューまたはランチ・パレットでアプリケーションを選択します。</li> <li>■ ナビゲータ・ツリーで管理するデータベースを選択してから、状況依存メニューの「関連ツール」メニューでアプリケーションを選択します。</li> <li>■ コンソールの「ツール」メニューまたはランチ・パレットでアプリケーションを選択し、「リポジトリの接続」ダイアログ・ボックスに接続情報を入力します。</li> </ul> |
| 各アプリケーション             | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「スタート」メニューで Oracle Enterprise Manager コンソールを起動します。</li> <li>2. 「Oracle Enterprise Manager」プログラムグループのアプリケーション・アイコンをダブルクリックします。</li> <li>3. 「リポジトリの接続」ダイアログ・ボックスで、接続情報を入力します。</li> </ol>  |
| Administrator Toolbar | <p>ツールバーのツールのアイコンをクリックします。ツールは、指定されていれば、ツールバーのデフォルト・データベースに接続されます。</p> <p>他のデータベースへの接続の詳細は、管理ツールバーのオンライン・ヘルプを参照してください。</p>  |

---

**注意：** コンソールを実行していなくても、データベース管理アプリケーションは起動できます。例外は、ジョブ制御システムを使用する Backup Manager および Data Manager だけです。

---

ツールを実行すると、Oracle データベースに接続されます。Oracle データベースへの接続の詳細は、オンライン・ヘルプを参照してください。

アプリケーションを起動する前に、コンソールでデータベースを選択すると、そのデータベース用に設定された優先接続情報リスト、またはコンソールへのログインに使った設定リストに従って、データベースに接続されます。なんらかの原因でデータベースへの接続が失敗すると、「リポジトリの接続」ダイアログ・ボックスが表示されます。

## 作業環境の設定

エージェントによって管理対象ノードでジョブを実行するには、コンソールで有効な設定リストを指定する必要があります。

---

**注意：** ユーザーが、特定のサービス（データベース、ノード、リスナー）について優先接続情報リストを設定していない限り、ジョブはリポジトリ所有者ログイン・アカウントを使って発行されます。

---

優先接続情報リストを設定するには、次のステップを実行します。

1. Oracle Enterprise Manager コンソールで、インテリジェント・エージェントがインストールされているマシンの設定を行うために「ファイル/作業環境」を選択します。
2. そのノード名をハイライト表示し、アカウント名およびパスワードを入力します。

NT ユーザーの場合、(NT エージェントが常駐する) ノードの優先接続情報リストを、「バッチ ジョブとしてログオン」に設定されたユーザーと同じに設定する必要があります。エージェントでは、エージェントで実行されるジョブの所有者すべてのユーザー名とパスワードが認証されます。作業環境を正しく設定していない場合、ジョブを発行したときに「ユーザーの認証に失敗しました」のエラー・メッセージが表示されます。

UNIX ユーザーの場合、(データベースの db ユーザーではなく) ノードの有効な UNIX オペレーティング・システム・ユーザーを指定する必要があります。ユーザーには、sqlplus のようなプログラムを実行したり、UNIX サーバーでインポート/エクスポートを行うためのオペレーティング・システム権限が必要です。権限は、既存のローカル・ユーザーまたはドメイン・ユーザーに割り当てられます。優先接続情報リストが、エージェントを起動したアカウントに一致しない場合、「ユーザーの認証に失敗しました」のエラー・メッセージが表示されます。

## バックアップまたは SYSDBA 管理のためのリモート・データベースの構成

Oracle Enterprise Manager のジョブ制御システムによって、データベースの停止または起動などのバックアップ・サブシステムの実行または管理タスクの実行を要求する前に、リモート操作のデータベースを設定する必要があります。

次の手順では、サーバーおよびクライアントの両方で実行する必要がある操作のアウトラインを述べます。次の手順で使用されている例は、UNIX 環境用です。Windows NT でのディレクトリ、システム変数、表記規則は異なります。

**追加情報：** ご使用のシステムのパスワード・ファイル作成ユーティリティの正確な名前は、ご使用の Oracle データベースのオペレーティング・システム固有のマニュアルを参照してください。

### サーバー側 (UNIX) :

1. ORACLE でログインし、ご使用の環境変数を設定します。

```
setenv ORACLE_HOME your_oracle_home
setenv ORACLE_SID your_oracle_sid
```

---

---

**注意:** この例では、データベースを ORACLE から設定したものです。

---

---

2. Oracle ホームの dbfs ディレクトリに移動します。

```
cd $ORACLE_HOME/dbfs
```

3. ORAPWD 実行ファイルを実行して、新規パスワード・ファイルを作成します。

```
$ORACLE_HOME/bin/orapwd file=orapw<SID> password=your_password entries=10
```

ファイル名は、*orapw<SID>* でなければなりません。entries = 10 は、別個の DBA および OPER の最大数です。

\$ORACLE\_HOME/dbfs には *orapw<SID>* を 1 つ作成しなければなりません。

4. *init<SID>.ora* ファイルを編集します。 *init<SID>.ora* ファイルで、文 *remote\_login\_passwordfile=exclusive* を追加または変更します。
5. データベースをいったん停止してから再起動します。
6. Server Manager ライン・モードを起動します。
7. *sys/sys\_password* で接続します。
8. リモート SYSDBA 権限がない場合、権限を持つユーザーを作成します。次の例で、*remote* は、SYSDBA 権限を持つユーザー名です。
9. 接続および SYSDBA 権限をユーザーに付与します。

```
create user remote identified by remote;
```

```
grant connect, resource to remote;
grant sysdba to remote;
```

10. Server Manager ライン・モードを終了します。

### クライアント側 (Windows NT) :

ターゲット・データベースの起動および停止をリモートから行う場合は、次の手順に従ってください。

1. Oracle Enterprise Manager コンソールの「ナビゲータ」からターゲット・データベースを選択します。
2. Oracle Instance Manager を起動します。
3. SYSDBA 権限を持ったユーザーとしてログインします。
4. 「初期化パラメータ」をダブルクリックします。「初期化パラメータ」プロパティ・シートが表示されます。
5. 「保存」をクリックします。「構成の保存」プロパティ・シートが表示されます。
6. 構成名を入力します。
7. 「ストアド・パラメータ」マルチ列リストの「コメント」列に表示させるコメントを入力します。
8. 「OK」をクリックします。
9. リモート SYSDBA ログインをテストします。Oracle Instance Manager を起動して、SYSDBA 権限で作成したユーザーでログインします。作成したストアド構成を使って、データベースを起動また停止できなければなりません。

### バックアップ・モードの設定

オンライン・バックアップ（ホット・バックアップ）を実行する場合は、データベースを ARCHIVELOG モードにする必要があります。そうでなければ、データベースを停止してから、バックアップを実行しなければなりません。デフォルトでは、データベースは NOARCHIVELOG モードになります。

データベースを ARCHIVELOG モードにするには、次のようにします。

1. `init.ora` データベース初期化ファイルの次のセクションを、その指示に従って編集します。

```
# Uncommenting the line below will cause automatic archiving if archiving has
# been enabled using ALTER DATABASE ARCHIVELOG.
# log_archive_start = true
# log_archive_dest = %ORACLE_HOME%\database\archive
# log_archive_format = "%ORACLE_SID%T%TS%S.ARC"
```

2. 「データベース」メニューから「アーカイブ・ログ」を選択します。ARCHIVELOG モードをセットします。

バックアップおよびリカバリ方針の詳細は、『Oracle8 Server バックアップおよびリカバリ』を参照してください。

## Oracle8 のためのリカバリ・カタログの設定および登録

リカバリ・カタログは、Recovery Manager によって使用され、維持される情報のリポジトリです。Recovery Manager では、リカバリ・カタログの情報を使って、要求されたバックアップおよびリストア・アクションの実行方法が判断されます。

リカバリ・カタログで Oracle8 Recovery Manager を使用するには、最初にリカバリ・カタログをインストールし、次にデータベースを登録します。制御ファイルを使用している場合には、設定の必要はありません。リカバリ・カタログは、ターゲット・データベースとは異なる位置にインストールすることをお奨めします。

リカバリ・カタログのメンテナンス、Recovery Manager、バックアップおよび回復の方針の詳細は、『Oracle8 Server バックアップおよびリカバリ』を参照してください。

**重要：** リカバリ・カタログをインストールする前には、Oracle Enterprise Manager ジョブ制御システムが正しく機能している必要があります。ターゲット・データベースをリカバリ・カタログに登録するには、ジョブ制御システムが必要です。

### リカバリ・カタログの設定

リカバリ・カタログを設定するには、次の手順を完了していなければなりません。

- 「表領域の作成」
- 「ユーザーの作成」
- 「catrman スクリプトの実行」

#### 表領域の作成

1. Oracle Storage Manager を起動します。
2. DBA ロールを持つユーザーとしてログインします。
3. 「表領域」メニューから「作成」を選択します。「表領域作成」プロパティ・シートが表示されます。

---

**注意：** Oracle Enterprise Manager コンソールから「ナビゲータ」メニューを使って、「表領域作成」プロパティ・シートを表示させることもできます。

---

4. 「名前」フィールドに、新規の表領域の名前を入力します。たとえば、rcvcat とします。
5. 「データ・ファイル」セクションの「追加」ボタンをクリックします。「データ・ファイル作成」プロパティ・シートが表示され、新規の表領域に属する新規のデータ・ファイルを指定できます。

6. 「名前」フィールドに、データ・ファイルの完全なパスと名前を入力します。たとえば、`c:\¥orant¥database¥rcvcat01.dbf` となります。
7. 「サイズ」セクションに、新規のデータ・ファイルのサイズを入力します。たとえば、10M と入力します。
8. 「データ・ファイル作成」プロパティ・シートの「OK」ボタンをクリックします。
9. 「表領域作成」プロパティ・シートの「作成」ボタンをクリックします。

### ユーザーの作成

1. Oracle Security Manager を起動します。
2. DBA ロールを持つユーザーとしてログインします。
3. 「ユーザー」メニューから「作成」を選択します。「ユーザー作成」プロパティ・シートが表示されます。

---

---

**注意：** Oracle Enterprise Manager コンソールから「ナビゲータ」メニューを使って、「ユーザー作成」プロパティ・シートを表示させることもできます。

---

---

4. 「一般」ページで、次の情報を入力します。  
「名前」フィールドに、新規ユーザー名を入力します。たとえば、`rman` とします。  
「パスワード」フィールドおよび「パスワード確認」フィールドに、パスワードを入力します。たとえば、`rman` とします。  
デフォルト表領域を選択します。たとえば、`RCV CAT` とします。  
「一時表領域」を選択します。たとえば、`TEMPORARY_DATA` とします。
5. 「ロール/権限」ページで、次の情報を入力します。  
「権限タイプ」として「ロール」を選択します。  
ユーザーに、`RECOVERY_CATALOG_OWNER` ロールを付与します。
6. 「割当て制限」ページで、デフォルト表領域に対して割当て制限なしを指定します。この例では、デフォルト表領域は `RCV CAT` です。
7. 必要なパラメータを指定した後に、「作成」ボタンをクリックします。

### catrman スクリプトの実行

1. SQL Worksheet を起動します。
2. 必要なログイン情報を入力します。たとえば、`user=RMAN, password=RMAN` とします。

3. `create_rman.log` のスプールを実行すると、エラーがログ・ファイルに書き込まれません。
4. `Oracle_Home/rdbms/admin` ディレクトリにある `catrman` スクリプトを実行します。

### リカバリ・カタログの Oracle8 Recovery Manager (GUI) への登録

1. Oracle Enterprise Manager コンソールを起動します。
2. 「ファイル」メニューで「作業環境」を選択します。「ユーザー設定項目」ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. 優先接続情報リストで、バックアップが必要な任意のターゲット・データベースへの SYSDBA アクセスが指定されていることを確認してください。通常、ユーザー名は、以前のセクションで作成したものです。2-14 ページの「リカバリ・カタログの設定」を参照してください。
4. ナビゲータからターゲット・データベース (バージョン 8.0) を選択します。
5. Oracle Backup Manager を起動します。「バックアップ・サブシステムの選択」ダイアログが表示されます。
6. Oracle8 Recovery Manager を選択し、次に「OK」をクリックします。(Oracle8 Recovery Manager サブシステムを使用する) Oracle Backup Manager が表示されます。
7. 「カタログ」メニューで「リカバリ・カタログの使用」を選択します。
8. 必要なログイン情報、つまりユーザー名、パスワード、およびサービスを入力します。たとえば、`user=RMAN`、`password=RMAN` (またはリカバリ・カタログを使ってデータベースにアクセスするために作成する任意のユーザー) などです。
9. ターゲット・データベースをリカバリ・カタログに登録するかどうかを尋ねられます。「登録」をクリックします。この時点で、データベース登録は、Oracle Enterprise Manager ジョブ制御システムにジョブとして送信されます。
10. Oracle Backup Manager で、「アクティブ・ジョブ」リストの登録ジョブをダブルクリックし、ジョブの現行の状態を参照します。
11. ジョブが完了したら、「ジョブ」プロパティ・シートでジョブの履歴をチェックして、ジョブが正常に完了したことを確認します。

ジョブが正常に完了すると、バックアップおよびリカバリの環境が構成されます。リカバリ・カタログのメンテナンス、Recovery Manager、バックアップおよび回復の方針の詳細は、『Oracle8 Server バックアップおよびリカバリ』を参照してください。

### 電子メールの送信時の日本語文字のコード化

電子メールを送信する場合、日本語文字のコード化を使用可能にするために、登録キーが使用できません。

登録キーを設定するには、次の手順に従ってください。

1. regedit (レジストリ エディタ) を実行します。
2. SOFTWARE¥ORACLE¥OracleSMPCConsole¥Email にある登録キー szDestCharSet を検索します。
3. デフォルトのアイコンをダブルクリックして、szDestCharSet の値を設定します。

## トラブルシューティング

Oracle Enterprise Manager の設定時に問題が発生した場合、次のトラブルシューティングの項目を参照してください。

### ユーザーの認証の失敗

ユーザーがジョブを発行した時に、「ユーザーの認証に失敗しました」のエラーが発生した場合、次に示すヒントに従ってください。

**ヒント A:** エージェントが UNIX プラットフォームにある場合、`$ORACLE_HOME/bin/dbsnmp` を調べて、`dbsnmp` 実行可能ファイルがルートによって所有されていることを確認します。1-10 ページの「`root.sh` が正常に実行されたことの確認」を参照してください。

**ヒント B:** NT ノードの場合、ノードの優先接続情報リストが、「バッチ ジョブとしてログオン」に設定されるユーザーと同様に設定されていることを確認してください。2-11 ページの「作業環境の設定」を参照してください。

**ヒント C:** NT エージェントが `system` 以外のアカウントから起動された場合、「ユーザーの認証に失敗しました」というメッセージが表示され、ジョブはすべて失敗します。これは、ジョブ設定リスト・アカウントが「バッチ ジョブとしてログオン」権限を持っているかどうかにかかわらず発生します。

NT の「管理ツール」プログラムグループの「ユーザー マネージャ」を使って、エージェントを起動する際に使うアカウントに、次の権限 (ユーザーの権利) を割り当てる必要があります。

- サービスとしてログオン
- オペレーティング・システムの一部として機能
- プロセス・レベル・トークンの置き換え
- クォータの増加

NT エージェントは、ジョブを実行する際に `CreateProcessAsUser()` Win32 API を使うため、これらの権限が必要です。これらの権限を持つ新規のアカウントを作成するか、既存のアカウントにこれらの権限を追加します。

ローカルの NT マシンに新規の Windows NT ユーザー・アカウントを作成し、そのユーザーに権限を付与する方法の例は、1-4 ページの「新規 NT ユーザー・アカウントの作成」を参照してください。

既存のローカル・ユーザー・アカウントに権限を付与する方法の例は、1-4 ページの「既存の NT ユーザー・アカウントへの権限の割当て」を参照してください。

システム以外アカウントから Windows NT でエージェントを起動するには、次のステップを実行します。

1. 「コントロールパネル」フォルダ内の「サービス」アイコンをダブルクリックします。
2. OracleAgent サービスを選択します。
  - a. 「スタートアップの種類」は「手動」に設定されており、ユーザーがエージェントを起動できます。システムの起動時にエージェントを自動的に起動するには、「スタートアップの種類」を「自動」に設定します。
  - b. 「ログオン」セクションで、「既に設定済の」アカウントを選択します（ローカル・アカウントまたはドメイン・アカウントのいずれか）。
3. 「起動」ボタンをクリックして、エージェントを起動します。

### 失われたジョブの出力

ジョブが失敗すると、ジョブ出力ウィンドウに次のメッセージが表示されます。

```
output from job # lost
```

次にリストしたヒントに従ってください。

- エージェントが UNIX プラットフォームにある場合、優先接続情報リストは、`$ORACLE_HOME/network/agent` ディレクトリへの書込み許可を保有するユーザーに対応させてください。
- `catsnmp.sql` スクリプトが、データベースで実行されていません。エージェントが NT データベースに対して実行されている場合、`catsnmp.sql` は、データベースをインストールし、開始データベースの作成を選択したときに実行されます。自分で作成するその他のデータベースでは、このスクリプトは自動的に実行されません。1-18 ページの「エージェントに必要なロールとユーザー」を参照してください。
- エージェントが NT 3.51 で実行されている場合、SP5 がインストールされていないマシンで問題が発生します。Service Pack 5 の詳細は、`readme` にある Microsoft の Web サイトを参照してください。

### 「スケジュール済み」状態でのジョブの停止

**ヒント A:** NT では、「バッチ ジョブとしてログオン」権限がアカウントに必要です。

Oracle パーティションが、NTFS（ファイルおよびディレクトリのローカル・セキュリティが可能な NT ファイル・システム）としてフォーマットされている場合、許可設定「フルコ

ントロール」を、「バッチジョブとしてログオン」が割り当てられたユーザーにローカルに付与することも必要です。

ローカルなファイル許可を付与するには、次の手順に従ってください。

1. 「スタート」、「プログラム」、「Windows NT エクスプローラ」をクリックします。
2. Oracle がインストールされているドライブをハイライト表示し、マウスの右ボタンをクリックします。
3. 「プロパティ」→「セキュリティ」→「許可」→「追加」→「ユーザーを表示」の順に選択します。
4. 「バッチジョブとしてログオン」権限が付与されているアカウントをハイライト表示し、「追加」をクリックします。
5. 「アクセスのタイプ」をクリックして、ドロップ・ダウン・リストから「フルコントロール」を選択します。
6. 次に「OK」をクリックし、さらに（次の画面でも）「OK」をクリックして、スクリーンをクローズします。

**ヒント B:** エージェントでコンソールにアクセスできるかどうかを調べます。

サーバー・マシンからコンソールを ping してください。IP アドレスが不明な場合、「スタート」ボタン→「設定」→「コントロールパネル」→「ネットワーク」→「プロトコル」→TCP/IP を実行し、プロパティ・ボタンをクリックして調べてください。

コンソールを ping できない場合、Oracle Daemon Manager のホスト・アドレスを TCP/IP アドレスに設定します。

**ヒント C:** DNS ホストのエントリが、listener.ora ファイルおよび tnsnames.ora ファイルのノード名に設定されていることを確認します。

1. 「スタート」ボタン→「設定」→「コントロールパネル」→「ネットワーク」→「プロトコル」→「TCP/IP プロパティ」を実行します。
2. DNS ホストのエントリを調べます。たとえば、エントリが前のエンジニアの名前に設定されていないことを確認します。

### ジョブ・プロセスの停止

ジョブを実行するユーザーは、\*.log ファイルに書き込むためには (\$ORACLE\_HOME¥net80¥agent ディレクトリではなく) \$ORACLE\_HOME¥net80 ディレクトリの読み書き許可が必要です。また、\$TEMP ディレクトリまたは \$ORACLE\_HOME ディレクトリに対する書き込み許可も必要です。



# 2

---

## コンソールの構成

この章では、Microsoft Windows NT または Windows95 での、Oracle Enterprise Manager の起動方法およびコンソールの構成方法を説明します。

- 2-2 ページの「リポジトリ・ユーザー・アカウントの設定」
- 2-4 ページの「リポジトリの作成」
- 2-6 ページの「Oracle Enterprise Manager の起動」
- 2-7 ページの「ネットワーク・サービスの検出」
- 2-9 ページの「Oracle Enterprise Manager コンソールおよび Oracle Names」
- 2-10 ページの「Oracle Enterprise Manager DBA アプリケーションの起動」
- 2-11 ページの「作業環境の設定」
- 2-11 ページの「バックアップまたは SYSDBA 管理のためのリモート・データベースの構成」
- 2-14 ページの「Oracle8 のためのリカバリ・カタログの設定および登録」
- 2-16 ページの「電子メールの送信時の日本語文字のコード化」
- 2-17 ページの「トラブルシューティング」

---

**注意：** 互換性のマトリックスについては、「Oracle Enterprise Manager Readme」を調べてください。readme は、ORACLE\_HOME/SYSMAN/ADMIN ディレクトリにあります。

---

## リポジトリ・ユーザー・アカウントの設定

Oracle Enterprise Manager を起動する前に、リポジトリ・ユーザー・アカウントを設定する必要があります。リポジトリは、Oracle データベース内の一連の表で、Oracle Enterprise Manager コンソールで必要なデータと情報が格納されています。表は、作成元のアカウントによって所有されます。

リポジトリを作成するデータベース上に、DBA（データベース管理者）権限がある Oracle ユーザー・アカウントを設定しなければなりません。各 DBA には、管理するノードの各自のリポジトリが必要です。リポジトリ・アカウントは、ネットワークでアクセス可能な任意の Oracle データベースに配置できます。

互換性のマトリックスについては、「Oracle Enterprise Manager Readme」を調べてください。readme は、`$ORACLE_HOME¥SYSMAN¥ADMIN` ディレクトリにあります。

### リポジトリ専用の表領域の作成

Oracle Enterprise Manager リポジトリ専用の表領域を作成することをお奨めします。

1. Oracle Storage Manager を起動します。
2. ログインして、システム（DBA）権限でデータベースの既存のアカウントに接続します。
3. 「表領域」メニューから「作成」を選択します。「表領域作成」プロパティ・シートが表示されます。
4. 「名前」フィールドに、新規の表領域の名前として OEMREP を入力します。
5. 「データ・ファイル」セクションの「追加」ボタンをクリックします。「データ・ファイル作成」プロパティ・シートが表示され、新規の表領域に属する新規のデータ・ファイルを指定できます。
6. 「名前」フィールドに、データ・ファイルの完全なパスと名前を入力します。たとえば、`c:¥orant¥database¥oemrep01.dbf` となります。
7. 「サイズ」セクションに、新規のデータ・ファイルのサイズを入力します。このサイズは、次の計算式を使って求めます。

$20M + DB\_BLOCK\_SIZE$

たとえば、データベース・ブロック・サイズを 2K とすると、ファイル・サイズは 20482K となります。

計算の際は、値をバイト単位に変換した後、バイトを KB に変換します。

$((20 \times 1048576) + (2048)) / 1024 = 20482$

1048576 は、1MB のバイト数です。

8. 「データ・ファイル作成」プロパティ・シートの「OK」ボタンをクリックします。

9. 「エクステント」ページで、「デフォルト値を上書き」を選択し、次の情報を入力します。

初期サイズ: 32K

次のサイズ: 128K

増加サイズ: 0

最大値:

Oracle 7.3 以降をお使いの場合は、「無制限」を選択します。

Oracle 7.3 以前のバージョンをお使いの場合には、「値」を選択します。

DB\_BLOCK\_SIZE が施行するセグメントごとにエクステントの最大値の 75% を指定します。

たとえば、次のように指定します。

| DB_BLOCK_SIZE | 施行される最大値 | 推奨値  |
|---------------|----------|------|
| 2K            | 121      | 90   |
| 4K            | 249      | 186  |
| 8K            | 505      | 378  |
| 16K           | 1017     | 762  |
| 32K           | 2041     | 1530 |

10. 「表領域作成」プロパティ・シートの、「作成」ボタンをクリックします。

## ユーザーの作成

DBA 権限を持ったユーザー・アカウントを設定するには、次の手順に従ってください。

1. Oracle Security Manager を起動します。
2. ログインして、システム (DBA) 権限でデータベースの既存のアカウントに接続します。
3. 「ユーザー」メニューから「作成」を選択します。「ユーザー作成」プロパティ・シートが表示されます。
4. 「一般」ページで、次の情報を入力します。  
「名前」フィールドに、新規ユーザー名を入力します。  
「パスワード」フィールドおよび「パスワード確認」フィールドに、パスワードを入力します。

デフォルト表領域として「OEMREP」を選択します。

ユーザーの一時表領域として、一時セグメント専用となる表領域を選択します。ソート・パフォーマンスを最適化するには、Oracle 7.3以降を実行の際には、必ずこの表領域にTEMPORARYキーワードを付けて定義してください。たとえば、temporary\_dataとします。

5. 「ロール / 権限」ページで、次の情報を入力します。  
「権限タイプ」として「ロール」を選択します。  
DBA（データベース管理者）ロールを、ユーザーに付与します。
6. 必要なパラメータを指定した後に、「作成」ボタンをクリックします。

Oracle Enterprise Managerの起動時には、このユーザー・アカウントでリポジトリ・データベースに接続します。リポジトリは、自動的に生成されます。

---

---

**注意：** Oracle Enterprise Manager バージョン 1.3.5 で開始する場合、新規リポジトリは、新しいユーザー・ログインごとに作成されます。1人のユーザーが一度に使用できるのは1つのリポジトリだけです。

---

---

## リポジトリの作成

Repository Manager ウィザードは、「Oracle Enterprise Manager」プログラムグループで「Repository Manager」を選択すると起動します。

---

---

**注意：** Oracle Repository Manager を使用するには、DBA（データベース管理者）権限がある Oracle ユーザー・アカウントが必要です。

---

---

Repository Manager によって、次の操作を選択できます。

| 操作  | 説明   |
|---|--|
| Oracle Enterprise Manager のリポジトリの作成 / 有効性検査 | プロセスの作成 / 有効性検査時には、Repository Manager によって既存のリポジトリがアップグレードされるか、リポジトリがまだない場合には新しいリポジトリが作成されます。リポジトリを削除すると、リポジトリに含まれている情報は失われます。 |
| Oracle Enterprise Manager のリポジトリの削除         | リポジトリ・コンポーネントのデータベース・オブジェクトが存在する場合、それらは削除されます。   |

| 操作              | 説明  |
|-----------------|---|
| 検出されたノードのリストの保存 | <p>既存のリポジトリで検出されたノードのリストは、テキスト・ファイルに保存できます。</p> <p>discnode.txtなどのファイル名と、検出されたノード名のリストを保存するファイルの位置を指定してください。デフォルトの保存位置は、ORACLE_HOME¥BIN ディレクトリです。</p> <p>テキスト・ファイルは、「新規サービスの検出」ウィザードの「ノードの追加」ページにロードできます。</p> |

作成、有効性検査または削除を行うリポジトリ・コンポーネントを選択できます。Oracle Diagnostics Pack、Oracle Tuning Pack および Oracle Change Management Pack は、Oracle Enterprise Manager リポジトリに依存しています。よって、別のオプションが選択された場合、自動的に選択され、淡色表示されます。たとえば、Tuning Pack リポジトリの作成を選択すると、Oracle Enterprise Manager オプションが必要なので、自動的に選択されます。

「削除」を選択した場合、Oracle Enterprise Manager はデフォルトで選択されます。Oracle Diagnostics Pack、Oracle Tuning Pack および Oracle Change Management Pack は、Oracle Enterprise Manager のリポジトリがない場合は存在することはないので、これも選択されません。特定のパックのリポジトリだけを削除する場合は、Oracle Enterprise Manager のリポジトリのチェックを削除してから、削除するパックのオプションをチェックします。

ウィザードの最後のページでは、要求した操作が実行されるリポジトリのログイン情報を入力できます。このプロセスは完了まで数分かかります。

特定のツールで必要とされるすべてのリポジトリ・オブジェクトは、ツールが最初に起動したときに作成されます。または、ユーザーは、リポジトリに移動して、すべてのリポジトリ・オブジェクトを一度に作成できます。

Oracle Enterprise Manager の以前のリリースの既存のリポジトリがある場合、互換性を調べてください。

- Oracle Enterprise Manager のリポジトリが、Oracle Enterprise Manager コンソールよりも古い場合、リポジトリにログインしたときに既存のリポジトリは自動的にアップグレードされます。
- Oracle Enterprise Manager コンソールが、Oracle Enterprise Manager のリポジトリより古い場合、互換性のある新しいバージョンの Oracle Enterprise Manager をインストールする必要があります。コンソールでは、この状況を検知して、必要なコンソールのバージョンを知らせます。

リポジトリのアップグレード時に、予期しない障害が発生した場合、リポジトリを再作成する必要があります。後でリポジトリを再作成する必要がないように、リポジトリを保存しておくことをお勧めします。リポジトリを保存しておくことで、イベント、ジョブおよび優先接続情報リストなど、ユーザーが手動で入力した情報と、Oracle Expert および Trace などの製品のために収集した情報を保護します。

リポジトリは、全コールド・バックアップ（データベースをオフラインにしてからデータ・ファイルをストレージにコピーする）を行うか、またはユーザーをエクスポートして保存できます。

## Oracle Enterprise Manager の起動

Oracle Enterprise Manager コンソールを起動するには、「スタート」メニューで「Oracle Enterprise Manager」フォルダから「Oracle Enterprise Manager」を選択します。

---

---

**注意：** Oracle Enterprise Manager コンソールのインスタンスは、1 台のマシンで1つしか実行できません。ただし、DBA ツールのインスタンスは複数実行できます。リモート・マシンからの Oracle Enterprise Manager の実行はサポートされていません。ローカルでの実行だけがサポートされています。コンソールの共用インストールはサポートされていません。

---

---

## リポジトリの接続

Oracle Enterprise Manager では、リポジトリが異なるデータベースにあるかどうかにかかわらず、すべてのリポジトリで一意的なユーザー名が必要です。これは、次の理由のためです。

- インテリジェント・エージェントでは、ジョブとイベントを追跡するときに、一意的なユーザー名が使われる。
- ユーザー名は、通知の戻りアドレスの作成時に、コンソールの位置に関連付けられる。

リポジトリへの接続プロセスの概略を次に示します。

1. Enterprise Manager を起動します。
2. 著作権のウィンドウが表示され、次に、「ログイン情報」ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. 「ログイン情報」ダイアログ・ボックスによって、この Oracle Enterprise Manager のリポジトリが格納されている Oracle データベースのユーザー・アカウントに接続します。
4. コンソールでは、ユーザー名に関連付けられているリポジトリが調べられます。

リポジトリは、存在しない場合には自動的に作成され、ダイアログ・ボックスによってその操作が知らされます。

---

**注意：** 同じユーザー名でコンソールのリポジトリに複数回ログインしないでください。これを行った場合、警告が表示されます。以前のコンソール・セッションが異常終了したか、マシンが切断した場合には、警告を無視します。ユーザー名が複数回ログインされた場合、最新のログインにエージェントの通知が送信されます。

---

## ネットワーク・サービスの検出

Oracle Enterprise Manager コンソールでは、データベース、リスナーおよびノードなどのネットワーク・サービスを検出して、ナビゲータ・ツリーに挿入しなければなりません。この操作はサービスをジョブ制御システムおよびイベント管理システムで管理するためのものです。

ナビゲータの「サービスの検出」には、ネットワーク・サービスを特定し、ナビゲータ・ツリーに挿入するためのウィザードがあります。

検出サービスを開始するには、Oracle ネットワーキング・システムを正しくインストールする必要があります。サービスを検出する方法は次のとおりです。

| 方法                     | 機能   | エージェントのバージョン   |
|------------------------|--|--|
| 「新規サービスの検出」ウィザード       | 新しいノードおよびそのノードのサービスを検出します。                               | TCP/IP プロトコルを使用するリリース 7.3.3 以降のインテリジェント・エージェント         |
| 「サービスのリフレッシュ」ウィザード     | ノードでの検出をリフレッシュし、再試行します。                                  | TCP/IP プロトコルを使用するリリース 7.3.3 以降のインテリジェント・エージェント         |
| 「サービスの手動定義」ウィザード       | ノードのサービスについての情報を手動で入力できるようにします。                          | Oracle Intelligent Agent がないか、7.3.3 以前のインテリジェント・エージェント |
| topo_ops.ora ファイルによる検出 | ナビゲータのサービス検出機能では追加できない Oracle Parallel Server を手動で追加します。 | 7.3.3 以前の Oracle Intelligent Agent                     |

---

**注意：** 検出時には、インテリジェント・エージェントが稼働していなければなりません。

---

---

---

**重要：** 8.0.4.1 より前の Oracle Intelligent Agent からアップグレードした場合は、すでに検出済みのサービスは削除して、再度検出する必要があります。  
8.0.4.1 以降のエージェントでは、グローバル・データベース名をサポートしません。

---

---

サービスを検出するには、次の手順に従ってください。

1. Oracle Enterprise Manager コンソールにログインします。

これが新規インストールである場合、検出ウィザードが表示されます。

これが新規インストールではない場合、検出ウィザードを起動します。「メイン」メニューから、「ナビゲータ」→「サービスの検出」→「新規サービスの検出」を選択し、「次へ」ボタンをクリックします。

2. 「ノードの追加」ページでは、ノードを1つずつ入力するか、テキスト・ファイルからロードします。

ノードをウィザードに入力するには、「新規ノード」フィールドにノード名を入力し、「追加」ボタンをクリックします。各ノードについてこれを繰り返します。

ノード数が多い場合は、それらの名前が含まれるテキスト・ファイルを2つに分けて作成できます。ファイルでは、1行ごとに各ノード名が記述されます。Oracle Enterprise Manager が検出できるように、テキスト・ファイルには\*.txt と名前指定します。

3. 「次へ」ボタンをクリックします。

4. 「終了」ボタンをクリックします。

この操作を行うと、services.ora ファイルの情報がエージェントから Oracle Enterprise Manager コンソールに渡され、ナビゲータ・ツリーに挿入されます。

当該のデータベースを検出できない場合、ご使用のプラットフォーム固有のエージェントの資料を参照してください。NT ユーザーの場合、1-7 ページの「起動しない NT エージェントのトラブルシューティング」を参照してください。UNIX ユーザーの場合、1-13 ページの「起動しない UNIX エージェントのトラブルシューティング」を参照してください。

---

---

**注意：** Oracle Enterprise Manager では、topology.ora は使われなくなりました。ナビゲータ・ツリーのサービスをすべて削除し、以前のリリースで使われていた topology.ora を削除することをお奨めします。

---

---

Oracle Enterprise Manager (バージョン 1.4.0 以降) では、7.3.3 以前のエージェントについて topology.ora ファイルが使われなくなったので、7.3.3 以降のエージェントが実行中ではないデータベースは、手動でナビゲータに追加する必要があります。

1. Oracle Enterprise Manager コンソールにログインします。
2. 「メイン」メニューで「ナビゲータ」→「サービスの検出」→「手動でのサービスの定義」を選択し、「次へ」ボタンをクリックします。
3. 「リリース 7.3.3 以前の Oracle Intelligent Agent が組み込まれたノード」ボックスをクリックします。
4. 「ノード名」ボックスにノード名を入力し、「追加」ボタンをクリックします。
5. 「データベース」には、ローカル・ボックスおよびサーバーの TNSNAMES.ORA ファイルで定義されているデータベース・サービス記述子を入力します。エント리는、両方のシステムで一致しなければなりません。
6. 「次へ」ボタンをクリックします。
7. 「終了」ボタンをクリックします。

## Oracle Enterprise Manager コンソールおよび Oracle Names

Oracle Enterprise Manager コンソールおよびデータベース・アプリケーションでは、その他の Oracle コンソール・アプリケーションと同様に、Oracle Names によってサービス名を解決します。

1. クライアントでは、最初に、固有のクライアント側キャッシュが調べられます。クライアントが過去 24 時間の内に Oracle Names Server に接続した場合は、Oracle Names Server のアドレスがキャッシュに残っている可能性があります。
2. クライアントに SQLNET.ORA ファイルがある場合、NAMES.PREFERRED\_SERVER パラメータが検索されます。パラメータが 1 つあれば、最初にリストされた Oracle Names Server に問合せが行われます。
3. クライアントでは、定式アドレスで Oracle Names Server が検索されます。TCP/IP ネットワークの Oracle Names Server の定式アドレスは、ポート 1575 を使用して別名が oranamesvr(), oranamesvr1, ...oranamesvr4 に指定されたホストです。

Oracle Names でのクライアントの構成方法の詳細は、『Oracle Names 管理者ガイド』を参照してください。

---

---

**注意：** これらのサービスの検出や、ジョブの実行を行う前に、Net8 の接続性をテストしてください。C-4 ページの「任意の SID への接続性のテスト」を参照してください。

---

---

## Oracle Enterprise Manager DBA アプリケーションの起動

次のメソッドの1つを使用して、Oracle Enterprise Manager データベース管理アプリケーションを起動できます。

| 使用対象                  | 処理  |
|-----------------------|---|
| コンソール                 | <p>次の3つの方法から選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ ナビゲータ・ツリーまたはマップ・ウィンドウで、管理するデータベースを選択してから、コンソールの「ツール」メニューまたはランチ・パレットでアプリケーションを選択します。</li> <li>■ ナビゲータ・ツリーで管理するデータベースを選択してから、状況依存メニューの「関連ツール」メニューでアプリケーションを選択します。</li> <li>■ コンソールの「ツール」メニューまたはランチ・パレットでアプリケーションを選択し、「リポジトリの接続」ダイアログ・ボックスに接続情報を入力します。</li> </ul> |
| 各アプリケーション             | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「スタート」メニューで Oracle Enterprise Manager コンソールを起動します。</li> <li>2. 「Oracle Enterprise Manager」プログラムグループのアプリケーション・アイコンをダブルクリックします。</li> <li>3. 「リポジトリの接続」ダイアログ・ボックスで、接続情報を入力します。</li> </ol>  |
| Administrator Toolbar | <p>ツールバーのツールのアイコンをクリックします。ツールは、指定されていれば、ツールバーのデフォルト・データベースに接続されます。</p> <p>他のデータベースへの接続の詳細は、管理ツールバーのオンライン・ヘルプを参照してください。</p>  |

---

**注意：** コンソールを実行していなくても、データベース管理アプリケーションは起動できます。例外は、ジョブ制御システムを使用する Backup Manager および Data Manager だけです。

---

ツールを実行すると、Oracle データベースに接続されます。Oracle データベースへの接続の詳細は、オンライン・ヘルプを参照してください。

アプリケーションを起動する前に、コンソールでデータベースを選択すると、そのデータベース用に設定された優先接続情報リスト、またはコンソールへのログインに使った設定リストに従って、データベースに接続されます。なんらかの原因でデータベースへの接続が失敗すると、「リポジトリの接続」ダイアログ・ボックスが表示されます。

## 作業環境の設定

エージェントによって管理対象ノードでジョブを実行するには、コンソールで有効な設定リストを指定する必要があります。

---

**注意：** ユーザーが、特定のサービス（データベース、ノード、リスナー）について優先接続情報リストを設定していない限り、ジョブはリポジトリ所有者ログイン・アカウントを使って発行されます。

---

優先接続情報リストを設定するには、次のステップを実行します。

1. Oracle Enterprise Manager コンソールで、インテリジェント・エージェントがインストールされているマシンの設定を行うために「ファイル/作業環境」を選択します。
2. そのノード名をハイライト表示し、アカウント名およびパスワードを入力します。

NT ユーザーの場合、(NT エージェントが常駐する) ノードの優先接続情報リストを、「バッチ ジョブとしてログオン」に設定されたユーザーと同じに設定する必要があります。エージェントでは、エージェントで実行されるジョブの所有者すべてのユーザー名とパスワードが認証されます。作業環境を正しく設定していない場合、ジョブを発行したときに「ユーザーの認証に失敗しました」のエラー・メッセージが表示されます。

UNIX ユーザーの場合、(データベースの db ユーザーではなく) ノードの有効な UNIX オペレーティング・システム・ユーザーを指定する必要があります。ユーザーには、sqlplus のようなプログラムを実行したり、UNIX サーバーでインポート/エクスポートを行うためのオペレーティング・システム権限が必要です。権限は、既存のローカル・ユーザーまたはドメイン・ユーザーに割り当てられます。優先接続情報リストが、エージェントを起動したアカウントに一致しない場合、「ユーザーの認証に失敗しました」のエラー・メッセージが表示されます。

## バックアップまたは SYSDBA 管理のためのリモート・データベースの構成

Oracle Enterprise Manager のジョブ制御システムによって、データベースの停止または起動などのバックアップ・サブシステムの実行または管理タスクの実行を要求する前に、リモート操作のデータベースを設定する必要があります。

次の手順では、サーバーおよびクライアントの両方で実行する必要がある操作のアウトラインを述べます。次の手順で使用されている例は、UNIX 環境用です。Windows NT でのディレクトリ、システム変数、表記規則は異なります。

**追加情報：** ご使用のシステムのパスワード・ファイル作成ユーティリティの正確な名前は、ご使用の Oracle データベースのオペレーティング・システム固有のマニュアルを参照してください。

### サーバー側 (UNIX) :

1. ORACLE でログインし、ご使用の環境変数を設定します。

```
setenv ORACLE_HOME your_oracle_home
setenv ORACLE_SID your_oracle_sid
```

---

---

**注意:** この例では、データベースを ORACLE から設定したものです。

---

---

2. Oracle ホームの dbfs ディレクトリに移動します。

```
cd $ORACLE_HOME/dbfs
```

3. ORAPWD 実行ファイルを実行して、新規パスワード・ファイルを作成します。

```
$ORACLE_HOME/bin/orapwd file=orapw<SID> password=your_password entries=10
```

ファイル名は、*orapw<SID>* でなければなりません。entries = 10 は、別個の DBA および OPER の最大数です。

\$ORACLE\_HOME/dbfs には *orapw<SID>* を 1 つ作成しなければなりません。

4. *init<SID>.ora* ファイルを編集します。 *init<SID>.ora* ファイルで、文 *remote\_login\_passwordfile=exclusive* を追加または変更します。
5. データベースをいったん停止してから再起動します。
6. Server Manager ライン・モードを起動します。
7. *sys/sys\_password* で接続します。
8. リモート SYSDBA 権限がない場合、権限を持つユーザーを作成します。次の例で、*remote* は、SYSDBA 権限を持つユーザー名です。
9. 接続および SYSDBA 権限をユーザーに付与します。

```
create user remote identified by remote;
```

```
grant connect, resource to remote;
grant sysdba to remote;
```

10. Server Manager ライン・モードを終了します。

### クライアント側 (Windows NT) :

ターゲット・データベースの起動および停止をリモートから行う場合は、次の手順に従ってください。

1. Oracle Enterprise Manager コンソールの「ナビゲータ」からターゲット・データベースを選択します。
2. Oracle Instance Manager を起動します。
3. SYSDBA 権限を持ったユーザーとしてログインします。
4. 「初期化パラメータ」をダブルクリックします。「初期化パラメータ」プロパティ・シートが表示されます。
5. 「保存」をクリックします。「構成の保存」プロパティ・シートが表示されます。
6. 構成名を入力します。
7. 「ストアド・パラメータ」マルチ列リストの「コメント」列に表示させるコメントを入力します。
8. 「OK」をクリックします。
9. リモート SYSDBA ログインをテストします。Oracle Instance Manager を起動して、SYSDBA 権限で作成したユーザーでログインします。作成したストアド構成を使って、データベースを起動また停止できなければなりません。

### バックアップ・モードの設定

オンライン・バックアップ（ホット・バックアップ）を実行する場合は、データベースを ARCHIVELOG モードにする必要があります。そうでなければ、データベースを停止してから、バックアップを実行しなければなりません。デフォルトでは、データベースは NOARCHIVELOG モードになります。

データベースを ARCHIVELOG モードにするには、次のようにします。

1. `init.ora` データベース初期化ファイルの次のセクションを、その指示に従って編集します。

```
# Uncommenting the line below will cause automatic archiving if archiving has
# been enabled using ALTER DATABASE ARCHIVELOG.
# log_archive_start = true
# log_archive_dest = %ORACLE_HOME%\database\archive
# log_archive_format = "%ORACLE_SID%T%TS%S.ARC"
```

2. 「データベース」メニューから「アーカイブ・ログ」を選択します。ARCHIVELOG モードをセットします。

バックアップおよびリカバリ方針の詳細は、『Oracle8 Server バックアップおよびリカバリ』を参照してください。

## Oracle8 のためのリカバリ・カタログの設定および登録

リカバリ・カタログは、Recovery Manager によって使用され、維持される情報のリポジトリです。Recovery Manager では、リカバリ・カタログの情報を使って、要求されたバックアップおよびリストア・アクションの実行方法が判断されます。

リカバリ・カタログで Oracle8 Recovery Manager を使用するには、最初にリカバリ・カタログをインストールし、次にデータベースを登録します。制御ファイルを使用している場合には、設定の必要はありません。リカバリ・カタログは、ターゲット・データベースとは異なる位置にインストールすることをお奨めします。

リカバリ・カタログのメンテナンス、Recovery Manager、バックアップおよび回復の方針の詳細は、『Oracle8 Server バックアップおよびリカバリ』を参照してください。

**重要：** リカバリ・カタログをインストールする前には、Oracle Enterprise Manager ジョブ制御システムが正しく機能している必要があります。ターゲット・データベースをリカバリ・カタログに登録するには、ジョブ制御システムが必要です。

### リカバリ・カタログの設定

リカバリ・カタログを設定するには、次の手順を完了していなければなりません。

- 「表領域の作成」
- 「ユーザーの作成」
- 「catrman スクリプトの実行」

#### 表領域の作成

1. Oracle Storage Manager を起動します。
2. DBA ロールを持つユーザーとしてログインします。
3. 「表領域」メニューから「作成」を選択します。「表領域作成」プロパティ・シートが表示されます。

---

**注意：** Oracle Enterprise Manager コンソールから「ナビゲータ」メニューを使って、「表領域作成」プロパティ・シートを表示させることもできます。

---

4. 「名前」フィールドに、新規の表領域の名前を入力します。たとえば、rcvcat とします。
5. 「データ・ファイル」セクションの「追加」ボタンをクリックします。「データ・ファイル作成」プロパティ・シートが表示され、新規の表領域に属する新規のデータ・ファイルを指定できます。

6. 「名前」フィールドに、データ・ファイルの完全なパスと名前を入力します。たとえば、`c:\¥orant¥database¥rcvcat01.dbf` となります。
7. 「サイズ」セクションに、新規のデータ・ファイルのサイズを入力します。たとえば、10M と入力します。
8. 「データ・ファイル作成」プロパティ・シートの「OK」ボタンをクリックします。
9. 「表領域作成」プロパティ・シートの「作成」ボタンをクリックします。

### ユーザーの作成

1. Oracle Security Manager を起動します。
2. DBA ロールを持つユーザーとしてログインします。
3. 「ユーザー」メニューから「作成」を選択します。「ユーザー作成」プロパティ・シートが表示されます。

---

---

**注意：** Oracle Enterprise Manager コンソールから「ナビゲータ」メニューを使って、「ユーザー作成」プロパティ・シートを表示させることもできます。

---

---

4. 「一般」ページで、次の情報を入力します。  
「名前」フィールドに、新規ユーザー名を入力します。たとえば、`rman` とします。  
「パスワード」フィールドおよび「パスワード確認」フィールドに、パスワードを入力します。たとえば、`rman` とします。  
デフォルト表領域を選択します。たとえば、`RCV CAT` とします。  
「一時表領域」を選択します。たとえば、`TEMPORARY_DATA` とします。
5. 「ロール/権限」ページで、次の情報を入力します。  
「権限タイプ」として「ロール」を選択します。  
ユーザーに、`RECOVERY_CATALOG_OWNER` ロールを付与します。
6. 「割当て制限」ページで、デフォルト表領域に対して割当て制限なしを指定します。この例では、デフォルト表領域は `RCV CAT` です。
7. 必要なパラメータを指定した後に、「作成」ボタンをクリックします。

### catrman スクリプトの実行

1. SQL Worksheet を起動します。
2. 必要なログイン情報を入力します。たとえば、`user=RMAN, password=RMAN` とします。

3. `create_rman.log` のスプールを実行すると、エラーがログ・ファイルに書き込まれません。
4. `Oracle_Home/rdbms/admin` ディレクトリにある `catrman` スクリプトを実行します。

### リカバリ・カタログの Oracle8 Recovery Manager (GUI) への登録

1. Oracle Enterprise Manager コンソールを起動します。
2. 「ファイル」メニューで「作業環境」を選択します。「ユーザー設定項目」ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. 優先接続情報リストで、バックアップが必要な任意のターゲット・データベースへの SYSDBA アクセスが指定されていることを確認してください。通常、ユーザー名は、以前のセクションで作成したものです。2-14 ページの「リカバリ・カタログの設定」を参照してください。
4. ナビゲータからターゲット・データベース（バージョン 8.0）を選択します。
5. Oracle Backup Manager を起動します。「バックアップ・サブシステムの選択」ダイアログが表示されます。
6. Oracle8 Recovery Manager を選択し、次に「OK」をクリックします。（Oracle8 Recovery Manager サブシステムを使用する）Oracle Backup Manager が表示されます。
7. 「カタログ」メニューで「リカバリ・カタログの使用」を選択します。
8. 必要なログイン情報、つまりユーザー名、パスワード、およびサービスを入力します。たとえば、`user=RMAN`、`password=RMAN`（またはリカバリ・カタログを使ってデータベースにアクセスするために作成する任意のユーザー）などです。
9. ターゲット・データベースをリカバリ・カタログに登録するかどうかを尋ねられます。「登録」をクリックします。この時点で、データベース登録は、Oracle Enterprise Manager ジョブ制御システムにジョブとして送信されます。
10. Oracle Backup Manager で、「アクティブ・ジョブ」リストの登録ジョブをダブルクリックし、ジョブの現行の状態を参照します。
11. ジョブが完了したら、「ジョブ」プロパティ・シートでジョブの履歴をチェックして、ジョブが正常に完了したことを確認します。

ジョブが正常に完了すると、バックアップおよびリカバリの環境が構成されます。リカバリ・カタログのメンテナンス、Recovery Manager、バックアップおよび回復の方針の詳細は、『Oracle8 Server バックアップおよびリカバリ』を参照してください。

## 電子メールの送信時の日本語文字のコード化

電子メールを送信する場合、日本語文字のコード化を使用可能にするために、登録キーが使用できません。

登録キーを設定するには、次の手順に従ってください。

1. regedit (レジストリ エディタ) を実行します。
2. SOFTWARE¥ORACLE¥OracleSMPCConsole¥Email にある登録キー szDestCharSet を検索します。
3. デフォルトのアイコンをダブルクリックして、szDestCharSet の値を設定します。

## トラブルシューティング

Oracle Enterprise Manager の設定時に問題が発生した場合、次のトラブルシューティングの項目を参照してください。

### ユーザーの認証の失敗

ユーザーがジョブを発行した時に、「ユーザーの認証に失敗しました」のエラーが発生した場合、次に示すヒントに従ってください。

**ヒント A:** エージェントが UNIX プラットフォームにある場合、`$ORACLE_HOME/bin/dbsnmp` を調べて、`dbsnmp` 実行可能ファイルがルートによって所有されていることを確認します。1-10 ページの「`root.sh` が正常に実行されたことの確認」を参照してください。

**ヒント B:** NT ノードの場合、ノードの優先接続情報リストが、「バッチ ジョブとしてログオン」に設定されるユーザーと同様に設定されていることを確認してください。2-11 ページの「作業環境の設定」を参照してください。

**ヒント C:** NT エージェントが `system` 以外のアカウントから起動された場合、「ユーザーの認証に失敗しました」というメッセージが表示され、ジョブはすべて失敗します。これは、ジョブ設定リスト・アカウントが「バッチ ジョブとしてログオン」権限を持っているかどうかにかかわらず発生します。

NT の「管理ツール」プログラムグループの「ユーザー マネージャ」を使って、エージェントを起動する際に使うアカウントに、次の権限 (ユーザーの権利) を割り当てる必要があります。

- サービスとしてログオン
- オペレーティング・システムの一部として機能
- プロセス・レベル・トークンの置き換え
- クォータの増加

NT エージェントは、ジョブを実行する際に `CreateProcessAsUser()` Win32 API を使うため、これらの権限が必要です。これらの権限を持つ新規のアカウントを作成するか、既存のアカウントにこれらの権限を追加します。

ローカルの NT マシンに新規の Windows NT ユーザー・アカウントを作成し、そのユーザーに権限を付与する方法の例は、1-4 ページの「新規 NT ユーザー・アカウントの作成」を参照してください。

既存のローカル・ユーザー・アカウントに権限を付与する方法の例は、1-4 ページの「既存の NT ユーザー・アカウントへの権限の割当て」を参照してください。

システム以外アカウントから Windows NT でエージェントを起動するには、次のステップを実行します。

1. 「コントロールパネル」フォルダ内の「サービス」アイコンをダブルクリックします。
2. OracleAgent サービスを選択します。
  - a. 「スタートアップの種類」は「手動」に設定されており、ユーザーがエージェントを起動できます。システムの起動時にエージェントを自動的に起動するには、「スタートアップの種類」を「自動」に設定します。
  - b. 「ログオン」セクションで、「既に設定済の」アカウントを選択します（ローカル・アカウントまたはドメイン・アカウントのいずれか）。
3. 「起動」ボタンをクリックして、エージェントを起動します。

### 失われたジョブの出力

ジョブが失敗すると、ジョブ出力ウィンドウに次のメッセージが表示されます。

```
output from job # lost
```

次にリストしたヒントに従ってください。

- エージェントが UNIX プラットフォームにある場合、優先接続情報リストは、`$ORACLE_HOME/network/agent` ディレクトリへの書込み許可を保有するユーザーに対応させてください。
- `catsnmp.sql` スクリプトが、データベースで実行されていません。エージェントが NT データベースに対して実行されている場合、`catsnmp.sql` は、データベースをインストールし、開始データベースの作成を選択したときに実行されます。自分で作成するその他のデータベースでは、このスクリプトは自動的に実行されません。1-18 ページの「エージェントに必要なロールとユーザー」を参照してください。
- エージェントが NT 3.51 で実行されている場合、SP5 がインストールされていないマシンで問題が発生します。Service Pack 5 の詳細は、`readme` にある Microsoft の Web サイトを参照してください。

### 「スケジュール済み」状態でのジョブの停止

**ヒント A:** NT では、「バッチ ジョブとしてログオン」権限がアカウントに必要です。

Oracle パーティションが、NTFS（ファイルおよびディレクトリのローカル・セキュリティが可能な NT ファイル・システム）としてフォーマットされている場合、許可設定「フルコ

ントロール」を、「バッチジョブとしてログオン」が割り当てられたユーザーにローカルに付与することも必要です。

ローカルなファイル許可を付与するには、次の手順に従ってください。

1. 「スタート」、「プログラム」、「Windows NT エクスプローラ」をクリックします。
2. Oracle がインストールされているドライブをハイライト表示し、マウスの右ボタンをクリックします。
3. 「プロパティ」→「セキュリティ」→「許可」→「追加」→「ユーザーを表示」の順に選択します。
4. 「バッチジョブとしてログオン」権限が付与されているアカウントをハイライト表示し、「追加」をクリックします。
5. 「アクセスのタイプ」をクリックして、ドロップ・ダウン・リストから「フルコントロール」を選択します。
6. 次に「OK」をクリックし、さらに（次の画面でも）「OK」をクリックして、スクリーンをクローズします。

**ヒント B:** エージェントでコンソールにアクセスできるかどうかを調べます。

サーバー・マシンからコンソールを ping してください。IP アドレスが不明な場合、「スタート」ボタン→「設定」→「コントロールパネル」→「ネットワーク」→「プロトコル」→TCP/IP を実行し、プロパティ・ボタンをクリックして調べてください。

コンソールを ping できない場合、Oracle Daemon Manager のホスト・アドレスを TCP/IP アドレスに設定します。

**ヒント C:** DNS ホストのエントリが、listener.ora ファイルおよび tnsnames.ora ファイルのノード名に設定されていることを確認します。

1. 「スタート」ボタン→「設定」→「コントロールパネル」→「ネットワーク」→「プロトコル」→「TCP/IP プロパティ」を実行します。
2. DNS ホストのエントリを調べます。たとえば、エントリが前のエンジニアの名前に設定されていないことを確認します。

### ジョブ・プロセスの停止

ジョブを実行するユーザーは、\*.log ファイルに書き込むためには (\$ORACLE\_HOME¥net80¥agent ディレクトリではなく) \$ORACLE\_HOME¥net80 ディレクトリの読み書き許可が必要です。また、\$TEMP ディレクトリまたは \$ORACLE\_HOME ディレクトリに対する書き込み許可も必要です。



# 3

---

## 管理パックの構成

Oracle Diagnostics Pack および Oracle Tuning Pack のアプリケーションのなかには、構成が必要なものがあります。この章では、次のトピックを取り上げます。

- 3-2 ページの「Oracle TopSessions の設定」
- 3-3 ページの「Oracle Trace の設定」
- 3-5 ページの「Oracle Performance Manager の設定」
- 3-7 ページの「Oracle Tablespace Manager の設定」
- 3-7 ページの「Oracle Expert の設定」
- 3-8 ページの「Oracle SQL Analyze の設定」

これらのアプリケーションは、Oracle Diagnostics Pack、Oracle Tuning Pack、および Oracle Change Management Pack をインストールしてから設定します。

---

**注意：** Oracle Diagnostics Pack、Oracle Tuning Pack、および Oracle Change Management Pack は、それぞれ個別にライセンスを取得し購入していただく製品です。

---

## Oracle Diagnostics Pack の設定

Oracle Diagnostics Pack は、システムの状態の監視、問題の診断、問題の自動検出、および将来計画するための使いやすいツールです。

この項では、次のトピックについて説明します。

- 3-2 ページの「Oracle TopSessions の設定」
- 3-3 ページの「Oracle Trace の設定」
- 3-5 ページの「Oracle Performance Manager の設定」

### Oracle TopSessions の設定

Oracle TopSessions の機能をインストールするには、次の条件が必要です。

- TopSessions から接続する各データベースに表およびビューを追加作成。
- 特定の SELECT 権限を付与されている。

smptsixx.sql スクリプトは、このプロセスを自動化するためのものです。

ファイル名の xx には、スクリプトを実行するデータベースのバージョンを示します。各データベース・バージョン用のスクリプトは、\$ORACLE\_HOME¥SYSMAN¥ADMIN ディレクトリにあります。

| データベースのバージョン | 実行するスクリプト |
|--------------|-----------|
|--------------|-----------|

|            |                    |
|------------|--------------------|
| Oracle 7.3 | smptsi73.sql スクリプト |
| Oracle 8.0 | smptsi80.sql スクリプト |

smptsixx.sql を実行すると、次の 2 つのスクリプトも自動的に実行されます。

- catbloxx.sql
- utlxplx.sql

これらの 2 つのスクリプトによって、Oracle 拡張イベントで必要ないくつかの追加の表、ビュー、およびパブリック・シノニムが、管理対象のデータベースに作成されます。

データベースに Oracle TopSessions を設定するには、次のステップを実行します。

1. 「Oracle Enterprise Manager」プログラムグループで「SQL Worksheet」アイコンをダブルクリックして、ツールを起動します。

Oracle Enterprise Manager およびツール起動の詳細は、2-10 ページの「Oracle Enterprise Manager DBA アプリケーションの起動」を参照してください。

2. 「ログイン情報」ダイアログ・ボックスを使って、管理対象のデータベースに SYS として接続します。

オンライン・ヘルプまたは『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

3. 各管理者アカウントに、**SELECT ANY TABLE** 権限を付与します。**SYSTEM** と同等の権限がすでにアカウントに付与されている場合は、このステップを省略できます。  
管理対象のデータベースで **smptsixx.sql** スクリプトを実行する場合、前述のとおり、各データベースに **SYS** としてログインしなければならないことに注意してください。  
アカウントに権限を付与する方法の例は、2-2 ページの「リポジトリ・ユーザー・アカウントの設定」を参照してください。
4. 管理対象のデータベースに対して **smptsixx.sql** スクリプトを実行します。  
管理対象のデータベースで **smptsixx.sql** が実行されない場合、**Oracle TopSessions** を使おうとすると、「表またはビューがありません」というメッセージが表示されることがあります。
5. **SQL Worksheet** を終了します。

## Oracle Trace の設定

Oracle Trace は、クライアント / サーバー構成が正しくなければ使用できません。

Oracle Trace では、次の条件が必要です。

- Oracle 7.3.3 以降の Oracle Enterprise Manager Intelligent Agent が、Oracle Trace 収集のターゲットとなるノードにインストールされ、実行されている。
- Oracle Enterprise Manager コンソールが実行されており、Oracle Trace を使用するノードが、コンソールのナビゲータにリストされている。Oracle Trace では Oracle Enterprise Manager ジョブ・サブシステムを使って、タスクが実行されます。

この項には、次の項目があります。

- 3-3 ページの「Oracle 8 サーバー収集での Oracle Trace の使用」
- 3-4 ページの「Oracle 7.3 サーバー収集での Oracle Trace の使用」
- 3-4 ページの「Oracle Trace のリポジトリ表の作成」
- 3-4 ページの「Oracle Trace のフォーマット表の作成」
- 3-5 ページの「その他の構成情報」

### Oracle 8 サーバー収集での Oracle Trace の使用

Oracle8 サーバー収集で Oracle Trace を使う場合、**INITSid.ORA** ファイルの **ORACLE\_TRACE\_ENABLE** パラメータの値を **TRUE** に設定する必要があります。

### Oracle 7.3 サーバー収集での Oracle Trace の使用

Oracle 7.3 サーバー収集で Oracle Trace を使う場合、Oracle Trace のユーザー・アカウント TRACESVR と、Oracle Trace のストアド・プロシージャ・パッケージ DBMS\_ORACLE\_TRACE\_AGENT および DBMS\_ORACLE\_TRACE\_USER が存在することを確認してください。それらがいない場合、otrsvr.sql スクリプトを SYS で実行して、それらを作成する必要があります。otrsvr.sql スクリプトは、UNIX システムでは \$ORACLE\_HOME/otrace/admin にあり、NT システムでは \$ORACLE\_HOME\otracexx\admin にあります。

otrsvr.sql スクリプトは、ほとんどのプラットフォームで、データベース・インストール時に自動的に実行されます。ただし、サーバー・プラットフォームが NT の場合、このスクリプトは手動で実行する必要があります。

### Oracle Trace のリポジトリ表の作成

Oracle Diagnostics Pack、Oracle Tuning Pack、または Oracle Change Management Pack 製品が初めて起動されると、Oracle Trace で必要なすべての表が自動的に作成または更新されます。

### Oracle Trace のフォーマット表の作成

Oracle Trace Collection Services バージョン 8.0.4 をお使いの場合、専用のフォーマット表が作成されます。

Oracle Trace フォーマット表は、Oracle Trace によって管理されるデータベースに必要です。Oracle Trace により、Oracle Trace バイナリ・ファイル (*collection\_name.dat*) が変換され、アクセス用の Oracle 表にロードされます。

Oracle 7.3.3 以降のデータベースから収集された Oracle Trace データは、最新の Oracle Trace フォーマット表が使用しているデータベースにだけ格納できます。Repository Manager を使うか、DOS ウィンドウから vobsh コマンドを使って、新規フォーマット表を作成して、既存のフォーマット表を削除するか、またはフォーマット表の以前のバージョンをデータベースの最新バージョンにアップグレードします。

Repository Manager の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。これらの操作を実行するフォーマット表操作と vobsh コマンドについては、次に説明します。

指定のユーザーに指定のサービスのアカウントがない場合、vobsh コマンドは失敗します。この場合、指定のサービスにユーザーのアカウントを作成してから、vobsh コマンドを再度実行します。

**新規フォーマット表の作成** フォーマット表が現在存在しないデータベースに新規のフォーマット表を作成するには、次のように vobsh コマンドを使います。

```
vobsh -c "user/password@service" -o CREATE -p "EPCFMT"
```

フォーマット表に格納されるフォーマット済みデータは、規模が非常に大きくなる可能性があるため、フォーマット表が作成されるデータベースには、大量のデータを格納できる十分な領域が必要であることに注意してください。

**既存のフォーマット表の削除** 表から既存のフォーマット表を削除するには、次のように vobsh コマンドを使います。

```
vobsh -c "user/password@service" -o DROP -p "EPCFMT"
```

このコマンドにより、指定のデータベースからすべてのバージョンのフォーマット表が削除されます。vobsh では、既存のフォーマット表が削除されるだけでなく、表に格納されているフォーマット済みデータも削除されることに注意してください。

**フォーマット表のアップグレード** フォーマット表の旧バージョンの有効性検査（アップグレード）を行う（必要に応じてフォーマット表の作成、削除またはアップグレードを行う）には、次のように vobsh コマンドを使います。

```
vobsh -c "user/password@service" -o VALIDATE -p "EPCFMT"
```

このコマンドにより、データベースのフォーマット表のバージョンが判別され、必要に応じてそれらを新バージョンにアップグレードできます。

### その他の構成情報

この章の指示に従って構成したにもかかわらず、Oracle Trace の実行に問題が発生した場合は、『Oracle Enterprise Manager Oracle Trace ユーザーズ・ガイド』の付録「Oracle Trace のトラブルシューティング」を参照してください。

## Oracle Performance Manager の設定

この項には、次の項目があります。

3-5 ページの「旧 Oracle Performance Manager のユーザー定義のグラフの変換」

3-6 ページの「パラレル・サーバーでの Oracle Performance Manager の使用」

### 旧 Oracle Performance Manager のユーザー定義のグラフの変換

1.5.0 以前の Oracle Performance Manager（Oracle Performance Manager の Windows 版）を使ってユーザー定義のグラフを作成した場合、それらのグラフを変換して Oracle Performance Manager 1.6.0 とともに使えます。ユーザー定義のグラフの変換は、次のように行います。

1. vmmmig.exe を実行し、\$ORACLE\_HOME¥SYSMAN¥ADMIN に vtmusr.txt という名前のテキスト・ファイルを作成します。このテキスト・ファイルには、1.5.0 以前の Oracle Performance Manager を使って作成したユーザー定義のグラフに関するデータが含まれています。vmmmig.exe を実行する際、変換するユーザー定義のグラフが含まれ

ている Oracle Enterprise Manager リポジトリに対するユーザー名、パスワード、およびサービスを指定します。たとえば、次のようになります。

```
vmmmig joseph/password@my_rep
```

前のコマンド行の `my_rep` は、Oracle Enterprise Manager リポジトリに対するサービス名ということに注意してください。

2. `vmm2vtm` を実行すると、`vtmusr.txt` にあるデータを使って Oracle Performance Manager 1.6.0 で使用できるユーザー定義のグラフをリポジトリに作成します。`vmm2vtm` を起動する際に、ユーザー名、パスワード、および Oracle Enterprise Manager 1.6.0 リポジトリでのサービスを入力し、サービス名は Oracle Performance Manager 1.6.0 用に保存したユーザー定義のグラフを使用する場合のサービスの名前です。

```
vmm2vtm joseph/password@my_rep my_db
```

前のコマンド行の `my_rep` は、Oracle Enterprise Manager 1.6.0 のリポジトリのサービス名です。また、`my_db` はユーザー定義のグラフを保存するターゲット・サービスの名前です。言い換えれば、前のコマンドを実行した後、ユーザー定義のグラフがすべて変換されて、Oracle Performance Manager 1.6.0 ツリー・ビューにある `my_db` の下に保存されます。

`vmm2vtm` を実行してエラー・メッセージが表示される場合は、`vtmusr.txt` を編集して、`vmm2vtm` を再実行してください。

## パラレル・サーバーでの Oracle Performance Manager の使用

パラレル・サーバー環境で Oracle Performance Manager を使用するには、2つのインスタンスが起動されている必要があります。起動されていない場合に、Oracle Performance Manager では、サーバーがパラレル・サーバーとして扱われません。

Oracle Parallel Server 環境で、Oracle Performance Manager を使うには、3つの方法があり、それぞれの構成ステップが異なります。

3つの方法とそれぞれの構成ステップは、次のとおりです。

1. Oracle Performance Manager 1.5.0 以降を使って Oracle7 Parallel Server 環境を監視している場合は、次のスクリプトを実行する必要があります。
  - `ops_ctab.sql`
  - `ops_dbl.sql`
  - `ops_gdl.sql`
  - `ops_mon.sql`
  - `ops_pack.sql`

これらのパラレル・サーバー・スクリプトは、パラレル・サーバーのインストールで提供されます。これらのスクリプトは、`$ORACLE_HOME¥SYSMAN¥ADMIN`にも格納されています。これらのスクリプトを実行すると、Oracle Performance Manager で、Oracle7 パラレル・サーバーのデータをフェッチしてグラフに表示するのに必要な、パフォーマンス監視用の表およびビューが作成されます。

2. Oracle Performance Manager 1.5.0 以降を使って Oracle8 Parallel Server 環境を監視している場合は、`ops_8mon.sql` スクリプトを実行する必要があります。

このスクリプトは、`$ORACLE_HOME¥SYSMAN¥ADMIN` ディレクトリにあります。これらのスクリプトを実行すると、Oracle Performance Manager で、Oracle8 Parallel Server のデータをフェッチしてグラフに表示するのに必要な、パフォーマンス監視用の表およびビューが作成されます。

3. Oracle Performance Manager 1.5.5 以降を使って Oracle8 Parallel Server 環境を監視している場合は、パラレル・サーバー・スクリプトを実行する必要はありません。

パラレル・サーバー・スクリプトの詳細は、パラレル・サーバー・ドキュメント・セットの『Oracle Parallel Server 管理ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

## Oracle Tuning Pack の設定

Oracle Tuning Pack では、特定のチューニング要件および動作を扱い、データベースおよびアプリケーションがピーク時に効率的に実行されることを保証します。

この項では、次のトピックを説明します。

- 3-7 ページの「Oracle Tablespace Manager の設定」
- 3-7 ページの「Oracle Expert の設定」
- 3-8 ページの「Oracle SQL Analyze の設定」

## Oracle Tablespace Manager の設定

データベースに対して Tablespace Manager の分析ウィザードを使うには、データベースに CHAINED\_ROWS 表がなければなりません。CHAINED\_ROWS 表を作成するには、次のステップを実行します。

1. データベースに SYS としてログインします。
2. `$ORACLE_HOME/RDBMS80/ADMIN` ディレクトリにある `utlchain.sql` を実行します。CHAINED\_ROWS 表も、Oracle 拡張イベントの連鎖行イベントで使用されます。

## Oracle Expert の設定

Oracle Expert では、Oracle Enterprise Manager のリポジトリに入っている一連のデータベースの表が必要です。これらの表には、Oracle Expert の各チューニング・セッションに関連付けられたデータが格納されます。

Oracle Diagnostics Pack、Oracle Tuning Pack、または Oracle Change Management Pack 製品が初めて起動されると、必要なすべての表が自動的に作成または更新されます。

## Oracle SQL Analyze の設定

Oracle SQL Analyze を実行するには、DBA ロール権限を付与されているユーザーが使用可能な、一定のオブジェクト権限を持っていないければなりません。必要最低限の権限を割り当てる場合は、オプションの SQLADMIN ロールを使用すると、ユーザーに必要なオブジェクト権限の基本セットを割り当てることができます。

SQLADMIN ロール作成のプロセスを自動化できるよう、VMQROLE.SQL スクリプトが提供されています。これは、\$ORACLE\_HOME¥SYSMAN¥ADMIN ディレクトリにあります。

1. 「Oracle Enterprise Manager」プログラムグループで「SQL Worksheet」アイコンをダブルクリックして、ツールを起動します。
2. 「ログイン情報」ダイアログ・ボックスを使って、SQL Analyze を SYS として実行するデータベースに接続します。
3. 「ワークシート」メニューから、VMQROLE.SQL スクリプトを実行して、管理するデータベースに対して SQLADMIN ロールを作成します。
4. 「SQL Worksheet」画面下ペインで、次のように入力して、ユーザーに対して SQLADMIN ロールを割り当てます。

```
Grant SQLADMIN to <ユーザー>;
```

5. SQL Worksheet を終了します。

# A

---

## 構成ファイル

この付録では、Oracle Enterprise Manager およびそのコンポーネントに必要な構成ファイルについて説明します。

## 構成ファイル

Oracle Enterprise Manager のコンソールでは、デーモン・プロセスを使って、ローカル・システムまたはリモート・システム上の Oracle Intelligent Agent とネットワーク通信を行います。ネットワーク通信は、Oracle の SQL\*Net 製品 (Oracle Enterprise Manager 1.4 および Oracle8 以降では Net8) を使って行われます。

ジョブ制御、イベント管理、Oracle Data Manager、Oracle Backup Manager、および Oracle Tablespace Manager は、コンソール、エージェントおよびデーモン間の通信に依存しているため、SQL\*Net V2.3 もしくは Net 8 を必要とします。

## コンソール・マシン用の構成

次に、Oracle Enterprise Manager コンソールが実行されるマシン上で必要な構成ファイルの例を示します。

### sqlnet.ora

```
#####  
# Filename.....: sqlnet.ora  
# Name.....: tcpcom.world  
# Date.....: 13-AUG-97 10:09:52  
#####  
AUTOMATIC_IPC = OFF  
TRACE_LEVEL_CLIENT = OFF  
SQLNET.EXPIRE_TIME = 0  
NAMES.DEFAULT_DOMAIN = world  
NAME.DEFAULT_ZONE = world  
SQLNET.CRYPTO_SEED = "2418306024240649"  
SQLNET.AUTHENTICATION_SERVICES = (NONE)  
DAEMON.TRACE_LEVEL = 16  
DAEMON.TRACE_DIRECTORY = c:\%orant%\network%\trace
```

この sqlnet.ora の例について注意しなければならないのは、ドメイン名が **world** であることです。つまり、この例では、tnsnames.ora 内のサービス名にはすべて **world** のタグを付けなければなりません。

---

---

**注意：**「world」は、ドメイン名の例として使われています。「world」のかわりに、独自のドメイン名を使ってもかまいません。

---

---

また、最初に DAEMON の付いた 3 つのパラメータにより、デーモン・プロセスのトレースが制御されます。トレースを中止するには、DAEMON.TRACE\_LEVEL を OFF の値に設定しま

す。同時に、トレース・ディレクトリを変更して、必ず現行の ORACLE\_HOME¥NET80¥TRACE を反映させてください。

上の例では、ORACLE\_HOME が C:¥ORANT に設定されています。トレースを開始すると、DAEMON.TRACE\_DIRECTORY パラメータで指定したディレクトリ内に daemon.trc というトレース・ファイルが作成されます。トレースは、コンソールの操作のデバッグの時に、検出、ジョブおよびイベントのステータスが必要な場合に、設定すると便利です。

### tnsnames.ora

```
#####
# Filename.....: tnsnames.ora
# Name.....: LOCAL_REGION.world
# Date.....: 13-AUG-97 10:09:52
#####
mydb.world =
  (DESCRIPTION =
    (ADDRESS_LIST =
      (ADDRESS =
        (COMMUNITY = tcpcom.world)
        (PROTOCOL = TCP)
        (Host = myhost)
        (Port = 1526)
      )
    )
    (CONNECT_DATA =
      (SID = mysid)
      (GLOBAL_NAME = mydb.world)
    )
  )
```

---

**注意：**「mysid」はユーザーの SID です。「mydb」はこのデータベースの global\_name です。「world」は、ドメイン名の例です。「world」のかわりに、独自のドメイン名を使ってもかまいません。これらのファイルの詳細は、Net8 の構成ガイドを参照してください。

---

tnsnames.ora ファイルの標準の位置は、\$ORACLE\_HOME/network/admin または \$ORACLE\_HOME/net80/admin です。Solaris では、tnsnames.ora ファイルは /var/opt/oracle ディレクトリに保存されます。その他の UNIX システムでは、tnsnames.ora ファイルは /etc ディレクトリに保存されます。どのプラットフォームでも、デフォルトの保存位置を使わない場合には、\$TNS\_ADMIN 環境変数を設定できます。

## 管理対象ノード用の構成

次に、Oracle データベースおよび Oracle Intelligent Agent が稼動するマシンに必要な構成ファイルの例をいくつか示します。

### sqlnet.ora

```
#####
# Filename.....: sqlnet.ora
# Name.....: myhost.world
# Date.....: 13-AUG-97 10:09:52
#####
AUTOMATIC_IPC = ON
TRACE_LEVEL_CLIENT = OFF
SQLNET.EXPIRE_TIME = 0
NAMES.DEFAULT_DOMAIN = world
NAME.DEFAULT_ZONE = world
SQLNET.CRYPTO_SEED = "2418306024240649"
SQLNET.AUTHENTICATION_SERVICES = (ALL)
```

この sqlnet.ora について注意しなければならないのは、この例でドメイン名が **world** であることです。つまり、この例では、tnsnames.ora 内のサービス名にはすべて **world** のタグを付けなければなりません。

---

---

**注意：**「world」は、ドメイン名の例として使われています。「world」のかわりに、独自のドメイン名を使ってもかまいません。

---

---

### tnsnames.ora

```
#####
# Filename.....: tnsnames.ora
# Name.....: LOCAL_REGION.world
# Date.....: 13-AUG-97 10:09:52
#####
mydb.world =
  (DESCRIPTION =
    (ADDRESS_LIST =
      (ADDRESS =
        (COMMUNITY = tcpcom.world)
        (PROTOCOL = TCP)
        (Host = myhost)
        (Port = 1526)
      )
    )
  )
```

```
(CONNECT_DATA =
  (SID = mysid)
  (GLOBAL_NAME = mydb.world)
)
)
```

### listener.ora

```
#####
# Filename.....: listener.ora
# Name.....: myhost.world
# Date.....: 13-AUG-97 10:09:52
#####
mysnr =
  (ADDRESS_LIST =
    (ADDRESS =
      (PROTOCOL=IPC)
      (KEY= mydb.world)
    )
    (ADDRESS =
      (PROTOCOL=IPC)
      (KEY= mysid)
    )
    (ADDRESS =
      (COMMUNITY = tcpcom.world)
      (PROTOCOL = TCP)
      (Host = myhost)
      (Port = 1526)
    )
  )
STARTUP_WAIT_TIME_mysnr = 0
CONNECT_TIMEOUT_mysnr = 10
TRACE_LEVEL_mysnr = OFF
SID_LIST_mysnr =
  (SID_LIST =
    (SID_DESC =
      (SID_NAME = mysid)
      (ORACLE_HOME = /myoraclehome)
    )
  )
)
```

この listener.ora の例では、SQL\*Net リスナー *mysnr* のリスニング・アドレスが定義され、Oracle データベース *mysid* についても記述されています。このリスナーを UNIX で起動するには、次のコマンドを入力します。

```
$ lsnrctl start mysnr
```

このコマンドは SQL\*Net リスナー名を明示的に指定します。デフォルトのリスナー名を使っている場合、リスニング・プロセスの起動時に名前を指定する必要はありません。(デフォルトのリスナー名は “listener” です。)ただ、この例では、リスナーの名前は “mylsnr” に変更されています。これはデフォルト名ではないので、起動時に指定しなければなりません。

### 7.3.3 以前のエージェント専用の snmp.ora

```
#####  
# Filename.....: snmp.ora.sample  
#####  
snmp.visible_services = (mydb_name.world, myhost_name_mylsnr.world)  
snmp.index.mydb_name.world = 1  
snmp.index.myhost_name_mylsnr.world = 2  
snmp.contact.mydb_name.world = contact_info  
snmp.contact.myhost_name_mylsnr.world = contact_info  
snmp.sid.mydb_name.world = server_id  
snmp.oraclehome.mydb_name.world=$ORACLE_HOME  
nmi.register_with_names=false  
nmi.trace_level = 0  
nmi.trace_directory = $ORACLE_HOME¥net80¥trace  
dbsnmp.address = (DESCRIPTION=(ADDRESS=(PROTOCOL=tcp)(HOST=myhost_  
name)(PORT=1748)))  
dbsnmp.spawnaddress = (DESCRIPTION=(ADDRESS=(PROTOCOL=tcp)(HOST=myhost_  
name)(PORT=1754)))
```

この snmp.ora の例は、7.3.3 以前のインテリジェント・エージェントで使われます。7.3.3 以前のインテリジェント・エージェントでは、そのエージェントの tnsnames.ora エントリと番号が一致すれば、任意の未使用ポート番号を使用できます。snmp.ora は、Oracle Network Manager または Network Topology Generator によって作成する必要があります。

構成ファイル snmp\_ro.ora および snmp\_rw.ora によって、7.3.3 およびそれ以降のエージェントの構成パラメータが提供されます。これらのファイルは、インテリジェント・エージェントによって自動的に作成されます。

#### snmp\_ro.ora

snmp\_ro.ora ファイルは、Windows NT プラットフォーム上では \$ORACLE\_HOME¥net80¥admin にあります。UNIX 上では、このファイルは \$ORACLE\_HOME/network/admin にあります。この読み専用ファイルは更新しないでください。このファイルには、次のパラメータが含まれます。

```
SNMP.VISIBLESERVICES = (LISTENER, service_name1, service_name2, ...)  
SNMP.SID.service_name = server_id  
SNMP.ORACLEHOME.service_name = ORACLE_HOME_DIR
```

### snmp\_rw.ora

snmp\_rw.ora は、Windows NT プラットフォーム上では \$ORACLE\_HOME¥net80¥admin にあります。この読み書きファイルは変更できませんが、慎重に行ってください。このファイルには、次のパラメータが含まれます。

```
SNMP.INDEX.service_name = unique_index_number
SNMP.CONTACT.service_name.world = "contact_info"
NMI.REGISTER_WITH_NAMES = FALSE
NMI.TRACE_LEVEL = OFF | USER | ADMIN | nn
```

7.3.3 以降のバージョンのエージェントでは、ポート・アドレス 1748 および 1754 が必要です。エージェントで自動的にサービスを検出するには、TCP/IP プロトコルが必要です。ポート・アドレスは、自動的に設定されます。

次のパラメータは自動的に生成されませんが、ファイルに追加できます。

```
SNMP.CONNECT.service_name.USER = user_name
SNMP.CONNECT.service_name.PASSWORD = password
SNMP.DBPOLLTIME = nn
DESNMP.IPCTIME = nn
NMI.TRACE_DIRECTORY = directory
NMI.TRACE_FILE = filename
NMI.LOG_DIRECTORY = directory
NMI.LOG_FILE = filename
```

### services.ora

services.ora ファイルはエージェントの起動時に作成され、Windows NT プラットフォームでは \$ORACLE\_HOME¥net80¥agent、UNIX では \$ORACLE\_HOME/network/agent に置かれます。このファイルには、エージェントが常駐するノード上の、Oracle データベースやリスナーのような、サービスのリストが含まれます。このファイルは、「ナビゲータ検出」メニュー・オプションを使って Oracle Enterprise Manager によってエージェントから取り出されます。

---

---

**注意：** services.ora ファイルは、手動で編集しないでください。エージェントでは、起動時にファイルが書き換えられます。

---

---

## snmp\*.ora ファイル用のパラメータ

これらのパラメータは、インテリジェント・エージェントのリリース用の構成ファイルである snmp\_ro.ora および snmp\_rw.ora で使われます。7.3.3 以前のリリースのインテリジェント・エージェント用の一次構成ファイルである snmp.ora ファイルでも、これらのパラメータが使われます。

各パラメータでは、次のように代入されます。

- `service_name` は、`tnsnames.ora` で表示されるとおりの監視対象サービス、データベースまたはリスナーの名前です。
- `host_name` は、ご使用のマシンのホスト名です。
- `world` は、所属するコミュニティ名です。

---

**注意：** `sqlnet.ora` ファイルで `.world` が使われている場合、`snmp.ora` ファイルおよび `tnsnames.ora` ファイルでも `.world` を使う必要があります。たとえば、`service_name.world`、`host_name_lsnr.world` などです。

---

#### **SNMP.VISIBLESERVICES = (service\_name1.world, service\_name2.world, ...)**

エージェントが監視中のサービス名です。各データベースと SNMP で管理可能な各サービスをリストしなければなりません。データベースの場合、サービス名は、`tnsnames.ora` ファイルまたは Names Server で表示されるとおりのデータベース名です。

#### **SNMP.INDEX.service\_name.world = index\_number**

エージェントが監視中のサービスの一意の索引番号。索引番号には、任意の数値を指定できます。唯一の制限は、複数の索引行がある場合、索引番号は一意でなければならないことです。たとえば、次のように指定します。

```
snmp.index.<service_name1>=10
snmp.index.<service_name2>=20
```

#### **SNMP.SID.service\_name.world = server\_id**

エージェントが監視中のデータベース・サービスのサーバー ID (SID)。

#### **SNMP.CONNECT.service\_name.world.USER = user\_name**

サブエージェントがデータベースへの接続に使うユーザー名。デフォルトは `dbsnmp` です。このパラメータはオプションです。このパラメータがデフォルト設定でない場合、`catsnmp.sql` スクリプトを編集し、再実行する必要があります。

「サブエージェント」は、インテリジェント・エージェントを指します。サーバーで SNMP を構成する際、インテリジェント・エージェントがマスター SNMP に対するサブエージェントと呼ばれる場合があります。ただし、インテリジェント・エージェントが動作する前に、SNMP をサーバーで構成する必要はありません (NetWare プラットフォームを除く)。セキュリティ上の理由から、カスタマがデフォルトのインテリジェント・エージェント・データベースのアカウントとパスワード組合せである `dbsnmp/dbsnmp` の使用しないことがあ

ります。下記の例は、カスタマがインテリジェント・エージェントのデータベース・ログイン・アカウントの変更をする場合にだけ使用されます。

**SNMP.CONNECT.service\_name.world.PASSWORD = password**

サブエージェントがデータベースへの接続に使うユーザー名のパスワード。デフォルトは `dbsnmp` です。このパラメータはオプションです。このパラメータがデフォルト設定でない場合、`catsnmp.sql` スクリプトを編集し、再実行する必要があります。

「サブエージェント」は、インテリジェント・エージェントを指します。サーバーで SNMP を構成する際、インテリジェント・エージェントがマスター SNMP に対するサブエージェントと呼ばれる場合があります。ただし、インテリジェント・エージェントが動作する前に、SNMP をサーバーで構成する必要はありません (NetWare プラットフォームを除く)。セキュリティ上の理由から、カスタマがデフォルトのインテリジェント・エージェント・データベースのアカウントとパスワード組合せである `dbsnmp/dbsnmp` の使用をしないことがあります。下記の例は、カスタマがインテリジェント・エージェントのデータベース・ログイン・アカウントの変更をする場合にだけ使用されます。

**SNMP.ORACLEHOME.service\_name.world = ORACLE\_HOME\_DIR**

データベースの Oracle ホーム・ディレクトリ。ORACLE\_HOME\_DIR がすべてのサービスに対して同じ場合でも、各データベース用に個別のエントリが必要です。

**SNMP.CONTACT.service\_name.world = "contact\_info"**

そのサービス担当の管理者の名前、電話番号および電子メールなどの連絡情報を含んだ文字列。このパラメータはオプションです。

**DBSNMP.POLLTIME = nn**

データベースが停止しているかどうかをエージェントによりチェックするためにポーリングする時間間隔 (秒)。データベースが停止しているか、または接続されていない場合は、再試行の時間間隔になります。デフォルト値は 30 秒です。

**DBSNMP.IPCTIME = nn**

エージェントの Work プロセスが Comm プロセスに ping して停止しているかどうかをチェックするための時間間隔 (秒)。Work の ping に、Comm がこの時間内に応答を返せない場合は、Work が旧 Comm プロセスを中断させ、新規のプロセスを起動します。長時間のイベントを実行する場合は、データベース・チェックのインターバルとは別に、このインターバルを長くすることができます。デフォルト値は 30 秒です。

このパラメータは、エージェントの NT ポートにまでは影響しません。

**NMI.TRACE\_LEVEL = OFF | USER | ADMIN | nn**

指定のレベルでトレースを開始します。オラクル社ではトレース・レベルを 13 に設定することをお奨めします。レベルを 16 に設定すると、情報が多くなりすぎて、バグを見つける場合にしか使えません。レベルが 16 の場合、実際の TCP/IP パケットのコンテンツが参照できません。レベルが 15 の場合、そのパケットが渡されることだけを確認できます。このパラメータはオプションです。

**NMI.TRACE\_DIRECTORY = *directory***

トレース・ファイルを書き込むディレクトリ。この設定は、`nmi.trace_level` とともに指定した場合だけ有効です。省略すると、トレース・ファイルが `$ORACLE_HOME¥network¥trace` に書き込まれます。このパラメータはオプションです。

**NMI.TRACE\_FILE = *filename***

トレースのファイル名。このパラメータはオプションです。

**NMI.LOG\_DIRECTORY = *directory***

ログ・ファイルを書き込むディレクトリ。このパラメータはオプションです。

**NMI.LOG\_FILE = *filename***

ログインのファイル名。このパラメータはオプションです。Windows NT では、デフォルトのファイル名は `dbsnmp` です。

---

---

**注意：** 次のアドレスは、エージェントによって自動的に設定されます。アドレスを変更すると、Oracle Enterprise Manager コンソールでエージェントを検出できなくなるため、手動で構成を設定しなければなりません。

---

---

**dbsnmp.address =(ADDRESS=(PROTOCOL=*protocol*) (HOST=*host\_name*)(PORT=*port\_no*)))**

エージェントで、入ってくる要求をリスニングするのに使われる TNS アドレス。アドレスには、空白も戻り文字も入れてはいけません。このパラメータは、ネットワーク接続のためにエージェントでリスニングするアドレスです。

エージェントで自動的にサービスを検出するには TCP/IP が必要なため、サーバーに必ずインストールしなければなりません。

エージェントには、`PORT=1748` を指定します。ポート・アドレス 1748 は、インターネット・アドレス管理機構 (IANA) から Oracle に認可された登録 TCP ポートです。ポート・ア

ドレスは、自動的に設定されます。このポートを変更すると、Oracle Enterprise Manager コンソールでエージェントを検出できなくなるため、手動で構成を設定しなければなりません。

7.3.3 リリース以前のエージェントの場合、このアドレスは、Oracle Enterprise Manager のコンソールが常駐するマシンの `tnsnames.ora` ファイルでのこのエージェントのエントリと、正確に一致していなければなりません。

**`dbsnmp.spawnaddress =(ADDRESS= (PROTOCOL=protocol) (HOST=host_name)(PORT=spnport_no))`**

エージェントで RPC アドレスの受入れに使用できる TNS アドレス。このアドレスはファイル転送に使われます。このパラメータで使われる `spnport_no` は、`DBSNMP.ADDRESS` パラメータで使われる `port_no` とは異なります。

エージェントには、`PORT=1754` を指定します。ポート・アドレス 1754 は、インターネット・アドレス管理機構 (IANA) から Oracle に認可された登録 TCP ポートです。このポートを変更すると、Oracle Enterprise Manager コンソールでエージェントを検出できなくなるため、手動で構成を設定しなければなりません。



# B

---

## ディレクトリ構造

この付録では、Oracle Enterprise Manager コンポーネントおよびインテリジェント・エージェントのディレクトリ構造について説明します。ディレクトリ構造全体を、詳細に説明するのではなく、主要なセクションだけ取り上げます。

## Oracle Enterprise Manager のディレクトリ構造

次のディレクトリおよびファイルが、Oracle Enterprise Manager コンポーネントで使われます。ソフトウェアおよびスクリプト・ファイルは、Oracle Enterprise Manager がインストールされている PC の ORACLE\_HOME ディレクトリにインストールされます。例は Windows NT プラットフォームの場合で、Windows NT 用のデフォルトの ORACLE\_HOME ディレクトリ `¥orant` が使われています。

### `¥orant¥bin`

Oracle Enterprise Manager 実行ファイルと DLL のファイルは、このディレクトリにあります。「ヘルプ」ファイルもここにあります。

### `¥orant¥dbs`

Oracle Enterprise Manager メッセージ・ファイルは、ここにあります。

### `¥orant¥otrace...`

Oracle Trace 関連のファイルは、ここにあります。

## Oracle Enterprise Manager コンポーネント

Oracle Enterprise Manager コンポーネントは、`¥orant¥sysman¥...` ディレクトリにインストールされます。これらのディレクトリには、次のものが含まれます。

### `¥orant¥sysman¥admin`

Oracle Enterprise Manager コンポーネントを設定するために使う SQL スクリプトが、このディレクトリにあります。さらに、製品で表示されるビットマップも、ここに保存されています。

### `¥orant¥sysman¥admin¥rdbms70, rdbms71, rdbms72, rdbms73, rdbms80`

TopSessions 設定に必要な SQL スクリプトが、これらのディレクトリにあります。これらのスクリプトは、Oracle データベースの各バージョンに固有のものです。これらのスクリプトは、直接アクセスして手動で実行することはできません。

### `¥orant¥sysman¥admin¥tcl`

tcl ファイルは、このディレクトリにあります。

### `¥orant¥sysman¥bmp`

マップ・バックグラウンドに使うサンプル・ビットマップが、ここにインストールされません。

### `¥orant¥sysman¥doc`

Oracle Enterprise Manager オンライン・ドキュメントが、これらのサブディレクトリにあります。ファイルは HTML 形式で、.htm 拡張子が付いています。toc.htm ファイルには、それぞれのマニュアルの目次があり、最初に表示する必要があります。

**¥orant¥sysman¥expert**

Oracle Expert サンプル・ファイルは、ここにあります。

**¥orant¥sysman¥ifiles**

Oracle Instance Manager では、インポートした構成ファイルをここに保存します。

**¥orant¥sysman¥ocm160**

Change manager ファイルは、このディレクトリにあります。

**¥orant¥sysman¥ole2**

Oracle Enterprise Manager コンソールの NT レジストリ、デーモンおよびアプリケーションは、このディレクトリにあります。

**¥orant¥sysman¥osm10**

Oracle Software Manager で使うファイルとディレクトリは、ここにあります。

**¥orant¥sysman¥output**

ジョブ出力ファイルは、このディレクトリにあります。

**¥orant¥sysman¥qtour**

Expert およびコンソール用の Quick Tour ファイルは、このディレクトリにあります。

**¥orant¥sysman¥scripts**

ジョブ制御システムで使われる DBA、SQL および Tcl スクリプトは、このディレクトリのサブディレクトリにあります。

**¥orant¥sysman¥sdk**

Oracle Enterprise Manager Software Developer's Kit (SDK) のサンプル・ファイルとスクリプトは、このディレクトリのサブディレクトリにあります。

**¥orant¥sysman¥temp**

一時ファイル（マップ状態など）は、このディレクトリにあります。

**¥orant¥sysman¥vtm160**

Oracle Performance Manager ファイルは、このディレクトリにあります。

**¥orant¥sysman¥vtp160**

Oracle Capacity planner ファイルは、このディレクトリにあります。

**警告：** temp ディレクトリからは、ファイルを削除しないでください。

## ネットワーク・ファイル

Oracle Enterprise Manager ネットワーク構成ファイルおよびトレース・ファイルは、`¥orant¥net80¥...` ディレクトリに保存されます。これらのディレクトリには、次のものが含まれます。

### `¥orant¥net80¥admin`

現行の SQL\*Net 構成ファイルおよびデフォルト・イベント定義は、このディレクトリにあります。

### `¥orant¥net80¥log`

クライアントとサーバーのログファイルは、通常、ここに書き込まれます。

### `¥orant¥net80¥trace`

サーバーとクライアントのトレース・ファイルは、通常、ここに書き込まれます。

## インテリジェント・エージェントのディレクトリ構造

次のディレクトリおよびファイルが、ノード上のエージェントで使われます。すべてのサブディレクトリは、ORACLE\_HOME ディレクトリの下にあります。例は Windows NT プラットフォームの場合で、Windows NT 用のデフォルトの ORACLE\_HOME ディレクトリ `¥orant` が使われています。

### `¥orant¥agentbin`

これは、エージェント実行ファイル `db snmp` の位置です。

### `¥orant¥net80¥admin`

これは、`snmp_ro.ora` および `snmp_rw.ora` などの、エージェントの構成ファイルの位置です。

### `¥orant¥net80¥log`

`nmiconf.log` ファイルはここにあります。このファイルには、エージェントがサービスを検出する際に発生するエラーが含まれます。

### `¥orant¥net80¥mesg`

これは、エージェント・メッセージ・ファイルの位置です。

### `¥orant¥net80¥agent`

これは、エージェントがノード用に管理している現行のジョブおよびイベントの情報が含まれる `*.q` ファイルの位置です。`services.ora` ファイルもここにあります。出力ファイルでジョブを実行するのに使う設定リストを持つユーザーには、このディレクトリでの書き込み許可がなければなりません。

### `¥orant¥rdbms80¥admin`

これは、エージェントによって使われる、必要なデータベース・アカウントとロールを作成する SQL スクリプトの位置です。`catsnmp.sql` スクリプトにより、`db snmp` アカウントと

SNMPAGENT ロールが作成されます。catsnmp.sql スクリプトは、データベースのインストール中に catalog.sql によって実行されます。catnsnmp.sql スクリプトは、catsnmp スクリプトによってインストールしたロールおよびユーザーの削除にも使います。

### **¥orant¥net80¥agent¥config**

これは、エージェント Tcl スクリプトの位置です。

### **¥orant¥net80¥agent¥doc**

これは、エージェント readme ファイルの位置です。

### **¥orant¥net80¥agent¥events¥oracle**

oracle イベント・スクリプトは、このディレクトリの下にあります。

### **¥orant¥net80¥agent¥jobs¥oracle**

oracle ジョブ・スクリプトは、このディレクトリの下にあります。

### **¥orant¥net80¥agent¥mibs**

これは、MIB 初期化ファイルの orainit.mib の位置です。

### **¥orant¥net80¥agent¥packages**

これは、Oracle Software Manager ファイルの位置です。

### **¥orant¥net80¥agent¥tcl**

これは、Tcl 初期化スクリプトの位置です。

## インテリジェント・エージェントのディレクトリ構造

---

# C

---

## ヒント

Oracle Enterprise Manager をインストールまたはご使用の前に、Oracle Enterprise Manager の Readme にある互換性マトリックスをチェックしてください。readme は、`$ORACLE_HOME\SYMANTH\ADMIN` ディレクトリにあります。

Oracle Enterprise Manager の 1.x.x と 8.x.x のデータベースが必要なサポート・ファイルを共有しているため、Oracle Enterprise Manager 1.x.x は、NT 8.x.x データベースと同じ ORACLE\_HOME にしかインストールできません。他のデータベースのバージョンを管理するために Oracle Enterprise Manager 1.x.x を使用することはできませんが、同じ ORACLE\_HOME にインストールはできません。

この付録には、Oracle Enterprise Manager、そのコンポーネントおよびインテリジェント・エージェントを使う際のいくつかのヒントと助言が含まれています。

- C-2 ページの「トラブルシューティング」
- C-5 ページの「ローカル・データベースの手動での定義」
- C-5 ページの「リポジトリの手動での作成、削除またはアップグレード」
- C-6 ページの「オンライン・ヘルプの使用」

## トラブルシューティング

トラブルシューティングの問題には、次のようなものが考えられます。

### システム・レジストリ・エラー

Oracle Installer で Oracle Enterprise Manager コンポーネントを登録できなかったという警告メッセージが表示された場合、または Oracle Enterprise Manager プログラムの実行に問題がある場合、Oracle Installer の終了後に、手動でコンポーネントを登録しなければなりません。Windows のファイルマネージャまたはエクスプローラを使って、ORACLE\_HOME¥SYSMAN¥OLE2 ディレクトリを検索し、各 .REG ファイルをダブルクリックして各コンポーネントを登録します。

ジョブ制御システムによるジョブの作成時に、パラメータまたはタスク・プロパティ・シートに問題がある場合、.OCX ファイルが登録中に正しく登録されなかった可能性があります。.OCX ファイルを登録するには、次のステップを実行します。

1. DOS ウィンドウをオープンして、¥ORACLE\_HOME¥BIN ディレクトリに変更します。
2. DIR \*.OCX を入力して、すべての .OCX ファイルをリストします。
3. 各 .OCX に REGSVR32 name.OCX を入力します。ここで name は各 .OCX ファイル名と対応しています。

例: regsvr32 vojtt.ocx

### ジョブ制御およびイベント管理システム

コンソールのジョブ制御システムまたはイベント管理システムの使用に際して問題が生じた場合は、デーモンおよびエージェントのトレース・ファイルをチェックし、デーモンでエージェント・アドレスをホスト名に分析解決できなかったことを知らせるエラー・メッセージを探してください。Windows NT プラットフォームでは、管理ツール内のイベント・ビューアをチェックすることもできます。

### インテリジェント・エージェント

インテリジェント・エージェントが起動しない場合、次のいずれかをチェックして情報を得てください。

- UNIX の場合、ORACLE\_HOME/network/log/dbsnmp\*.log ファイルをチェックしてエラーの有無を調べる。
- Windows NT では、イベントビューアからアプリケーションを選択する。

エージェントのトラブルシューティングの詳細は、第 1 章「エージェントの構成」を参照してください。

## NT のインテリジェント・エージェント起動時のエラー・メッセージ

エージェントの起動時に OS エラーが発生した場合、それが実際に `snmmsg.mc` に記述されているエージェント・エラーなのかどうかをチェックしてください。エラーの原因が表示されない場合、Windows NT の管理ツール・グループにあるイベントビューアを使ってください。問題の本当の原因がまとめられています。

次のメッセージは、OS エラーと誤解されることがあります。

| 索引 | 説明   |
|----|--|
| 01 | OracleAgent は、Service Control Handler の登録に失敗しました。  |
| 02 | OracleAgent は、Service Control Manager へのステータスのレポートに失敗しました。   |
| 03 | OracleAgent は、スレッド同期化オブジェクトの作成に失敗しました。   |
| 04 | OracleAgent は、スレッドの作成に失敗しました。  |
| 05 | OracleAgent は、メモリーの割当てに失敗しました。   |
| 06 | OracleAgent は、暗号化キーの取得に失敗しました。   |
| 07 | OracleAgent は、自動検出スクリプト <code>nmiconf.tcl</code> の実行に失敗しました。詳細は、 <code>nmiconf.log</code> を参照してください。 |
| 08 | OracleAgent は、Oracle CORE ライブラリの初期化に失敗しました。  |
| 09 | OracleAgent は、Oracle NLS ライブラリの初期化に失敗しました。   |
| 10 | OracleAgent は、Oracle SQL*Net ライブラリ (%1) の初期化に失敗しました。   |
| 11 | OracleAgent は、DES 暗号化の初期化に失敗しました。  |
| 12 | OracleAgent は、Oracle Remote Operations ライブラリの初期化に失敗しました。   |
| 13 | OracleAgent は、Oracle Software Manager のパッケージ索引の作成に失敗しました。  |
| 14 | OracleAgent は、ファイル <code>dbsnmp.ver</code> の作成に失敗しました。   |
| 15 | OracleAgent は、待ち行列ファイルの作成 / 読み込みに失敗しました。   |
| 16 | OracleAgent は、ジョブ制御記号表の作成に失敗しました。  |
| 17 | OracleAgent は、接続キャッシュの初期化に失敗しました。  |
| 18 | OracleAgent は、SNMP マスター・エージェントへのサインオンに失敗しました。  |
| 19 | OracleAgent は、パラメータ・ファイルからの SNMP 索引の読み込みに失敗しました。   |
| 20 | OracleAgent は、データベースへの接続に失敗しました。   |
| 21 | OracleAgent は、SNMP キャッシュの作成に失敗しました。  |
| 22 | OracleAgent は、MIB の作成に失敗しました。  |
| 23 | OracleAgent は、MIB 行の登録に失敗しました。   |

| 索引 | 説明                               |
|----|----------------------------------|
| 24 | OracleAgent は、通信スレッドの再起動に失敗しました。 |

## 任意の SID への接続性のテスト

任意の SID への接続性をテストするには、その特定の SID へ接続するための `sqlnet` 接続文字列が含まれるように `tnsnames.ora` を構成し、次に `SQL*Plus` を使ってその接続文字列に接続する必要があります。Net8 には Net8 Assistant を、`sqlnet 2.x` には Oracle Network Manager/SQL\*NET easy config を使います。

次の例は、TCP/IP によって `scott-PC` ノードで名前 `ORCL` が検出された SID に接続する `sqlnet` 接続文字列 `scott.world` の例です。

```
scott.world=
  (Description=
    (Address_list=
      (Address=
        (community=TCP.world)
        (protocol=TCP)
        (host=scott-PC)
        (port=1521)
      )
      (Address=
        (community=TCP.world)
        (protocol=TCP)
        (host=scott-PC)
        (port=1526)
      )
    )
    (connect_data=
      (SID=ORCL)
    )
  )
```

`SQL*Plus` で、次を入力します。

```
sqlplus> connect username/password@scott
```

`SQL*Plus` により、次が戻されます。

```
sqlplus> 接続されました。
```

`SQL*Plus` によりなんらかのエラーが戻された場合の詳細は、『SQL\*NET 構成ガイド』を参照してください。

## ローカル・データベースの手動での定義

エージェントが実行中でない場合、ローカル・データベースを手動で定義できます。ローカル・データベースに対して基本的なアプリケーションやパフォーマンス・バック・アプリケーションをさせるようにするには、この手順を実行する必要があります。

このステップは、Personal Oracle 7 を使って Windows 95 で実行できます。Windows NT の手順も同様です。

1. `¥orawin95¥net80¥admin¥tnsnames.ora` を編集し、ローカル・データベースを定義します。

例では、`local.world` が使用されています。`tnsnames.ora` での定義は次のようになります。

```
local.world =
(DESCRIPTION =
  (ADDRESS_LIST =
    (ADDRESS =
      (COMMUNITY = beq.world)
      (PROTOCOL = BEQ)
      (PROGRAM = oracle73)
      (ARGV0 = oracle73ORCL)
      (ARGS =
        '(DESCRIPTION=(LOCAL=YES)(ADDRESS=(PROTOCOL=beq)))')
      )
    )
  )
(CONNECT_DATA = (SID = ORCL)
)
```

2. Oracle Enterprise Manager を起動し、リポジトリにログインします。
3. 「ナビゲータ」→「サービスの検出」→「手動でサービスを定義」で、「次へ」ボタンをクリックし、ノード名のプロンプトで PC のノード名を入力します。次に、「追加」ボタンをクリックします。
4. (ノード名セクションの)「データベース: 表」に移動し、`tnsnames.ora` で定義されたデータベースの別名を入力します。例では、別名は `local.world` です。「次へ」ボタンをクリックし、次に「完了」をクリックします。
5. コンソール・ウィンドウで「Databases」フォルダを拡張し、新しく追加されたデータベースをダブルクリックして、接続が正しく動作することを確認してください。

## リポジトリの手動での作成、削除またはアップグレード

リポジトリの自動作成またはアップグレード (有効性検査) 操作が失敗した場合、Repository Manager (「スタート」→「プログラム」→「Oracle Enterprise Manager」) フォ

## オンライン・ヘルプの使用

---

ルダから使用可能)を使うか、DOS コマンド・ラインから操作を実行します。Repository Manager の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

DOS コマンド・ラインからリポジトリを削除することもできます。

1. DOS ウィンドウをオープンして、`¥ORACLE_HOME¥BIN` ディレクトリに変更します。
2. DOS プロンプトで、`vobsh` の後に表 3-1 の「`vobsh` のコマンド・ライン引数」にあるコマンド・ライン・スイッチを 1 つ以上入力します。

たとえば、次のコマンドでは、Oracle Enterprise Manager リポジトリの有効性検査を行い、必要であれば、アップグレードします。

```
vobsh -c "scott/tiger@mydb" -o VALIDATE -p "Enterprise Manager"
```

コマンド・ライン引数を次の表にリストします。

表 3-1 vobsh のコマンド・ライン引数

| 引数        | 説明   |
|-----------|--|
| -b        | バッチ・モードを設定する。すべての入力指示が使用不可になります。   |
| -c cn     | 接続文字列を設定する。パラメータ <code>cn</code> は、“ <code>scott/tiger@mydb</code> ” のようにユーザー / パスワードを引用符で囲んだ文字列でなければなりません。  |
| -h        | コマンド・ライン・オプションを表示する。   |
| -o option | リポジトリ・マネージャ・オプションを設定する。有効なオプションは、リポジトリの <code>CREATE</code> および <code>DROP</code> 、 <code>VALIDATE</code> です。  |
| -p name   | 製品名を設定して、特定のリポジトリを指定する。名前は、有効なサブ・コンポーネント名または有効なグループ名でなければなりません。有効なサブ・コンポーネント名は、Oracle Enterprise Manager、Oracle Software Manager、Oracle Expert および Oracle Trace です。有効なグループ名は、 <code>ALL</code> および <code>CONSOLE</code> 、 <code>PERFORMANCE</code> です。 <code>ALL</code> と <code>PERFORMANCE</code> には、すべてのサブ・コンポーネント・リポジトリが含まれます。 <code>CONSOLE</code> には、Oracle Enterprise Manager および Oracle Software Manager リポジトリが含まれます。 <code>name</code> パラメータは、引用符で囲む必要があります。 |

## オンライン・ヘルプの使用

Oracle Enterprise Manager では、オンライン・ヘルプを使って、製品全体および製品のオプション・コンポーネントの追加情報が提供されます。コンソール上でヘルプを表示するには、次のステップを実行します。

1. マウス・ポインタを希望の指定領域に移動します。
2. [F1] キーを押します。

特定のダイアログ・ボックス上でヘルプを表示する場合は、「ヘルプ」ボタンを押します。コンソールの「ヘルプ」メニューからヘルプ・システムにアクセスすることもできます。「目次」ページには、タイトル別に主なヘルプ・トピックがリストされています。「キーワード」ページには、キーワード別にトピックがリストされています。「テキスト検索」ページは、ウィザードを使って設定できる **Windows** ユーザー・オプションです。設定は、「テキスト検索」ページに初めてアクセスしたときに実行されます。



---

# 用語集

## エージェント (agent)

「Oracle Intelligent Agent (インテリジェント・エージェント)」を参照。

## エージェントの検出 (agent discovery)

エージェントは、そのノードのサービスをすべて検出する。

## アクセス (データベース) (access (database))

Oracle データベースに対する 3 つの標準権限のうちの 1 つ。データベース管理者は、1 つ以上のデータベース権限をユーザーに付与できる。

## アカウント (account)

オペレーティング・システムまたは製品の認可ユーザー。オペレーティング・システムによって、ID、ユーザー ID、ログインのように呼び方が異なる。ほとんどの場合、システム管理者によってアカウントが作成され、制御される。

## アプリケーション (application)

特定の結果を得るために使用される 1 つ以上のプログラム・モジュール。アプリケーション内に他のアプリケーションをネストできる。

## 認証 (authenticate)

ユーザー、デバイス、または他の単位の識別情報をコンピュータ・システムで検証するプロセス。ほとんどの場合、システムのリソースにアクセスするための前提条件となる。

## 認可 (authorization)

ユーザー、プログラム、プロセスに付与される、システムのリソースにアクセスするための許可。

### **バックアップ (back up)**

既存のデータのコピーを作成することで、後で必要になった場合にそのデータの回復を可能にする。

### **バッチ (batch)**

結果を得るために作業を停止したくない場合、ユーザーは問合せのバッチでの実行を指定する。コンピュータでは、問合せを実行する時期が決定される。ユーザーは、後で結果を確認できる。

### **キャッシュ・メモリー (cache (memory))**

ユーザーが現在アクセスまたは変更中のデータベース・データ、または Oracle Server でユーザーのサポートに必要とされるデータのための一時記憶領域。バッファ (データベース) という語は、キャッシュと同じ意味で使われる。

### **クリック (click)**

左マウス・ボタンを押して、すぐに放すこと。通常、ウィンドウの項目をハイライト表示するためにクリック機能を使う。左マウス・ボタンをクリックし、押したままにするのは、主に、選択項目内で選択する場合である。たとえば、サブメニューを表示する場合にメニュー・オプションをクリックして押したままにし、サブメニューから選択した後に放す。

### **クライアント (client)**

別のアプリケーションまたは (サーバー) コンピュータのサービス、データ、または処理を要求するユーザー、ソフトウェア・アプリケーションまたはコンピュータ。2 タスク環境では、クライアントはユーザー・プロセスとなる。ネットワーク環境では、クライアントはローカル・ユーザー・プロセスであり、サーバーはローカルまたはリモートとなる。

### **通信デーモン (Communication Daemon)**

OEM コンソールと同じコンピュータで実行されるプロセス。このプロセスでは、OEM コンソールおよび Oracle Intelligent Agent と情報がやりとりされる。

### **接続 (connect)**

有効なユーザー名およびパスワードによって Oracle データベースにアクセスすること。アカウント名およびパスワードによってオペレーティング・システムにログインするのと同じ。問合せを作成したり、変更する場合、またはデータベースに格納されている表示にアクセスする場合には、接続する必要がある。

### **コンソール (Console)**

1. メニュー、ツールバー、ランチ・パレット、およびフレームワークを提供し、オラクル社の各種ツールと他社のユーティリティにアクセスできる構造を備えたグラフィカル・ユーザー・インタフェース (GUI)。2. Windows NT または Windows 95 オペレーティング・システムのいずれかが稼働し、Oracle Enterprise Manager がインストールされたコンピュータ。コンソールは、OEM コンソールとも呼ばれる。

### **作成 (create)**

通常、その主要な特性を定義して、オブジェクト（表、ブロック、フィールドなど）を生じさせること。

### **Oracle Daemon Manager**

コンソールの通信デーモンを管理する。

### **データベース (database)**

1. 一連のオペレーティング・システム・ファイルであり、単位として扱われ、Oracle Server によって一連のデータ・ディクショナリ表およびユーザー表が格納される。データベースには、データベース・ファイル、REDO ログ・ファイル、制御ファイルの3種類のファイルが必要である。2. この一連のファイルに対応するディスク領域。3. 1つのデータベース・アプリケーションをサポートするのに必要なデータベース・オブジェクトのサブセット。

### **データベース管理者 (database administrator: DBA)**

1. Oracle Server またはデータベース・アプリケーションの操作とメンテナンスの担当者。データベース管理者は、データベースの使用状態を監視し、ローカル・コミュニティのユーザーの要件を満たすようにカスタマイズする。2. DBA 権限が付与され、データベース管理機能を実行できる Oracle ユーザー名。通常、上記2つは一致する。サイトごとに複数のデータベース管理者が存在できる。

### **データベース名 (database name)**

TNSNAMES.ORA ファイルの接続記述子に割り当てられた一意の名前。データベース名を使用することで、接続記述子を容易に参照できる。

### **データ定義言語 (data definition language: DDL)**

表またはビューなどのデータベース・オブジェクトを定義または削除する SQL 文のカテゴリ。たとえば、CREATE、ALTER および DROP 文など。

### **DLL**

Windows NT/95 プラットフォームで動的にリンクされたライブラリ。

### **データファイル (datafile)**

データベース・データのすべてが含まれるファイル。各データファイルは、1つのデータベースにだけ関係付けられる。

### **Oracle Data Manager**

Oracle データベースのデータの転送を可能にするツール。

### **デフォルト (default)**

必要なコマンド・パラメータまたは修飾子をユーザーが指定しない場合に、システムによって提供される値。

**検出 (discovery)**

サービスを識別し、それらを Oracle Enterprise Manager ナビゲータに追加するプロセス。

**検出キャッシュ (discovery cache)**

メモリー内にあるサービスとノードの情報リスト。

**配布ホスト (distribution host)**

ソフトウェアのパッケージおよびリリースの作成、配布および格納の中心として指定されているサーバー。

**イベント (event)**

インテリジェント・エージェントによって監視されるサービスに対応付けられた発生。ユーザーは、インテリジェント・エージェントによって監視したり、登録したりするイベントを選択できる。

**イベント管理システム (Event Management System)**

ネットワーク環境で発生する特定のイベント条件を監視する。

**エクスポート (export)**

オペレーティング・システム間、または Oracle データベース間でデータをアーカイブまたは移動するために、データベース・データをファイルに書き込むこと。モジュールのコピーをファイルまたはデータベースに格納すること。

**エクステンツ (extent)**

データベースの記憶領域割当ての論理単位で、多数の連続したデータ・ブロックからなる。

**ファイル (file)**

リスト、文書、索引、メモ、一連の手順など、単位として扱われるデータの集合。通常、ディスクに格納されたデータのことをいう。

**ファイル名 (filename)**

ファイル指定の名前コンポーネント。ファイル名は、ファイル自体が作成されたときにユーザーまたはシステムによって割り当てられる。

**修正ジョブ (fixit job)**

Oracle Enterprise ユーザーによって登録されたイベントに対応付けられたスケジュールされていないジョブ。修正ジョブが対応付けられたイベントが発生した場合、ジョブが自動的に実行されて問題が解決される。

**権限の付与 (grant)**

ユーザーにモジュールへのアクセス権を与えること。モジュールの作成者だけがアクセス権を他のユーザーに付与できる。

### **グループ (group)**

共通の位置または機能を共有する、データベース、リスナー、Name Server、ノードなどの同様のオブジェクトのユーザー定義の集合。

### **索引 (index)**

表およびクラスタに関係付けられたオプションの構造で、データにすばやくアクセスできる。

### **インスタンス (instance)**

バックグラウンド・プロセスとメモリ・バッファの組合せ。Oracle インスタンスのプロセスには、ユーザー・プロセスと Oracle プロセスの 2 つのタイプがある。

### **整合性制約 (integrity constraint)**

表の列に対するルールを宣言して定義する方法。

### **管理パック (Management Pack)**

OEM コンソールと統合された、利便性の高い一連の Oracle Tools で、Oracle データベースのパフォーマンスの監視とメンテナンスに使用する。管理パックは、Oracle Enterprise Manager とは別に購入する。

### **ナビゲータ (Navigator)**

ネットワーク内のすべてのオブジェクトをツリー・リストの形で表示し、ユーザー定義グループ、ノード、リスナー、Name Server、およびデータベースなどのオブジェクト、さらにそれらに含まれるオブジェクトを直接参照できる。

### **ノード (node)**

ネットワークに接続された、一意にアドレス指定できるコンピュータ。

### **Oracle Intelligent Agent**

OEM コンソールの通信デーモンと対話するプロセス。エージェントは、SQLNET および RPC を介して通信デーモンからの処理要求を受信し、処理する。また、エージェントは、SNMP によって SNMP マスター・エージェントとも通信できるので、サード・パーティの SNMP 監視ステーションは、Management Information Blocks (MIB) によって Oracle についての情報にアクセスできる。

### **Oracle プロセス (Oracle Process)**

Oracle Server のメンテナンス作業を行うユーザー・プロセスおよびバックグラウンド・プロセスの作業を実行するサーバー・プロセス。

### **OEM リポジトリ (OEM Repository)**

Oracle データベース内の一連の表であり、OEM コンソールで必要なデータと情報が格納されている。表は、作成元のアカウントによって所有される。

## OraTcl

Oracle による Tcl の拡張で、Oracle データベース固有のコマンドが含まれる。

### パッケージ (package)

関連するプロシージャ、ファンクションおよび別のパッケージ構成体を 1 つの単位としてデータベース内にカプセル化し、保存する方法を提供する。

### パッケージ本体 (package body)

パッケージのパブリックとプライベートのすべての構成体を定義する。

### パッケージ仕様部 (package specification)

パッケージのパブリック構成体を宣言する。

### プロシージャ (procedure)

特定のタスクを実行するためにまとめられた一連の SQL と PL/SQL 文。

### プロパティ・シート (property sheet)

ユーザーや表領域などの複合インスタンスを作成または変更する際、オプションを指定するために使われるダイアログ・ボックス。

### Q ファイル (Q Files)

待ち行列は、イベントとジョブの制御に必要とされる。これらは、エージェントが最初に起動したときに作成される。

---

#### Q ファイル 説明

---

|          |  |
|----------|--|
| ereg.q   | イベント登録待ち行列。コンソールに正常に登録されたイベントのリスト。                             |
| user.q   | ユーザー待ち行列。登録済みユーザーすべてのリストが含まれる。                                 |
| job.q    | ジョブ処理要求待ち行列。正常にスケジュールされたジョブすべてのリスト。ジョブをキャンセルすると、この待ち行列から削除される。 |
| jstat1.q | ジョブの結果待ち行列。結果がデーモンに正常に返される前に格納される。                             |
| evoccl.q | イベント発生待ち行列。結果がデーモンに正常に返される前に格納される。                             |

---

### REDO ログ (redo log)

データファイルに書き込まれる前のメモリー内にある変更されたデータベース・データを保護する一連のファイル。

### リポジトリ (repository)

Oracle データベース内の一連の表。

**ロール (role)**

ユーザーまたは他のロールに付与された関連権限の名前付きグループ。

**ロールバック・セグメント (rollback segment)**

トランザクションをロールバックする（取り消す）場合に、トランザクションのアクションを記録しておくデータベースの一部。ロールバック・セグメントは、読み込み一貫性の提供、トランザクションのロールバックおよびデータベースの回復のために使われる。

**スケーラビリティ (scalability)**

ソフトウェアまたはハードウェア製品が、将来のビジネスのニーズにどれだけ十分に対応できるかの評価基準。

**スキーマ (schema)**

表、ビュー、クラスタ、プロシージャおよびパッケージなどのスキーマ・オブジェクトの集合に名前を付けたもの。

**スキーマ・オブジェクト (schema object)**

データベースのデータを直接参照する論理構造。スキーマ・オブジェクトには、表、ビュー、順序、ストアド・プロシージャ、シノニム、索引、クラスタおよびデータベース・リンクなどがある。

**順序 (sequence)**

データベースの表の数値列に対し、一意の連続番号を生成するために使われるデータベース・オブジェクト。

**セッション (session)**

ユーザー・プロセスを介した、ユーザーの Oracle インスタンスへの特定の接続。

**サーバー (Server)**

UNIX または Windows NT オペレーティング・システムが稼動し、Oracle データベースがインストールされたコンピュータ。

**Simple Network Management Protocol (SNMP)**

管理者が 1 つの管理インタフェースで異種システムを管理できるプロトコル。

**スナップショット・ログ (snapshot log)**

スナップショットのマスター表と関係付けられた表。

**スナップショット (snapshot)**

リモート・ノードにあるマスター表の読み込み専用のコピー。マスター表に加えられた変更を反映するために、定期的にはリフレッシュされる。

### **SQL Worksheet**

SQL および PL/SQL コードを入力、編集および実行するためのウィンドウ。容易に検索できるように、発行されたコマンドの履歴が保持される。

### **シノニム (synonym)**

表、ビュー、スナップショット、順序、プロシージャ、ファンクションまたはパッケージの別名。

### **システム・グローバル領域 (System Global Area: SGA)**

データベース・ユーザーが共用するデータベース情報に使われるメモリーの領域。

### **表領域 (tablespace)**

データベースを分割してできる 1 つ以上の論理記憶単位。関連する論理構造をグループ化するのに 1 つの表領域が使われる。

### **ツール・コマンド言語 (Tool Command Language: Tcl)**

対話形式のプログラムにコマンドを発行するための業界標準の文字列処理言語。ジョブとイベントは、インテリジェント・エージェントによって処理される Tcl スクリプトである。

### **トポロジ (topology)**

ネットワークの相互接続および関連についての記述。Oracle Enterprise Manager の一部のバージョンでは、トポロジ・ファイルを使って、Oracle Enterprise Manager ナビゲータに管理可能な単位が移入される。

### **トリガー (trigger)**

関係付けられた表に対して INSERT、UPDATE または DELETE 文が発行される際、内部的に起動されるストアード PL/SQL プロシージャ。

### **ユーザー・プロセス (user process)**

アプリケーション・プログラムまたは Oracle Tool のコードを実行するプロセス。

### **ビュー (view)**

1 つ以上の表のデータのカスタマイズされた表示。「記憶問合せ」ともいう。

# 索引

## C

catbloxx.sql  
Oracle 拡張イベントの構成, 3-2  
catnsnmp.sql, B-4  
catsnmp.sql スクリプト, 1-18, B-4

## D

DBA アプリケーション, 起動, 2-10  
DBA (データベース管理者) 権限があるユーザー・アカウント, 設定, 2-3  
dbsnmp.address, A-10  
DBSNMP.POLLTIME, A-9  
dbsnmp.spawnaddress, A-11  
Diagnostics Pack, 3-2  
discnode.txt, 2-5

## G

GLOBAL\_DBNAME パラメータ, 1-3, 1-12, 1-17

## L

listener.ora, A-5  
listener.ora ファイル, 1-17

## N

NAMES.PREFERRED\_SERVER, 2-9  
NMI.LOG\_DIRECTORY, A-10  
NMI.LOG\_FILE, A-10  
NMI.TRACE\_DIRECTORY, A-10  
NMI.TRACE\_FILE, A-10  
NMI.TRACE\_LEVEL, A-10

## O

Oracle Enterprise Manager  
sysman ディレクトリ, B-2  
ツール, 2-10  
ディレクトリ構造, B-2  
ネットワーク・ディレクトリ, B-4  
Oracle Expert  
設定, 3-7  
Oracle Names, 1-17, 2-9  
Oracle Performance Manager  
設定, 3-5  
Oracle TopSessions  
設定, 3-2  
Oracle Trace  
設定, 3-3  
フォーマット表, 3-4  
リポジトリ表, 3-4  
ORACLE\_HOME ディレクトリ, B-2  
Oracle 拡張イベント  
の構成処理, 3-2, 3-7  
oratab ファイル, 1-11

## R

Repository Manager, 2-4  
root.sh, 1-8  
root.sh の正常な実行の確認, 1-10

## S

services.ora, 1-2, 1-11, 2-8, A-7  
setuid プログラム, 1-9  
setuid ルート, 1-9  
SID への接続性, テスト, C-4

smptsixx.sql  
  Oracle TopSessions の構成, 3-2  
  Oracle 拡張イベントの構成, 3-2  
smptsixx.sql スクリプト, 3-2  
snmp\*.ora ファイル・パラメータ, A-7  
snmp\_ro.ora, 1-2, 1-11, A-6  
snmp\_rw.ora, 1-2, 1-11, A-7  
SNMPAGENT ロール, B-4  
SNMP.CONNECT.service\_name.world.PASSWORD,  
  A-9  
SNMP.CONNECT.service\_name.world.USER, A-8  
SNMP.CONTACT.service\_name.world, A-9  
SNMP.INDEX.service\_name.world, A-8  
snmp.ora, A-6  
  サンプル・ファイル, A-6  
  パラメータ, A-7  
SNMP.ORACLEHOME.service\_name.world, A-9  
SNMP.SID.service\_name.world, A-8  
SNMP.VISIBLESERVICES, A-8  
SQL\*Net  
  構成ファイル, A-2  
sqlnet.ora, A-2, A-4  
sysman ディレクトリ, B-2

## T

---

Tablespace Manager  
  設定, 3-7  
TCP プロトコル, インテリジェント・エージェント,  
  A-10  
TNS\_ADMIN 環境変数, 1-3, 1-12  
tnsnames.ora, A-3, A-4  
topology.ora ファイル, 2-8  
Tuning Pack, 3-7

## U

---

utlchain.sql  
  Oracle 拡張イベントの構成, 3-7  
  Tablespace Manager の構成, 3-7  
utlxplxx.sql  
  Oracle 拡張イベントの構成, 3-2

## W

---

Windows NT レジストリ, 1-3

## い

---

イベント  
  の構成処理, 3-2, 3-7  
インテリジェント・エージェント  
  snmpagent ロール, B-4  
  TCP プロトコル, A-10  
UNIX  
  setuid ルートとしてインストール, 1-9  
  インストール, 1-8  
  起動と停止, 1-13  
  検出アルゴリズム, 1-11  
  構成, 1-11  
Windows NT  
  インストール, 1-2  
  起動と停止, 1-5  
  検出アルゴリズム, 1-2  
  構成, 1-2  
  ユーザー・アカウントの作成, 1-3  
イベントおよびジョブの追跡, 2-6  
インストール  
  UNIX, 1-8  
  Windows NT, 1-2  
構成  
  UNIX, 1-11  
  Windows NT, 1-2, 1-6  
  必要なロールとユーザー, 1-18  
  ファイル, B-4  
  ルート許可, 1-9  
インテリジェント・エージェントのデータ収集サービ  
  ス  
  Windows NT  
  起動と停止, 1-16  
  Windows UNIX  
  起動と停止, 1-16

## か

---

書込み許可  
  networkagent ディレクトリ, B-4

## き

---

起動  
  DBA アプリケーション・ツール, 2-10  
  Oracle Enterprise Manager, 2-6  
  Oracle Enterprise Manager ツール, 2-10

## け

---

現在のジョブおよびイベント・ファイル, B-4  
検出

- topo\_ops.ora ファイルによる, 2-7
- 「サービスの手動定義」ウィザード, 2-7
- 「サービスのリフレッシュ」ウィザード, 2-7
- 「新規サービスの検出」ウィザード, 2-7
- ネットワーク・サービス, 2-7

## こ

---

構成ファイル

- listener.ora, A-5
- services.ora, A-7
- snmp\_ro.ora, A-6
- snmp\_rw.ora, A-7
- snmp.ora, A-6
- SQL\*Net, A-2
- sqlnet.ora, A-2, A-4
- tnsnames.ora, A-3, A-4
- コンソール, A-2
- リモート・ノード, A-4

## さ

---

サービスの検出, 2-7  
「サービスの手動定義」ウィザード, 2-7  
「サービスのリフレッシュ」ウィザード, 2-7  
作成

- Oracle Expert リポジトリ表, 3-7
- Oracle Trace フォーマット表, 3-4
- Oracle Trace リポジトリ表, 3-4
- Windows NT ユーザー・アカウント, 1-3

## し

---

ジョブ出力ファイル, ユーザー設定リスト, B-4  
「新規サービスの検出」ウィザード, 2-7

## せ

---

設定

- Diagnostics Pack, 3-2
- Oracle Expert, 3-7
- Oracle Performance Manager, 3-5
- Oracle TopSessions, 3-2

- Oracle Trace, 3-3
- SQL Analyze, 3-8
- Tablespace Manager, 3-7
- Tuning Pack, 3-7

## つ

---

ツール, 起動, 2-10

## て

---

ディレクトリ構造, B-2

## と

---

- ドメイン・ユーザー, 1-5
- トラブルシューティング, C-2
  - エージェント, 1-7, 1-13
  - コンソールの設定, 2-17

## ね

---

ネットワーク・ディレクトリ, B-4

## は

---

バッチジョブとしてログオン, 1-3

## ふ

---

- 複数のデータベース・サービス
  - snmp.ora パラメータ, A-9
  - エージェント構成, A-9

## へ

---

変換

- ユーザー定義のグラフ, 3-5

## ゆ

---

- ユーザー設定リスト, ジョブ出力, B-4
- ユーザー定義のグラフ
  - 変換, 3-5
- 優先接続情報リスト, コンソールでの設定, 2-11

## り

---

- リカバリ・カタログ, 2-17
  - 設定, 2-14
  - 登録, 2-16
- リポジトリ
  - 一意のユーザー名, 2-6
  - の接続, 2-6
- リポジトリ表
  - Oracle Trace, 3-4
- リポジトリ・ユーザー・アカウント、設定, 2-2
- リモート SYSDBA アクセス
  - SYSDBA アクセス, 2-11